

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所の歩み：
創立70周年・人間文化研究機構移管10周年

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002530

国立国語研究所の歩み

創立70周年・人間文化研究機構移管10周年



大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

国立国語研究所の歩み

創立70周年・人間文化研究機構移管10周年



目次

創立 70 周年・移管 10 周年に寄せて

創立 70 周年・移管 10 周年を迎えて（国立国語研究所長 田窪行則）	7
祝辞（文部科学省研究振興局長 村田善則）	9
式辞（人間文化研究機構長 平川南）	11
祝辞（国際交流基金日本語国際センター所長 砂川裕一）	13
国立国語研究所の創立 70 年と移管 10 周年をお祝いする （日本語学会会長／大阪大学大学院文学研究科教授 金水敏）	14
祝辞（日本言語学会元会長 上野善道）	16
祝辞（公益財団法人日本語教育学会会長 石井恵理子）	18
A message of congratulations (Bjarke Frellesvig, Professor of Japanese Linguistics, Faculty of Oriental Studies, University of Oxford)	19
A message of congratulations (Dr. Jo-Wang Lin, Director of Institute of Linguistics, Academia Sinica)	21
贺词（北京日本学研究中心主任 郭连友）	22
Congratulatory Statement (Laura E. Lyons, Interim Dean, University of Hawai'i at Mānoa)	24

記念座談会

創立 70 周年記念座談会	27
移管 10 周年記念座談会	47

資料

沿革	75
組織の変遷	79
創立以降の研究課題一覧	88
科研費による研究課題一覧	103
創立以降の刊行物一覧	115
データベース一覧	132

創立70周年・移管10周年に寄せて

創立 70 周年・移管 10 周年を迎えて

国立国語研究所長 田窪行則

国立国語研究所は 1948 年 12 月 20 日の設立で 2018 年 12 月 20 日に創立 70 周年を迎えました。また、2009 年 10 月 1 日に大学共同利用機関法人人間文化機構に移管し、2019 年 10 月 1 日がちょうど 10 周年に当たります。その二つの周年を記念して、さまざまな催しが行われますが、本書はこの二つの周年を記念して、これまでの国語研の活動を記録するために編集されました。創立当初は国民の国語生活を豊かにするための科学的な基礎的研究を行うことがその設立の目的であり、学会や研究者コミュニティの意見を聞いて民主的な運営を行うことがうたわれています。それまで広範囲なデータに基づいた実際に使われている話し言葉や書き言葉に関する実証的な研究は行われていませんでした。計算機を用いた研究、統計学、大規模アンケートを用いた調査なども日本では国語研が最初だったと思われます。また、三代目所長の林大博士が漢字の JIS コード化が注目されます。現在、計算機で多くの漢字が使えるのは博士が常用漢字の倍以上の漢字にコードを当てはめてくれたおかげです。

国語研は 2009 年 10 月に大学共同利用機関法人人間文化機構に移管しましたが、その際、略称を「国研」から「国語研」と替えました。これは他機関に「国研」を用いているものがあるのと「国語」が入っているほうが機関の性質を表しているからです。英語の名称も National Institute for Japanese Language and Linguistics とし略称を NINJAL としました。

国語研は日本語の音声コーパス、書き言葉の大規模均衡コーパスの作成を行い日本のコーパス構築の先駆的役割を果たしてきました。人間文化研究機構に移管してからは、一般言語学的な視点を加えて、日本語以外の言語との対照による日本語の特徴の取り出し、日本語の特徴から明らかにできる一般言語学的性質を研究してきています。最近まで日本語コーパスは書き言葉は現代語、話し言葉は講演や模擬対話に限られていましたが、第 3 期中期計画には上代から近代にわたる歴史コーパス、日常会話コーパスの構築を行っています。日本語教育に関しても様々な母語や学習歴を持つ日本語学習者が使う日本語の大量データを収集し、コーパス化する野心的試みを行っています。これらは第 3 期の終わりには完成し、公開できる予定です。

また、これまで主に日本語のみで公開してきた成果を英語で発表することで国語研の研究、ひいては日本の言語研究を世界に知らせる役割を果たしています。この一環として、全 12 巻の日本語に関する言語学ハンドブックシリーズ(*Handbook on Japanese Language and Linguistics*) を De Gruyter Mouton 社から公刊中です。これも 3 期の終わり

までには全巻の完成を目指しています。

2021 年には第 4 期中期計画が始まります。現在将来計画委員会では 3 期の成果を踏まえ 4 期に向けた新しい国語研の活動への構想を練っている最中です。国語研へのますますのご指導と応援をお願いいたします。

祝 辞

文部科学省研究振興局長 村田善則

「国立国語研究所創立70周年・大学共同利用機関法人人間文化研究機構移管10周年記念式典が執り行われるに当たり、一言御挨拶申し上げます。

国立国語研究所が、国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究を行い、併せて国語の合理化の確実な基礎を築くため、昭和23年12月に創設されてから70年余りが過ぎました。

その間、昭和43年には文部大臣の所轄から文化庁長官の所轄に移行し、さらに、平成13年には独立行政法人化され、業務の範囲も、外国人に対する日本語教育に関するものも含まれることになるなど様々な変遷がありましたが、国立国語研究所は、着実に実績を重ねてこられました。

このような中、平成19年12月の閣議決定において、大学共同利用機関に移管することが決定されました。これを受け、文部科学省では、科学技術・学術審議会学術分科会学術研究推進部会のもとに「国語に関する学術研究の推進に関する委員会」を設置し審議を進め、その報告を踏まえ、平成21年10月、大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設置する大学共同利用機関として新たに発足しました。

新しい国立国語研究所は、国立大学法人法に基づき、大学共同利用機関、すなわち「大学における学術研究の発展等に資するために設置される大学の共同利用の研究所」の一つに位置付けられ、同法施行規則において、その目的を、「国語及び国民の言語生活並びに外国人に対する日本語教育に関する科学的な調査研究並びにこれに基づく資料の作成及び公表」と定められています。

このように大学共同利用機関となった国立国語研究所は、その使命に応え、国内外の大学等と連携し、日本語研究の基礎データとなる大規模な言語資源の整備等を進めてこられました。現在、その成果として、日本語データの各種コーパスへの集約・体系化が飛躍的に進展し、研究者コミュニティや大学、研究所にとどまらず、日本語学習者や産業界にも広く活用されています。

また、近年、日本語研究について、国立国語研究所と海外の共同研究者数が大幅に増加するなど海外の日本語研究も活発になるとともに、本年6月28日に「日本語教育の推進に関する法律」が公布、施行されるなど、日本語教育に関する関心も高まっております。

国立国語研究所におかれましては、このような期待に応え、このたびの創設70周年及び大学共同利用機関としての10周年を契機とし、今後とも、自然科学を含む幅広い分野の研究者と協力しつつ、新たな研究領域の開拓と研究成果の発信にますます取り組んでいかれますことを期待します。

結びに、これまで在籍された研究者と関係者の御尽力、各界からの御協力、御支援に敬意と感謝の意を表しますとともに、国立国語研究所の一層の発展を祈念しましてお祝いの言葉とします。

式 辞

人間文化研究機構長 平川 南

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所が創立 70 周年を迎えるとともに、人間文化研究機構に移管となって 10 周年を迎え、その記念式典開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

国立国語研究所は、戦後まもなく国民生活の向上と文化の発展のためには最も基盤となる国語研究が必要とされ、国語に関する総合研究機関として昭和 23 年（1948 年）12 月に創設されました。

その後、国立国語研究所は、平成 13 年（2001 年）の独立行政法人化を経て、平成 21 年（2009 年）10 月に、大学共同利用機関法人人間文化研究機構に移管されました。

人間文化研究機構は、15 年前の平成 16 年（2004 年）に学術機関の中核拠点である大学共同利用機関法人としてスタートいたしました。

人間文化研究機構は、「人間とその文化を総合的に探求する学問」と定義される人文学のもと、国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館・国際日本文化研究センター・総合地球環境学研究所・国立民族学博物館そして国立国語研究所の 6 機関で構成されています。

今、人文学の細分化が著しい中、「歴史」「文化」を俯瞰することのできる大きな研究の総合化が強く求められています。本機構は法人第三期の 2016 年から 6 機関が中核となり、国内外の大学等研究機関や地方自治体・産業界などと連携し、6 ヶ年計画で現代的諸課題の解明に資する 17 本の「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指しています。

国立国語研究所も、そのミッションである「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」という課題に研究所をあげて取り組むとともに、日本の消滅危機言語・方言研究および言語資源に関する共同利用の利便性を高めるコーパス開発など、国語研の先端的研究は大学共同利用機関として十分に存在意義を発揮しております。

このように国立国語研究所は、70 年という長期にわたり日本語に関する総合学術研究機関として研究業績を築き上げ、今や我が国を代表する日本語研究のナショナルセンターの役割を果たしています。

これからも国立国語研究所をはじめ人間文化研究機構一丸となって、邁進してまいり

ますので、皆さまのご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げまして、記念式典の式辞といたします。

祝 辞

国際交流基金日本語国際センター所長 砂川裕一

この度、国立国語研究所が創立 70 周年、および人間文化研究機構移管後 10 周年を迎えられますこと、心よりお祝いを申し上げます。

また、貴研究所が 1948 年 12 月の創立以来、長きにわたって日本語と日本語教育についての研究を推し進め、研究成果や調査資料を蓄積し、研究者を始め広く一般にも公開してこられたことに敬意を表します。

国立国語研究所と国際交流基金日本語国際センターは、2001 年 10 月から 2009 年 9 月まで政策研究大学院大学とともに 3 機関連携の大学院プログラムを運営し、世界各国の日本語教育機関で中堅的な指導者として活躍している人たちを受け入れ、数多くの学位取得者を輩出しました。また 2016 年 4 月には、国立国語研究所と国際交流基金日本語国際センター両機関における日本語教育研究の一層の充実を図るとともに、国際交流の推進と人材の育成に寄与することを目的とする交流協定を締結し、本年協定を更新致しました。

日本語教育を取り巻く環境は、国内的にもまた諸外国においても大きく変化をしており、日本の国内事情と国外での実情が相互に関連しつつ極めて流動的な状況にあります。国際交流基金日本語国際センターは創立以来 30 年に渡って諸外国での日本語教育に関わる情報や日本語を母語としない日本語教師の養成・研修に関わる知見を積み上げてきており、また JF 日本語教育スタンダードや各種教材の開発を進めてきております。

一方、国立国語研究所では、日本語と外国語の対照研究、第 2 言語としての日本語や日本語習得の研究、日本語教材の開発など、日本語教育の基礎研究と応用研究を精力的に推進しているほか、母語話者や学習者の書き言葉コーパスや話し言葉コーパスの構築による研究者への研究資源の提供や、海外で日本語教育に携わる人たちの外来研究員としての受け入れが行われております。

今後とも国立国語研究所の研究力また実践力に学びつつ、学術的知見の共有を進め、連携・協力関係をより一層充実させていくことを祈念して、お祝いのことばとしたいと思います。

国立国語研究所の創立 70 年と移管 10 周年を お祝いする

日本語学会会長／大阪大学大学院文学研究科教授

金水 敏

このたびは、国立国語研究所創立 70 周年および人間文化研究機構への移管 10 周年、まことにおめでとうございます。日本語学会会長として心よりお慶びを申し上げます。

日本語学会の前身である国語学会は戦前の 1944（昭和 19）年に初代会長橋本進吉氏が就任して出発し、一方の国立国語研究所は戦後の 1948（昭和 23）年に発足しました（1949 年より西尾実氏が初代所長）。以来、学会と国立の組織という設立基盤は異なっているけれども、日本語の科学的な探求をめざすという目的を一にした二つの団体は、あたかも兄弟の如く、手を携えてその歴史を歩んで参りました。

目に見える共同事業としては、『日本語研究文献目録 雑誌編 [フロッピー版]』（国語学会・国立国語研究所編、秀英出版刊、1989 年）、『国語学研究文献索引 音韻篇』（国語学会・国立国語研究所編、秀英出版刊、1994 年）、『国語学研究文献索引 国語史篇』（国語学会・国立国語研究所編、秀英出版刊、1996 年）という 3 つの刊行物の出版があります。また、日本語学会（国語学会）と国立国語研究所の共同事業である「国語学研究文献総索引」のデータ（約 10 万件）は、国立国語研究所が発行していた『国語年鑑』および『日本語教育年鑑』のデータと統合され、現在国立国語研究所のサイト上で「日本語研究・日本語教育文献データベース」として公開されています。2004 年 5 月に行われた日本語学会創立 60 周年記念国際シンポジウムは、国立国語研究所との共催行事となりました。

むろん、このような有形の成果のみならず、歴代の国立国語研究所の所長や所員の皆様は、日本語学会（国語学会）の有力な会員として研究・運営の両面で大いに活躍してこられました。例えば研究所の第 2 代所長の岩淵悦太郎氏と第 3 代所長の林大氏は、同時期、国語学会の代表理事（会長に相当）も務められました。また日本語学会（国語学会）代表理事・会長のうち金田一春彦氏、徳川宗賢氏、野村雅昭氏は、かつて国立国語研究所の研究員・所員として研鑽を積まれていました。日本語学会の機関誌（『国語学』『日本語の研究』）の人気企画である学界展望号作成に当たっては、毎回、国立国語研究所研究図書室の所蔵資料を大いに利用させていただいております。

以上に示されるように、国立国語研究所なかりせば、今日の日本語学会の姿はあり得ないのであり、学会会長として、改めて研究所への感謝の念を禁じ得ません。国立国語

研究所と日本語学会は切っても切れない学術的な絆で結ばれており、その関係は今後とも揺るぎのないものと確信しております。国立国語研究所のますますのご発展をお祈りし、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝 辞

日本言語学会元会長 上野善道

国立国語研究所が創立 70 周年を迎えたのを記念して、一言お祝いを申し述べます。

その長い歴史の中では、自ずと何度かの変遷を経ています。ホームページにある「写真で見る国立国語研究所の歴史」から主要なものを抜き出し、適宜補足をしつつ概観してみます。まず、敗戦と米軍占領下の状況で戦後の国語国字問題を扱う研究機関への強い要望を受け、1948(昭和 23)年 12 月に新宿区の明治神宮聖徳記念絵画館内に文部省の機関として国立国語研究所は設置されました。初代所長は西尾実。その後、千代田区一ツ橋を経て、1962 年岩淵悦太郎所長の時に北区西が丘に移転。1968 年には文化庁の機関に移行します（私が知っているのはこの時期からです）。2001 年 4 月に国の機関を離れて独立行政法人国立国語研究所に移行し、2005 年立川市に移転。そして、独立行政法人整理合理化計画の中で 2009 年 10 月に大学共同利用機関法人人間文化研究機構に移管し、間もなく 10 周年を迎えます。

組織形態も三度変わっていますが、注目すべきは、研究のあり方を規定する設置目的の変化です。それまでの、国語の合理化・外国人に対する日本語教育の振興という「国の政策のための調査研究機関」から、大学共同利用機関法人化を境に、「国語に関する学術研究の中核」として大学等と連携しながら共同研究を促進させる機関へと大きく転換した点です。

それぞれの段階の使命に応じた研究を進めた国立国語研究所は、数多くの業績をあげてきました。これまでの一連の成果物は電子公開され、誰でも読めるようになっています。

学会との関わりで見ると、「国語」との関係から「国語学会」（1944 年発足、2004 年より「日本語学会」）が中心となってきたことは言うまでもありません。その中で、2009 年の移管の時にたまたま日本言語学会（1938 年発足）の責任者であった私は各種の準備委員会に駆り出されることになりました。いくつかの提案をした中で、名称を「国立日本語研究所」に変えることも主張しましたが、国には受け入れられませんでした。その点を別にすれば、移管後の二人の所長のもとで言語学会その他との関わりも密になり、共同利用機関としての態勢が確立してきていると受け止めています。日本音声学会・日本語学会の責任者も務めた立場から見ても、研究分野が拡大し、共同研究も一層活発になり、国際発信の面でも前進しており、このような研究の流れをさらに推し進めて行ってほしいと思っています。

最後に、今後の要望を付け加えることをお許し下さい。どの組織でも継続的発展のた

めには世代交代がうまく行くことが必須です。これは喫緊の課題だと思われます。今一つ、共同研究がその使命ではありますが、研究の根本は個人にあると私は考えています。共同研究、（ないし特定のグループ）に馴染まない人の中にも勝れた人材が少なくありません。そういう人たちも何らかの形で活躍する場が得られるようになればと願っています。

70 年というのは一つの節目に過ぎません。この研究所が永続的な機関としてますます発展し、日本語研究が深化することを祈念してお祝いの言葉といたします。

祝 辞

公益財団法人日本語教育学会 会長 石井恵理子

国立国語研究所が創立 70 周年、人間文化研究機構移管 10 周年を迎えられますことを心よりお祝い申し上げます。

日本語教育学会は、国語研究所とたいへん深いつながりを持ちつつ歩んで参りました。第 2 代会長の林大先生を初めとし、野元菊雄先生、水谷修先生、西原鈴子先生と、国語研究所の歴代所長および研究所の日本語教育の柱として活躍された方々が当学会の会長を務められ、設立時期から新しい時代の日本語教育の在り方を模索し、新たな研究・実践領域としての基盤を整えていく本学会の歩みをしっかりと進めてくださいました。まだ日本語教育の教材や教育方法に関する書籍や資料もわずかで、日本語教育に関する授業科目を持つ大学も限られた時代、国語研究所が日本語教育に関する研究成果を元に実施した研修や教材等の開発等の事業は、日本語教育の実践及び研究の知見として多くの教師や研究者にとって、貴重なものでした。

私は 1988 年より国語研究所の研究員として、日本語教育センター日本語教育指導普及部から、独立行政法人化に伴い日本語教育部門第一領域日本語教育部門 へという組織改編を経て、2004 年まで勤めさせていただきました。1980 年代から今日までの日本語教育の展開は、まさに激動というべき大きな変化の時期で、第 2 言語習得の理論や教育理念について、学習とは何か、教師の役割をどのようなものとして捉えるか等、根本的な問いに立ち返った議論が国際的に展開されました。また、学校教育が対象としてきた学習者像とは異なる多様な学習者の出現により、個々人の生活や就労場面でのコミュニケーションを支え、キャリア形成の基盤となることばの育成や、多様な言語文化の人々が共生する社会の構築に資することばといった新たな課題が現れています。

昨今、日本語教育には社会の動きに即応し、喫緊の課題に対応することが求められ、多くの人や組織による取り組みがなされていますが、そうした取り組みを進める一方、人間の営みの核となることばの問題を深く、広く追究することが人間文化の本質的理解のために必須です。国内外の連携協力体制等による大規模な調査研究や理論的枠組みの構築、長期にわたる大量データの蓄積等、言語研究の確固たる基盤を構築していくことは、ことばに関する多様な専門性を持った研究者の集結する組織である国語研究所によってこそ進められるものと思います。

人と社会の形成基盤であり財産であることばの研究の発展・充実にお力を尽くし大きな功績を積み重ねていらっしゃる国立国語研究所のさらなるご発展を心から願っております。

A message of congratulations

Bjarke Frellesvig

Professor of Japanese Linguistics, Faculty of Oriental Studies, University of Oxford

It gives me great pleasure, on behalf of the University of Oxford, to congratulate the National Institute for Japanese Language and Linguistics on both the 70th anniversary of your foundation and on the 10th anniversary of the transfer of the Institute into the National Institutes for the Humanities. Since its foundation, the Institute has been at the very core of studies of Japanese dialectology and documentation of language and language usage in Japan and you continue to play a central role in this regard both within Japan and internationally. The Institute has also for a long time been the leader in development of annotated electronic corpora of the Japanese language, both spoken and written, and the most important resources of this kind are developed and hosted at the Institute.

With the transfer ten years ago into the National Institute for Humanities ten years ago came not only the new abbreviation of the English name of the Institute, NINJAL (as opposed the earlier unpronounceable NIJLL), but also a more international orientation in both collaboration, research and publication outlook. It was also at the start of this period that the development of the *Corpus of Historical Japanese* was initiated, adding pre-modern Japanese to the large group of corpora of Japanese at NINJAL, and the establishment of research groups with both internal and external members working together on the corpus-based study of most aspects of pre-modern Japanese language.

The beginning of this latest ten-year period also marked the beginning of increasing collaboration and exchange between NINJAL and the University of Oxford, particularly focussed within the historical corpus group, with joint symposia, projects and publications. The collaboration became more formalized when the two institutions in 2015 agreed and signed a Memorandum of Understanding which is valued and appreciated by both sides. Most recently, the *Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese*, which is the most sophisticated, detailed and extensive annotated corpus of Old Japanese in existence, was added to the historical corpora at NINJAL as a freestanding, joint corpus and published online in March 2018.

NINJAL is a leading force both domestically and internationally in the study and understanding of the Japanese language, and in developing education in Japanese language. It has been a privilege for me

personally to see first-hand and even take some small part in the international growth and success of NINJAL over the past ten years. I hope that the collaboration between our two institutions may continue to grow and develop in the future.

I wish you continued success for many years to come.

A message of congratulations

Dr. Jo-Wang Lin

Director of Institute of Linguistics, Academia Sinica

On behalf of Institute of Linguistics, Academia Sinica (ILAS), It is my great pleasure to congratulate The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL) on the occasion of the 70th anniversary of its foundation and the 10th anniversary of its transfer into the National Institutes for the Humanities. For 70 years, NINJAL has conducted comprehensive research on the Japanese language and endeavored to make the results of corpora and database research available for professional researchers, scholarly community and the general public in Japan and throughout the world. I am honored to celebrate this remarkable institute and I applaud the great goals that NINJAL sets for itself and the ways in which NINJAL tries to achieve them. As a partner of NINJAL, ILAS has seen how important it is to promote collaborative research between institutes and universities and has benefited greatly by way of such academic cooperation. Over the years, this close collaboration has yielded to support ILAS's faculty members in many ways, such as to facilitate the use of the results of NINJAL's linguistic research or to jointly host an international conference. I hope the friendship and partnership between NINJAL and ILAS will get stronger and stronger. I wish NINJAL continued success and congratulations once again on its 70th anniversary of the foundation and the 10th anniversary of its transfer into the National Institutes for the Humanities.

贺 词

北京日本学研究中心主任 郭连友

今年是日本国立国语研究所创立70周年暨人间文化研究机构移管10周年。在这值得纪念的日子里，作为多年的合作伙伴，我谨代表北京外国语大学北京日本学研究中心向国立国语研究所田窪行则所长以及国立国语研究所的全体成员致以诚挚的祝贺！

众所周知，国立国语研究所是日本最具权威的日本语言研究机构。创立七十年来，在日本语言研究、记录整理日本各时代、各地区的语言、构建和提供研究数据库、语料库、开展国际合作、接收外国留学生、培养国内外年轻学者等方面成就卓著，受到了国内外日本语言研究领域同行们的高度评价。

北京日本学研究中心成立于1985年，设有日本语言、日语教育、日本文学、日本文化、日本社会和日本经济等6个研究方向，是一所旨在培养日本学研究硕士、博士等高层次人才为使命的教学、科研机构，同时也是中国国内屈指可数的、集教学、科研、图书信息、学术文化交流为一体的综合学术平台。

国立国语研究所自2014年与北京日本学研究中心签署学术交流协议以来，两家研究机构学术交流互动频繁，不仅有共同举办研讨会、学者之间的互访等交流形式，国立国语研究所还接受我中心多名博士研究生访日研修，在日语研究人才培养方面也给予了我们大力帮助。对此，我们一直心怀感激，借此机会，对多年来给予北京日本学研究中心的高度信赖和大力关照表示衷心的感谢！

最后，衷心祝愿国立国语研究所能够继续秉承一直以来的优良的学术研究传统和开放的国际合作理念，不断进取，取得更加丰硕的研究成果。同时也衷心希望我们两家的合作能够长久持续，更加务实多样，取得累累硕果，为中日两国的文化交流做出实实在在的贡献。

（日本語訳）

今年は日本国立国語研究所が創立70周年・人間文化研究機構移管10周年です。このような記念すべき年にあたり、長年の共同研究仲間として、北京外国語大学北京日本学研究中心を代表させていただき、国立国語研究所の田窪所長及び国立国語研究所のスタッフ全員に、心よりお祝い申し上げます。

ご周知のとおり、国立国語研究所は日本で最も権威のある日本語研究機関です。創立70

年以來、日本語研究、日本の各時代・地域の言語の記録・整理、研究データベース・コーパスの構築・公開、海外との共同研究、外国人留学生の受け入れ、国内外の若手研究者の養成などの面において、輝かしい成果を出し、日本語研究の領域で世界から注目を浴びています。

北京日本学研究センターは1985年に成立し、日本語・日本語教育・日本文学・日本文化・日本社会と日本経済という六つのコースを設けており、日本学を研究する修士・博士など高度人材を養成することを目指す教育・研究機関です。また、中国国内では教育、研究、図書情報、学術交流を一体化するめずらしい総合学術機関です。

国立国語研究所は、2014年に北京日本学研究センターと学術交流契約を結んで以来、お互いに交流を深め、共同研究シンポジウムの開催と研究者の相互訪問のみならず、北京日本学研究センターの博士数名を訪日研修の形で受け入れてくださり、日本語研究の人材を養成する面では大いに協力を賜りました。これに対して、心より感謝申し上げます。この機会をお借りして、長い間北京日本学研究センターに高い信頼と多大なご協力をくださることに厚く御礼申し上げます。

最後に、国立国語研究所は従来の優れた学術研究の伝統と開放的な国際合作理念を一貫させ、引き続き邁進し、より実り豊かな成果を収めるようお祈り申し上げます。また、国立国語研究所と北京日本学研究センターは末長く合作し、多大な成果を挙げ、中日文化交流に貢献するようお祈りいたします。

(日本語訳：劉犀灵)

Congratulatory Statement

Laura E. Lyons

Interim Dean

College of Languages, Linguistics, & Literature, University of Hawai‘i at Mānoa

On behalf of the University of Hawai‘i at Mānoa (UHM), I would like to offer my sincere congratulations to the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL), the director-general Dr. Yukinori Takubo, and all the current and previous institution members, on this special occasion of the 70th anniversary of the establishment of the institution in 1948, and the 10th anniversary of NINJAL’s joining the National Institutes for the Humanities in 2009.

Because of strong mutual interests in what we have to offer to each other, and thanks to the director-general Takubo’s initiative, UHM established a formal research exchange partnership with NINJAL in February 2018. Since the establishment of this relationship, our two institutions have already co-organized four successful international linguistics conferences and workshops in Tokyo and Oahu with new collaborations on the horizon. It is such an honor and privilege for our UHM researchers to exchange their research expertise and resources with their counterparts in the NINJAL, and we sincerely hope that our partnership will contribute to further development of the field of Japanese Linguistics and help to cultivate future generations of Japanese linguists in Japan, in the U.S., and all over the world. Our college has many agreements with other institutions around the world, but I can think of no other partnership that has produced so much for faculty and students so quickly or so successfully as our association with NINJAL.

Once again, many congratulations on celebrating these two important and impressive historical milestones. We look forward to having a long-term relationship with NINJAL and continued cooperation through academic events and researcher/resource exchanges.

記念座談会

創立70周年記念座談会



日 時 2019 年 4 月 10 日（水）13 時 30 分～15 時 15 分

場 所 国立国語研究所小会議室

出席者 相澤 正夫（名誉教授）

大西拓一郎（言語変化研究領域教授）

小磯 花絵（音声言語研究領域教授）

田中 牧郎（明治大学国際日本学部教授）

山崎 誠（言語変化研究領域教授）

横山 詔一（言語変化研究領域教授）

司 会 柏野和佳子（音声言語研究領域准教授）

柏野:では、皆さんよろしくお願ひします。過去を振り返りながら、それぞれ皆さんが「国語研のこれはすごい」と思ったものを、順番に伺わせてください。相澤さんからお願いします。

相澤:私は1984年7月に入所したんですけれども、今年は2019年ですから、創立70年の、ちょうど真ん中の年に入所していることになります。入所以前の35年間については、実は直接は体験していないんですが、噂だとか、伝承されてきた中の1つとして、国語研が特別の設置法によってできあがった、その最初のころの企画については、改めて報告書とか年報とかを読んでみると、やっぱりすごいなと思います。特に最近そう思うようになりました。

具体的に言うと、『八丈島の言語調査』という報告書が国研報告の1です。その次に『言語生活の実態』、副題が「白河市および付近の農村における」というのが国研報告の2です。八丈島のほうは、何と1950年の3月に出ているんです。

横山:調査は1949年です。1年で報告書が出来た。

小磯:本当すごいですよね、あの頃の。

横山:創立されたのが1948年の12月だった。1949年の6月に調査をやってるから、もう創立以前から準備はしてたと思います。

柏野:素晴らしいですね、なるほど。

相澤:今横山さんのおっしゃったとおりで、そのスピード感というか集中力というか、熱意というか、熱ですよ、それがどこから来ているのかなと思うんですけれども。

横山:データの集計などは手回し計算機でやってたんだよね。

相澤:統計的なことも十分に取込んでやってるんですね。設置法を改めて確認したいんですが、読み上げていいですか。シンプルなんです、とっても。「国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究を行い、あ

わせて国語の合理化の確実な基礎を築くために、国立国語研究所を設置する」と。前半のほうの「科学的調査研究」という言葉が効いているんじゃないかなと。本当にそれを真剣に受け止めてやっているなという印象です。新しい方法を開発したり概念を作り出したりすると同時に、国語の合理化、特に共通語化というテーマに真剣に取り組んでいる、熱のようなものが充満している様子が見えるんですね。そもそもの初めにこういう研究者たちの仕事があって、報告書もすぐに出たということが、その後の引き金になって、いろいろな調査研究が派生していったという気がします。



相澤正夫氏

具体的に言うと、例えば「言語形成期」という用語と概念ですね。科学的調査研究によってそれを実証したいという気持ちが強く伝わってきます。特に白河調査では、現地の児童・生徒と、疎開して来た児童・生徒の比較対照の中から、それまで客観的に実証されていなかった「言語形成期」を、グラフできれいに出来るような形で実証したということで、その後のいろんな調査研究の嚆矢と位置付けられると思います。

面白かったのは、これ、真田信治ほか編著の『社会言語学図集』なんですけど、この本の中で一番古いデータを使って解説している章は何かって言うと、「言語形成期の根拠」

というところなんです。参考文献として、調査のメンバーだった北村甫氏の、1952年の「子どもの言葉が移住によってどう変わるか」という『言語生活』8号に載った論文が挙がっています。

柏野：またすぐにそれが。

相澤：今でも生きている基本的な概念がこの時に実証されたというのは、大きなことだなと思うんです。言語習得の臨界期の話や、「生え抜き」というのをどう定義するかなど、その後の調査研究にとって、無しでは済ませられない基礎の1つがここで固められた、そんな気がします。

一方、私の入所後の35年間には、自分が関わってきたものも多いので、なかなか言いにくいんですが、現在これだけコーパスが前面に出てきた、その最初のほうの中核的な仕事として『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）は、ちょっと外せないなというふうに思っています。でもこれは小磯さんあたりから話題にしてもらうのがいいように思いますので、これ以上は言わないことにしておきます。

柏野：ありがとうございます。何かこの話題につなげたほうがいい方、いらっしゃいますか。順番にいいですか。

大西：出た研究成果をすぐに公表できる手段として、『言語生活』があったというのは大きかったなと感じます。学術雑誌のことを考えたら、投稿・査読という過程を踏んでたら、多分こういう速報的にサッと結果出してしまうとか、なかなかできないなと思います。月刊で出ていたというのは大きい。

相澤：今から思えば、一般向けの雑誌としてはかなり専門的なことにも踏み込んでいるので、中身は難しいところもある。人によっては読みづらいという感じを受けたかもしれないけれども、今大西さんがおっしゃったような観点から見ると、いろんな機能を兼ね備えていた雑誌というふうにも見えま

す。

大西：ほぼ織り交ぜだったよね。

相澤：そうそう。だから誰でもそれなりに読める、柔らかく分かりやすく書いてあるところもあれば、国語研の各種調査の速報的な内容を盛り込んだ報告書的な部分もあったかなと思います。多機能ですね、『言語生活』は。

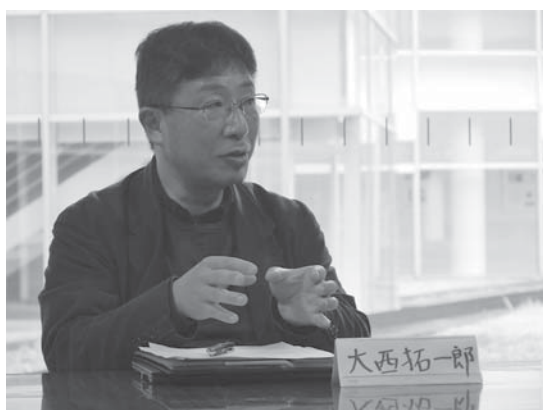


『言語生活』1957（昭和32）年7月号

柏野：なるほど。次に大西さん、いかがでしょう。

大西：研究所でやってることは、仕事としてやってるんだからあたりまえなので、どれがすごいというのは、よく分からないのです。研究所に入った時に、私のところもコンピューターはあったんです。皆さんおっしゃるように、大体当時のコンピューターって、今の目から見たら、もうすごく能力低いものだったんだけど、何に使ってたかというと、私が従事してた仕事は『方言文法全国地図』という、全国的な分布を扱うという地図を作ることだったんですが、その元

データを入れてたんです。どんな形で入れてたかという、報告されてきたものを全部入力するという形です。



大西拓一郎氏

ところがコンピューターの能力がそんなに高いものじゃなくて、しかも基本的に使える文字の制限もあったもんだから、どういうふうにして扱っていたかという、もともとの報告は全部音声記号です。でも音声記号を普通の文字として使えるようになったのって、ごく最近ですよ。今は、ユニコードの中に入っていて扱えますが、当時は、それができないものだから、アルファベットの組み合わせで表現したんです。例えばjに当たるものは、Sと\$で組み合わせるとか、中舌のiであれば、Iの後にピリオドを2つ付けるとか、そんな工夫をしてたんです。しかも1行の文字数もかなり制限されていた。それで、どうしたかという、6行で1レコードという、今の目で見れば妙ちくりんな書式です。今だったら、区切り文字を入れてレコードを作っていくと思うんだけど、そんな形で作ったんです。

ところで何でそんなことやってるかという、日本の方言研究というのは苦い経験をしてるんです。さかのぼれば、国研よりさらに前の国語調査委員会の時代になるけれども、国研の前身ではないにしても、似たような性格持ってますよね。明治時代に設

置されていて、そこが全国調査をやってます。その全国調査の結果というのは『口語法分布図』、『音韻分布図』という形で公表されています。この『口語法分布図』、『音韻分布図』っていうのは、地図を見たら分かりますが、割とおおらかな地図の作り方をしてるんです。対象になっている項目もそれほどたくさんない。そこで、国語調査委員会によって第2次の調査が行われてるんです。

『口語法分布図』、『音韻分布図』をさらに精密にしようということで。ところが、この調査は全国的に行われたんだけど、全部を東京の文部省に集約した結果、関東大震災で全て焼失したんです。

これは日本の方言研究、方言学の世界にとって非常に大きな損失で、その後こういうことにならないようにっていうことで、『日本言語地図』を作ったときには、データを二重化するという事を行ってます。具体的にはどういうことかという、『日本言語地図』の時代は、全部コンピューターに入れるということはありません。調査票本体と報告された結果を別にするんです。調査の現場で調査した調査票は、調査した人が自分の手元へ残しておき、調査した結果をカードにして研究所に送る。そのことによって二重化をはかっているわけです。

それが私が携わった『方言文法全国地図』の前の『日本言語地図』のときのやり方です。『方言文法全国地図』はどうしたかというと、同じように調査票を手元に残して、カードを研究所に送るというやり方を取ってるんだけど、それに加えて、全部いったんデータをコンピューターに入れてしまおうということをやっているんです。そうすると、いわば三重化できる。そんな形でやってたんです。

そうすると、せっかく作ったデータなので、これ生かしていくことができるようになってきた。コンピューターの世界が、だん

だんとその能力が上がって行くもんだから、それを基にして実際の報告された形に戻して、地図集に生データとして付録させるといことができるようになってきた。さらにはもう少し先になってくると、これを使いながら、コンピューターで地図を描くということにも、結び付くようになってきたんです。

そんなふうに、何がすごって話ではないんだけど、危機に対応するということをやっておいたことが、徐々に別な形で生きていくというようなこともあったんだということです。おそらくほかのところでもそういったことというのは、何かと出てくるんじゃないかと思います。

柏野: もう今や地図は、誰もがアクセスして画面で見たり印刷できたりできるようになりましたね。

大西: そうですね。

柏野: ありがとうございます。では次に小磯さん、お願いします。

小磯: 大学の学部生の頃だったんですけど、"British National Corpus" (BNC) が 1991 年から 1994 年に開発されて、その中間レポートを何本か読んだんですね。こんなすごい規模の、設計もしっかりしたコーパスが世の中にはあるんだなって。学生ながらも、日本語についてもこうしたコーパスが必要だと思いました。国語研に入って最初に関わったのは『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)、これはモノログ中心のコーパスだったので、BNC とは設計方針が違うわけですけど。それで国語研の報告書とかをいろいろ読んだら、『談話語の実態』や『話し言葉の文型』などがあって。そこで集められているデータが、場面や話者の属性や関係性などの観点からいろいろと考えられていて、すごいなと思いました。当時ですから、おそらくオープンリールで何度も聞きながら書き起こしかしてたと思うんですけど、それでも、

調査を始めて 2 年かそこらで報告書まで刊行しているんですよ。本当にその機動力もすごいなと思いましたし、何よりも、収集するデータの設計が素晴らしい。



小磯花絵氏

当時は、残念ながらこうしたデータをコーパスという形で世には出していなかったので、コーパスで検索しても出てこなかったんですけど、国語研に入ってこうした報告書で読んで、はじめて、日本にもこんなにすごい調査が古くからあったことを知りました。

国語研の初期の研究の中でも、話し言葉の研究は重視されていて、『談話語の実態』や『話し言葉の文型』などはすごい画期的だったと思います。あとは松江の 24 時間調査も驚きました。24 時間、どうやってデータを録ったんだと。報告書を読んでみたら、起床から就寝までで、当たり前ですが 24 時間じゃないわけですけど。でも、あれもすごい発想の調査だと思いました。ただやっぱり、『談話語の実態』や『話し言葉の文型』の方が、私としては一番印象に残ってます。

CSJ のことを振られたんですけど、自分が関わった研究で、すごいと思った研究としてなかなか発言しづらいので、ちょっと別の話をしました。

相澤: すいません、振ってしまいました。

小磯: いえいえ。でも『日本語話し言葉コー

パス』は、人文系だけでなく理工系や産業界などと一緒にやるプロジェクトで、しかも規模もかなり大きくて、国語研究所のそれまでのプロジェクトの中でもかなり大型のものだったと思います。私はもともと文理融合のような文化で育ってきたので、国語研究所での最初のプロジェクトとしては入りやすかったです。ただ、それまで自分が関わってきたコーパスは、せいぜい何十時間のレベルだったので、その中で、660 時間を越える規模のコーパスを作るとなるときに、かなり驚きました。でも、いま思えば、本当にすごいメンバーが集まったなと思います。いろいろな専門の人たちが集まって、前川さんの指揮の下で一丸となってコーパスを作り上げることができたと思います。実際、音声認識の精度も、当時はすごく低かったのに、CSJ の構築でかなり向上しましたし。

CSJ は音声工学のほうから入ってきた話でしたけど、それを国語研でやるからには、どうやって言語研究にも使えるようなコーパスにするかっていう、そういう発想を常に持って設計とかを考えてました。今でも、世界的に見ても、あの規模のものでいろんなアノテーションがなされているコーパスはないので、すごい画期的だったと思います。そんなコーパスが作れたのも、さまざまな分野の人が集まってきたからだと思います。それこそ、大量な講演を収録するだけでも大変で、当時、籠宮さんを中心に、映画関係の人とか集めて撮影しに行ったりとか。音声や韻律のラベリングなども、音声工学専門の菊池さんが関わったりとか。勿論、単語情報などは、それまでの国語研の語彙調査をふまえて小椋さんが進めたり。言語研究に閉じないで、いろんな分野に渡っていたからこそ、CSJ のようなコーパスができたんだと思います。今でも CSJ は音声認識の分野ではスタンダードなコーパスとして

使われてますし。当時は、ちょうど CSJ と『太陽コーパス』の 2 つが進んでいましたけど、コーパスという形で成果を出すことによって、国語研＝コーパスのような流れにつながったのかなと思います。

相澤：今触れてない側面で言うと、研究所の調査研究には、ちょっと言いにくいんですが、中だるみの時期があったような気がして。つまり現地調査とか、とにかく調査はやるんですが、最終的な成果物や報告書に持って行くのに、非常に時間がかかるという時期が続いていたように思います。ピシッとそれを締め直したのが、『日本語話し言葉コーパス』の企画だったんじゃないでしょうか。というのは、着手してから最終的にコーパスとして公表するまで、ほぼ計画どおりに進んでいて、その点は本当に見事だったと思いますし、その後のプロジェクトが大体そういう形で、計画を立てて、必要なお金もちゃんと集めて、つまり抜かりなく計画を達成するという方向に動き始めた、1 つのターニングポイントではなかったかという気がします。そういう面では率直にすごいなと思います。

大西：計画どおりにやることはあたりまえのことなんだけど、ちょっと問題の時期があったということですね。

柏野：ありがとうございます。では、横山さん、お願いします。

横山：私が心理学関係の専門の目から見たときに、すごいなと思ったのは 3 つあります。1 つは社会インフラに関するもの、2 つ目が方法論に関するもの、3 つ目が国語研究所のマネジメントの素晴らしさに関するものです。まず社会インフラについて言えば、今のいろいろスマホとかコンピュータで日本語の情報交換ができる、その本当に基盤を作ったのが国語研究所ではないかなと思うんです。林大所長が JIS 漢字コードというものを作って、世界で最初に漢字をコン

ピュータで処理する。それから漢字プリンターも、私が斎藤秀紀さんから聞いた話だと、世界で最初の高速漢字プリンターが国語研究所に納品されて、それを今の天皇が皇太子時代に視察に来ている写真が残っています。



横山詔一氏

方言地図の研究室の写真も残ってます。繰り返しになりますが、その高速漢字プリンターを今の天皇が見ている写真が残っている。そこには元所長の林大先生も写っています。そういうふうに、今の日本語の情報交換というか、コンピュータで言葉のコミュニケーションする基盤を国語研究所が確立した。私が大学時代は、コンピュータというのは数字の計算をするものであって、統計計算とか軌道計算とかに使うものだった。しかし、国語研究所はコンピュータを言葉のコミュニケーションツールとして使う基盤を築いた、日本語をみんなが自由にコンピュータでやりとりする基盤を築いたというところは強調したいと思います。

その後、研究所に笹原宏之先生、今は早稲田大学の教授ですけども、入ってきて、笹原さんは、さすがこれすごいなと思ったのは、漢字のことなら何を質問しても、即答してくれて、知らないことはない。これは知らないだろうというふうなことを聞いても、すぐに分かりやすく説明してくれて、この人

はすごいなと思いました。

その後に高田智和さんが入ってきました。高田さんがすごいなと思ったのは、今の電子政府の基盤となる文字情報処理のプロジェクトを成功させた点です。例えば住民基本台帳とか、戸籍とか、皆さん役所に行くとそういうのを出力してもらって、住民票とかもったりとか戸籍の謄本を取ったりしますよね。あそこで使われる漢字の、日本の国の行政情報処理の基盤を高田さんが中心になって整備した。この仕事はすごく大変な仕事で、情報処理学会とか日本規格協会とか経済産業省や法務省や総務省などのほか、いろいろな学会や団体や省庁と協力しながら進めていきました。ときどきコンピュータのメーカーさん同士の利権争いなどもあり、とても複雑で動きの激しい状況の中で、高田さんは全体をすごくうまくリードしてまとめて、形になりました。このことは、あまり世間に知られてないことかと思いますが、これは私たちの日常生活にすごく貢献してることだと思います。こういう社会インフラを作ったというのはすごいなと思います。

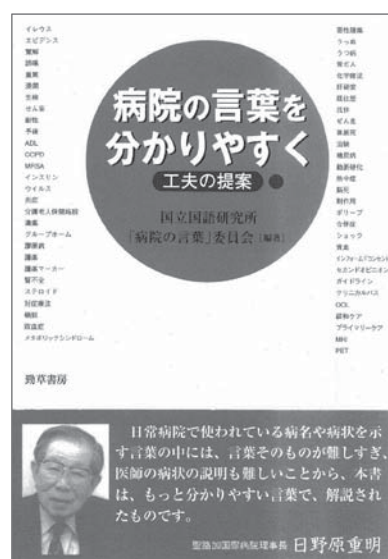
方法論ですごいなと思ったのは、国語研究所はランダムサンプリングというのをきちんとやる。実験心理学で、実験室で実験したりするときに、調査、実験に協力してもらう人を呼んでくるんですけど、それはもう大学の中でキャンパス歩いてる人を適当に呼んでくるだけです。でも国語研究所に入って驚いたのは、先ほどの共通語化とか敬語の社会調査をする時に、住民基本台帳から本当に 50 人間隔ずつとかっていうのを市役所に行って、ちゃんとランダムサンプリングしてくるのです。こんなにきっちりやるのかと、これにはすごく驚いた。

それからもう 1 つ、『現代雑誌九十種の用語用字』という報告書を読んだときに驚きました。その報告書を書いた水谷静夫先生

が、手回し計算機の時代に、雑誌でどういう言葉がどれくらい使われているかというのを、推測統計も含めながら調査されたんです。そのサンプリングのやり方はすごく厳密で、これは多分ほかの学問領域の人も、このレベルにはなかなか到達できないんじゃないかというくらい素晴らしい。もちろんそこに報告されてる資料自体、重要ですけども、あそこになら書かれている方法論が、当時としては多分世界一じゃないかと思います。言葉のそういう計量研究については、多分世界のトップだった。だから水谷先生が創立された計量国語学会というのは、世界的に見ても計量の言語研究では一番早いような学会だということを聞いてます。そういうことも含めて方法論は、言語とか日本語学だけでなく、ほかの科学研究全体をしのぐような方法論を、早い時代から試して、確立していったというのはすごいなと思っています。

それからマネジメントですごいなと思ったのは、病院の言葉のプロジェクトです。これは、後でまた出てくるかもしれません。さっき相澤さんが、八丈島の報告書が、調査を始めてわずか1年ぐらいで報告書が出たと言っていましたけれども、病院の言葉もそれに匹敵するようなスピードで成果が出ていったと思います。その成果は、実際に私たちが医療で恩恵を受けています。いまま医学部の教育で使われてますし、医学界からの期待もすごく大きい。このプロジェクト立ち上げるのは、相澤さんとか田中さんとか、皆さんすごくご苦労なさったと思うんですけども、みんなで協力して一致団結して、あれだけの短い期間にこれだけ世間に役立つ成果を出したというのはすごい。さらに言えば、それが単なる1つのプロジェクトじゃなくて、研究所全体が自分のプロジェクトだという意識が、あの中ではあったと思います。だから私も病院の言葉の

プロジェクトでどういうふうに進んでいるのか、常に関心がありました。あれはほかのプロジェクトで自分には関係ないなんて思ってなかった。自分ができないことを相澤さんとか田中さんがやってくれてるんだ、その後ろに私も一緒にいるんだ、ちょっと半歩遅れてるけども、いや、もっと遅れているかもしれないけれどもついて行ってるんだっていう、そういう気持ちにさせてくれた。あのプロジェクトのマネジメントっていうのは素晴らしい。なかなか大学とか、後で言いますけど、今の研究所にはそこが一番欠けてるんじゃないかと思います。今の研究所は、ほかの人のプロジェクトはほかの人、自分のプロジェクトさえよければいいと、ちょっと極論ですけども、そういう空気があるような気がして、そこはいささか残念です。



国立国語研究所「病院の言葉」委員会編
『病院の言葉を分かりやすく』（2009）

柏野：先に、今言及のあった病院の言葉を分かりやすくする提案については、多分皆さんそれぞれに感想があると思います。私は完成した時のシンポジウムに参加しました。その時に、それまで国語研に来てなかった

人たちがたくさんいらしてました。救命活動を普段してますとか、病院関係者です、医者です、看護師ですという人たちが多く参加していました。ものすごく熱のこもった議論が繰り広げられ、このような反響の大きな素晴らしい成果が出たのだと、とても感激しながらその場にいたのを覚えています。当時を振り返ってみていかがですか。

田中：確かにあの2009年3月のイベントはすごかったですね。でも、あれはもう人間文化研究機構に移管することが決まっていたから、何かそういう雰囲気もあったんじゃないですかね。もう独法としては最後だから、ここは頑張んなきゃっていう、そういう気持ちで担当者にあったし、多分所長はじめ当時の所員にもあったんじゃないか。横山さんがそういうふうにお感じになったのは、そういう時期だったということもあるんじゃないか。もちろん多くの仕事は移管しても続いていったわけですけども、でもある種の仕事はそこで終わりということが決まっていて、じゃもう最後だから特に頑張ろうという気持ちが担当者にはありましたし、全職員でというのは、多分そういうことではないんですかね。

相澤：もうひとつ、その前の「外来語言い換え提案」は、そもそものきっかけが外にあったわけですけども、病院の言葉の場合は、外来語の試みをいろいろやってきた中で、例えば専門家をどういうふうに取り込むかとか、社会とどうつながるかとか、そういうことを考えた中で、内発的に国語研としてこれはやるべきだという空気が出てきたんです。

田中：そうですね。内発的でしたね。それから内発だったけども、それに周囲が、言語研究者じゃない医療界の人たちが応じてくれた、それがすごい大きかったですね。やっている当事者って、そんなに周囲から反応があるとは思っていなかったです。途中段階で

朝日新聞が取材に来て、第一面に記事が出て、それが電車の広告にもなったんです。

横山：地方の新聞でも一面に出て、私の母親が切り抜いて送ってきました。

田中：あのプロジェクトが終わってからしばらくは、私、毎週のように講演とか、医療関係の雑誌、新聞の取材でした。あの時だけで、多分講演50〜60本やっています。

相澤：私は外部評価のときに、そのことを重要な成果物の1つとして、研究所をアピールするためのシートに書き込んだ記憶があります。

田中：そうでしたね。そういう意味では熱はあったんだね。

相澤：先ほどの言葉で言えば、熱気というか熱があったなというふうに感じますね。

田中：マネジメントって横山さんおっしゃったけども、あんまりそういうのは意識してなくて、何か流れて行った感じでしたね。

横山：そこは、さっきから言ってるように内発的な仕事のいいところだと思います。外から来たものだと、どうしてもそれとの折り合いをつけるのにエネルギー使うんですよ。それをしなくて済んだでしょう。ある意味でやりたいようにやったというところが、いい意味で働いたんじゃないかなというふうに思います。田中さんはその後も、いろんな普及活動の会合とか、いろんな分野の専門語をどうするかというところで、パネリストとかされてますね。

田中：そうですね。やっぱり医療が一番私たちの身近ですけども、専門語の問題は全ての領域にあるので普遍的ですね。ですから、ああいうことをまたやらなきゃいけないのかと思いますね。

柏野：そのことについては、今後のところでまた取り上げたいと思います。では、次に、山崎さん、お願いします。

山崎：テーマに「すごいと思ったもの」と書いてあるんですけど、わたしは人について

紹介したいと思います。というのは、これからお話ししようとする人の言葉に、「研究は人である」という言葉があるんです。それを最初に読んだ時は、「研究は人」とって何とも思わなかったんですけども、国語研に来て時間がたってみると、確かにこの人がいなければできない研究があることを実感するようになりました。人というのは1人でもいいんです。その1人がいたからこそできたという研究が、結構多かったと思います。紹介したい人ですが、強いて選ばせていただくと、直接関わった人に限ります。古い人は直接には知らないのです。3名挙げます。1人は横山さんがおっしゃった水谷静夫さん。あと宮島達夫さん、3人目もイニシャルMなんですけど、前川喜久雄さんで、スリーMと呼びます。多分これらの人がいなければ、こういうプロジェクトは成功してなかったというような意味で選ぶと、その3人かなと思います。



山崎誠氏

水谷さんは、もう柏野さんご存じだと思いますが、60年代の半ばには国語研を離れたんでしょうか。50年代に国語研に入られて、最初に手掛けたのは『婦人雑誌の用語』という調査で、その後『総合雑誌の用語』で、最後に『雑誌九十種の用語用字』、3つの語彙調査を担当したわけですが、最初の『婦人雑誌の用語』を見ると、後ろのほうに数式が

並んだところが出てくるんです。わたしはいまだに理解できないんですけども、多分永遠に理解できないと思います。それ以前に、研究所ができて2〜3年後に新聞の調査があったんですが、それはすごいシンプルで、素朴な調査でした。ところが、その次の婦人雑誌の調査からものすごくレベルが上がりました。その時、林大さんなんも加わって、『分類語彙表』の基になるような表もできたりして、その辺から方法論的な発展があったように思います。また、水谷さんは、語彙調査を通じて、現在のコーパスで使われている形態素解析の基になる理論を数学的に作ったんです。それがすごい業績というか、研究の領域を開拓したっていうようなところがあります。あとは、これは東京女子大に移ってからですけども、研究者を育てたということです。今、一定の年代の、女性の言語処理的な研究を行っている研究者は、ほとんど東京女子大卒なんです。国語研においては、弟子は育てられなかったもので、それはすごいことだなと思います。

2人目の宮島達夫さんとはいうと、これは水谷さんのように、数学的に優れたっていうわけではないんですけども、研究怪獣みたいな、次々と新しい研究に取り組んでいました。

相澤：みたいじゃなくて、研究怪獣と呼ばれていたんです。

柏野：呼ばれてたんですか。

相澤：というふうに、南不二男さんから聞きました。

山崎：そっちがルーツだったんですね。

相澤：いや、南さん本人がそう呼んだわけじゃなくて、「彼は研究怪獣と呼ばれています」というふうにおっしゃってました。

山崎：宮島さんは次々といろんなことをやって、アイデアがすごい豊富だったんです。アイデアが豊富っていう点では、林四郎さんもそうなんですけども、また別な意味で

宮島さんは割り切りがすごいんです。こう決めたらこうするって。で、ちゃんと結論を導くというような、お手本のような論文を幾つも書いていて。しかも本人は嫌いだとおっしゃる文法もやってるし、語彙もやってるし、音韻はやってなかったかな、言語史みたいなこともやっていて、すごく幅広いんです。ヨーロッパの言語を幾つもお得意になって、そういう比較もやってるので。

柏野：古典とも対照しましたしね。

山崎：そうです。ある意味、日本語学で特に古い国語学時代の英雄的な存在だと思うんですけども、何かあまり評価が低くて、ウィキペディアにもちょっとしか書いてなくて。

柏野：そうなんですか。誰か書いてあげないといけない。



柏野和佳子氏

山崎：もうちょっと業績書いてほしいんですけど。

相澤：山崎さんの仕事ですよ。

山崎：3人目の前川さん、これはもう皆さんご存じでしょうけども、先ほど相澤さんがおっしゃった国語研の中だるみの時期、私はその中だるみの時期に入ったんです。で、中だるみにちょっと乗ってしまったので良くなかったんですけども。その後、前川さんが入られて、CSJを始めた頃ですかね、その辺から右肩上がりになってきて、話し言葉コーパス、書き言葉コーパスっていうふう

に。ちょっと国語研の存在感が増したのは、これはお世辞でも何でもなくて、前川さんの何力って言いますかね。

横山：マネジメント力（りょく）じゃないですか。

山崎：統率の力が結構あります。今、ピンと来ない人も、世の中にいるかもしれませんが、これがあと10年、20年たつと、確かにそうだなというふうに世の中の人も思ったださると思います。

柏野：人から入っていく話は、案外面白いですね。

相澤：面白いですね。

山崎：「研究は人」って言ったのは水谷さんが書いていて、要するに水谷さんは自分の分野がマイナーだと思っていて、なかなか理解してもらえないので、研究を拡大するには人が集まってくるのが重要だみたいに考えていて、人が多く集まらないといけなと。それには1人で頑張ってもちょっと限界があつて、集団で、グループでっていうことを思って、そう書かれたんじゃないかなと思います。

柏野：なるほど。面白いですね。ありがとうございます。では、最後に田中さん、お願いします。

田中：すごいものとか、すごい人とか、すごいプロジェクトたくさんあると思うんですけども、やっぱり外に出て思うのは、国語研やめてもう5年たちますけど、国立国語研究所っていう存在が、70年の間に続けてきてることがいっぱいあるっていうことが、一番すごいなと思うんです。例えば「国立国語研究所報告」という報告書は、多分130ぐらいまで出てたと思うんですけども、創立から60年間ぐらいは、それをずっと同じ枠組みでやってきたわけです。私もここに入る前に語彙研究が専門だったから、語彙調査の報告書を読むのに何度も挑戦したんですけど、やっぱり歯が立たないんですね、

『雑誌九十種の用語用字』とか。自分の面白いところは読むんですけども、要するにこれがどういう調査か、調査の設計や、調査単位の辺りなど、高度過ぎて分からないんですね。国語研に入ってみて、読み直して少し分かるようになるんです。



田中牧郎氏

そういうものが、設立から10年ぐらいの時にもう設計されて、そしてその頃も多分数年で報告書が出て、きちんと、なぜ行って、どうやって行って、どういう結果が出て、そしてそれを分析してというのが3分冊で完結してたんです。その後さまざまな語彙調査はずっと続いて、国語研といえば語彙調査というふうになってきたわけです。さっきのスリーMの1人の宮島さん、それからもう1人の水谷さん、その2人が語彙調査の点では非常に大きな人だと思うんですけども、例えば宮島さんに関して言うと、その後、『動詞の意味・用法の記述的研究』という大著を出していく。ただ、背表紙には国立国語研究所としか書いてないので、宮島さんがやったということは外の人には知らない。私もそんな意識してなかったんで。誰がやったかは意識してないけれども、で

もああいう素晴らしい記述的研究が出た。これは、『雑誌九十種の用語用字』のものを含めて、用例カード取りをして、国語研究所としてカードを取ったもので。しかし記述して体系化したのは、宮島さんという一研究者の仕事だという、そういうふうに研究所の蓄積と、それから個々の研究者のアイデアと実力で作り上げる、そういう研究成果が幾つもある。そういうものが蓄積されている研究機関というのはやっぱりすごいなというのは、国語研を辞めると改めて思うんですね。

例えば私が国語研に入って最初に担当した「日本大語誌」っていうのも多分林大さんのアイデアで、飛田良文さんなど何人かの方が形にしていたんですけども、実は研究所の中ではあんまり高く評価されてなかったんですね、当時の私の感触としては。何か100年計画とか言って、できるかできないかよく分かんないようなものやってるという目、そういう雰囲気を感じて。確かに私が入った当初は、あの部屋にはたくさん作業者がいて、専任の研究員もその中に混じって3人ぐらいいたんです。私はひたすら雑誌『太陽』を朝から夕方まで読んで、読めない漢字を調べてたんです。多分それが1年ぐらいか、もう少し続いた。とにかくひたすらそういう作業で、確かにつまらなかったんですね。ここ入らないほうがよかったかなというぐらい、本当最初はそうだったです。でも、それが後々思うと、やっぱりああやって文献に取り組んだということが、すごく良かったんです。多分そういうことは皆さん、自分が入ったところのどこかで、いろんなそういうつらい時期もあった。それが全体として見ると、すごいプロジェクトが出てくることにつながってきてるんだろうと思うんです。

実際、『日本大語誌』は、その後いったんやめたことになったんですけど、実は今『日

本語歴史コーパス』として、本当にあれが生きてるんです。あの発想や蓄積がなかったら、おそらく『日本語歴史コーパス』は、人間文化研究機構に移管してすぐにはできなかったと思うんです。ですから、計画を立てる時の発想がしっかりしていて、ちょっと一時なかなかうまくいかない、研究機関の体制とか、あるいは国の方針が変わった時にうまくいかないことがあっても、それがまたよみがえってくるというか、そういうことの繰り返しで、すごくいい仕事がいرونなところでできてるんじゃないかなと思います。

それで、そういう浮き沈みがあるようで、実は大事なことだったんだというのを私に関していうと、私は国語研に18年いたんですけども、3回ぐらい大きな変化があったんです。1回目は独法化です。もしかしたら、さっき相澤さんや山崎さんがおっしゃった中だるみというのは、その独法になる前が長かったので、いろいろ体制があまり変わる機会がなかったということなのかもしれない。でも独法になって非常に厳しくなって、緊張感が出て、ちょっと大変だったけども仕事の区切りがつけやすくなった。そこにスリーMのもう1人の前川さんが、外部資金を取って来たっていうことも大きかったです。外部資金でやるから、しかも理科系の人たちとやるから、本当にそこで成果を出して終わらなきゃいけないということも大きかったと思う。

それから2回目の転機が、国から降りてきた仕事として、相澤さんの下で「外来語言い換え提案」というのをやることになった。形の上では内発的になっているのかもしれませんが、相澤さんがおっしゃったように外からの力で始まった仕事。具体的なプロジェクトが国のほうから示されて、それを短期間でやらなきゃいけなかったということです。それは先ほどの、1年間ひたすら

『太陽』を読んでいたっていうのと別レベルで、また大変だったんです。その大変さは、本当にあの頃は相澤さんも、相澤さんらしくなくなってたし。

相澤：どういうことかな。

田中：つまり非常に大変な感じでした。

相澤：とげとげしかった。

田中：そう、とげとげしかったんです。当時の私の上司であった相澤さんが非常に厳しくなったんですね、その時。それはさきほど話に出たマネジメントの強化ということでしょうか。マネジメントの面で経験ができたことで、さっき話題になった「病院の言葉」を相澤さんたちと立ち上げるときに自分たちでこういうふうによればできるのだということで、具体的な企画ができたんだろうと思うんです。

そういう意味で独法化、それから上から来た仕事、そして3回目の転機は人間文化研究機構への移管ですね。移管後は、私は短い期間しかいなかったんですけども、先ほど言った『日本大語誌』が、『日本語歴史コーパス』に形を変えて復活したという意味で、大きな転機だったなというふうに思います。

柏野：ありがとうございます。今、独法化と移管の話が出ましたが、大西さん、その辺りについていかがでしょうか。

大西：国研というのは、倒れそうで倒れないんです。かなり危ない時期を経験してたように思うんです。独法になる時、外からはそう見えなかったかもしれないけど、中にいると結構、中での風があったと記憶します。組織を変えましたよね。そうすると当然のことながら、具体的に言うと人間の地位、所内での地位の関係、こういったものも結構動いた。そうすると上下関係が、きのうまでとちょっと違ってしまうようなことも出てきてしまう。

それから先ほど田中さんがおっしゃった、

そのことによって、それまでの三位一体と言われていた文化庁国語課と研究所と国語審議会の3つが関係を、対等な関係にあるんだということで、それぞれに上下の関係がないということを言っていたんだけど、独法化して、かなりここは崩れたかなと思います。かなり文化庁の意思が強く働くようになった。中にいると結構大きかったと思うし、おそらくその中で、さっき田中さんがおっしゃったような雰囲気が出来てきたんじゃないかなという気がします。でも、そこは何とか乗り越えてるんです。

さらに大きな波で言うと、移管ですね。大学共同利用研に移っていった。前から大学共同利用研になったほうがいいんじゃないかって話はあったはずですが、ただその機会は実際にはなくて、いよいよ具体化した。これが、全てにおいていいことかという、やっぱり、人によって結構違ったと思うんです。これが良く働いたって言う人もいるだろうし、また一方で、必ずしもそうでなかったということもあったと思うんです。独法化と同じように、やっぱり中の組織作り変えましたから、またその中で人間の配置の問題が出てきて。これは外から見ると、中にいる人間にとってはきついものなんです。うまい具合に働いたら、その人にとっては当然いいでしょうし、でも必ずしも全部がうまく働くとは限らないということがある。そういうことを何とか乗り越えて、今、移管後10年迎えてるわけです。よくこの小さな小舟が、波を乗り越えながらここまで続いてきたかなと思います。独法化を通して、ほかのところでは消えて行ってしまうところも結構あるんです。どこかに吸収統合されてしまったとか、そういうところもあるのに、割と小さな組織にもかかわらず続いている。これは、組織そのものへの支持があるにしても、組織の中にいて、これを継続させるために、いろんな知恵を働かせ

ている人間がいるわけで、これがうまく続けさせているんだと思うんです。

柏野：設置形態は変わりながらも残っているということがすごいと言えるのですね。それでは、最後に、今後どうしたらいいか、熱量を持った研究をどう展開できるか、など、その辺りを自由にお話いただけますか。

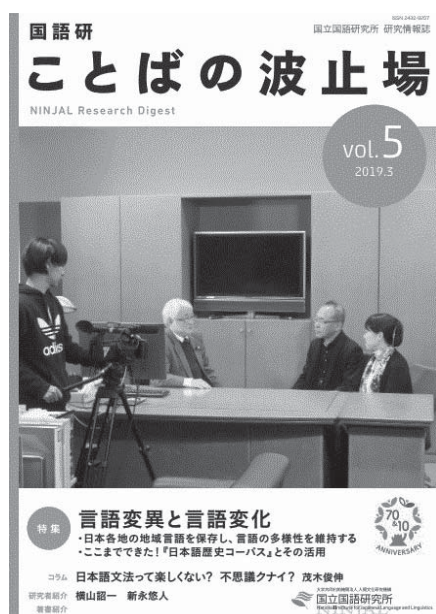
相澤：やっぱりキーワードは、これ横山さんに補足してほしいんですけど、「言語資源」というふうに思います。非常に漠とした言葉かもしれないけれども、イメージが湧いてきそうない言葉です。実際にはいろんな形があると思いますが、それを恒常的に獲得して、蓄積して、提供できるように整えて、社会に出していくという、その仕事はやっぱり国語研よりほかではできないので、これはもう最初から必要な予算だというふうに取り分けておくぐらいの、価値のある仕事だと思うんです。今はだいぶ軌道に乗ってきたという感じがあるので、この路線は引き続き、むしろ拡充するような感じでやったらいいのかなと思います。

横山：言語資源という言葉は、もう今は一般的になっていますけれども、国語研の研究情報誌『ことばの波止場』にその用語が誕生したときのエピソードを書きました。

小磯：読みました。

横山：新プロというプロジェクトを立ち上げるときに、理系も含めた超大型プロジェクトだったので、何か新しいアイデアを盛り込みたいなと考えました。当時は石油資源とか工業資源とか、そういう用語はもちろんあったのですが、言葉の集積体が富を生み出したり経済的な効果をもたらしたりする時代がいずれ来るのではないかと考えたのです。自動翻訳の研究とか、国語研究所がその当時ちょっと構想しかけていたコーパス、話し言葉にしる、書き言葉にしる、コーパスっていうのがいろいろな富を生み出

すのであれば、どういう用語を使えば、みんなにイメージしてもらいやすいのかを考えた結果、石油資源のアナロジーで「言語資源」という新語を思いついて、プロジェクトの計画書に書いたのです。そうしたら当時の文部省や文化庁の中で、言語資源などという用語は聞いたことないという意見が出て、削除されそうになったのですが、当時の文化庁国語課長（のちに国語研の理事も歴任）だった菰澤さんがいろいろ励ましてくれて結局は計画書に残ったのです。その計画書にもとづいてプロジェクトの研究班の名前に「言語資源」という用語が入ったことにより少しずつ世の中に認知されていったと考えています。



「ことばの波止場」第5号

小磯：組織名に入りましたね。

横山：はい、国語研の組織名に独法時代は「研究開発部門言語資源グループ」、共同利用研になってからは「言語資源研究系」といった名前が付いて、一気に世の中に広がったと思います。今はグーグルとかいろんなところが、まさに言語資源で稼いでるわけです。国語研究所がこれから取り組むべき

仕事としては、以前に外部評価委員だった朝日新聞の論説委員の方がおっしゃってたんですけども、社会に必要性があるんだけども、特に利潤を生みださないために、企業が手をつけない分野がある。それは独法がやるべきだというふうなことをおっしゃった。だから、言語資源の研究も、そういうところがもしあったら、そこを積極的に取り組むべきだと思います。病院の言葉なんかも、まさに言語資源だという気がします。今作ってるコーパスも言語資源であることは、もちろんそうです。これからみんなで知恵を集めながら、言語問題を発見して、それに対応するというのもこの研究所の1つのミッションで、それがあったから60年間、70年間倒れずにやってこられたと私は考えています。国民の多くの人が、なんとなく国語研究所は大事だと思ってくれたからこそ、残ってるんじゃないかっていう気がします。相澤：手前みそですけど、やっぱり利益を生むということの先に、言語福祉とか、そういう発想がどうしても必要なんじゃないかなと。それが民間企業とかそういうところでは直接的には無理で、やっぱり税金で運営する機関が何らかのかたちでやらなきゃいけないことかなと。言葉についてもその例外じゃないというふうに思うんです。

横山：さっき相澤さんが冒頭におっしゃった国語研究所のミッションということは、科学的研究を行うことによって、合理化っていうのは違う言葉で言えば、みんなの幸せのためにという、やっぱりそういう発想というのが国語研究所の中で脈々と受け継がれてきたから、広く国民に愛されて70年間、名前も変わらずにこられたと思います。大抵ほかのところは組織改革で、国立という看板は外そうとか、いろんなことがあると思うんですけど、ここは国立国語研究所の名前がずっと続いている、そういうことがあるのかなと思います。

大西：英語名だけは変わったけどね。

横山：英語名は現在のほうが正確かもしれない。（編集注：英語名は、元々National Language Research Institute (NRLI) だったが、独法化にともない、National Institute for Japanese Language (NIJLA) に変更。更に人間文化研究機構への移管にともないNational Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL) に変更された）。

柏野：言語生活という言葉が、あまり浸透していないのかなと思います。これはでもキーワードですよ、ずっと国語研の。これをもっと出せていけるといいのかなとも思うんですけど。

田中：言語生活？

柏野：はい。言語生活という言葉。

田中：当初からずっとあるものだから、多分今は沈んでいる時期。でもこれ大事な概念だから、この10年言語資源が頑張ってきて、これからも重要であるんですけど、もう1つの重要な概念として、国民の言語生活、日本語に関わる人たちの言語生活というのを、もう一回浮かび上がらせたいなと思います。その時、言語資源を誰のために作るのか、どう使うのかという議論を、もっとしなきゃいけないんじゃないかと思います。

大西：言語生活っていうのはつかみどころがなくて、だから生き続けてるんじゃないかと思うんです。ブームにならないんです。

柏野：なるほど。

大西：人口に膾炙しちゃって、そのうちにもう嫌になっちゃうっていうことがあまりない。

田中：あまり魅力的な概念じゃないと思われるんですね、当たり前だから。雑誌があった頃は、やっぱり考えてました。『言語生活』っていう雑誌があったから。

相澤：あの雑誌がだんだん衰えて行った原因を考えた時に、「生活」っていう言葉自体が魅力を失ってしまったことが関係してい

るんじゃないか、という議論がありました。

田中：でも今、日本語教育の文脈で「生活者」って結構重要視されてますね。だから、ちょっと今日日本語の環境が変わってきてるので、もう一回言語生活を取り戻すっていうことは、国語研として頑張ったほうがいいんじゃないですかね。

相澤：国語とか国民という縛りを、もうちょっと緩めないと発想が広がらないですね。

小磯：でも、1998年に国語研に入ってから、いろいろなプロジェクトがありましたけど、結果的には国民の言語生活に還元されるものが多かったという印象があります。『日本語話し言葉コーパス』も音声認識の性能向上に関わっているという点ではそうですし、外来語の言い換え提案も、病院の言葉も、あと高田さんが若かりし頃にやっていた電子政府のプロジェクトとか、本当すごいなと思って。

横山：激務ゆえ、気の毒だと感じたところもありました。

小磯：そう、かわいそうに。でもよくまとめ上げたなって。あれは本当に、われわれの言語生活っていうか、言語というより、まさに生活そのものですよ。すごいことをやっているなと思ってました。

柏野：方言も生活の言葉ですものね。

大西：高々と旗印にするものでもなくて、どこかでみんな意識の下に持っているということで、ずっと生き続けるんじゃないかなと思うんです。

相澤：法律でも「及び」で結ばれているでしょう。国語「及び」国民の言語生活、しかも「国民」がくっ付いているわけです。国語という言葉そのものについての話になるとと思いますが、言葉そのものだけじゃ足りないですよ。やっぱり言葉を使う人の要素を総合的に取り込まないと議論は成り立ちませんよという、そういうセットの概念だなとずっと感じてきました。国語研の調査

研究も、言葉そのものをきちんと捉えることはもちろん大切ですが、同時にそれを使う人、あるいは人の集団の側のいろいろな要素もきちんと考えないと、先ほど言った言語福祉のような問題は議論もできないし、解決もできないというふうに思ってきました。

柏野：「ことばのくずかご」で見てた視点って大事ですよ、ずっと。(編集注：「ことばのくずかご」は『言語生活』誌に連載されていたコラム。「なまの資料に語らせる現代日本語の実態」を記録したもの。長年、見坊豪紀氏が担当していたが、1984年から86年にかけて山崎誠氏が加わっていた。)

山崎：あれは大学院のときだったんですけどね。ただ、面白く興味を持ってやっていたので。面白いと思わないと言葉への興味も続かないので、すごいそれが重要だと思います。ある意味記録するっていう側面があって、いつこういうのがあったとか。それがくだらないと思っても、実はくだらないことこそが残らないので、今、何でしたっけ、歴史語用論とかっていう分野で、昔の日本人はどういうあいさつをしたとかっていうトピックがあるのですが、そういうのはなかなか文献に残らないんです。そういう普通のことを普通に記録する、くだらないことも記録しておけば、それが何年か後に、ああ、こうだったんだなというのが残る。

柏野：今その記録はないですよ。記録したほうがいいですね。

山崎：言語景観なんかもそうなのかなと思うんですけど。あるいは24時間調査とか。

小磯：そうそう、24時間。

山崎：動画で全部撮って、ライフログみたいなものとかも、いいかなと思います。

大西：短期的には面白いんだよね。でもこれを長く継続するというのは、なかなかつらいんですよ。関東大震災の後に風俗学と言って、今和次郎さんという建築学者が、そ

の当時どういうふうにしてバラックが作られたかなんていうのを、研究されていたんだけど、今の目で見ると、これ非常に面白い。ところが、これずっと続くわけでもないんですね。こういうのをずっと続けるという観点がないといけない。

山崎：そういう固定した組織じゃないと、続けられないですよ。

小磯：さっき山崎さんが、研究は人っておっしゃって、3人挙げたじゃないですか。確かにそういうリーダーシップのある人がいるっていうのは必要だと思うんですけど、もともとは人が集まってくる、という言葉だったわけですよ。そうやって人が集まって、みんなの力でやっていく研究がやっぱり重要だと思います。70年も研究所が続いてきたわけですけど、やはり集団の力でやれる研究、継続してやるべき研究をやるのが非常に重要。その意味で言うと、鶴岡調査のような研究を、必ずしもまったく同じ内容でなくても、継続してやっていくことは重要だろうなと思います。それをするには、やっぱり人だろうなと思います。

相澤：研究テーマも一代限りでošimaiではなくて、組織のほうも研究テーマの必要性が伝承されていくようでないといけないんじゃないか。そうでないと、経年調査などは途切れてしまうわけですが、やっぱりここまで来たら、途切れさせないほうがいいという選択肢を選びたいですね。もう前例のない研究ばかりになってきていますので。

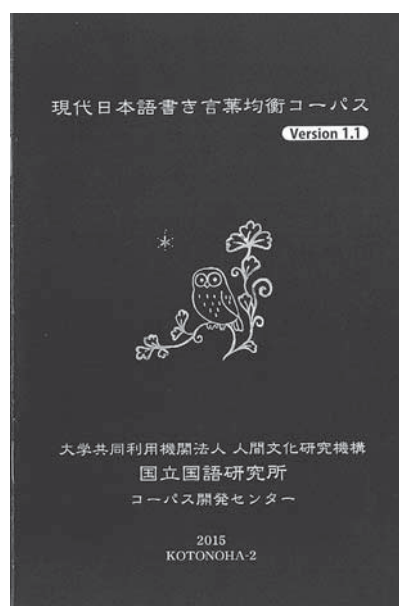
小磯：あと、相澤さんとか言ってましたけど、1つの専門にあまりこだわらないというのも時として重要かと。田中さんの研究ですごいと思ったのは、外来語の言い換え提案の時も、病院の言葉も、ご自身のもともとの専門からはきっと外れていると思うんですけど、それを高いレベルで推進していた。経年調査などでも、普段、社会調査をやっていない人も含めて、所員の多くが参加

するっていう。1つの専門をつきつめるのもいいんですけど、そうじゃなくて広い視点でいろんなプロジェクトに参加していくっていう力が、結果的にいいものを生み出していくのかなと思ってます。

大西:ただ、あまりにも成果のことばかりに行っちゃうと、いけないかなって思ってるんです。成果の前にいろんな資料を作っている。研究所のもう1つすごいところは、このような資料を捨てないでずっと残している。中央資料庫って、ある意味宝の山です。テキストマイニングじゃないんだけど、研究資料マイニングみたいなのがいくらでもできる。当時研究にあんまり使われなかったのに、これから研究に使えるようなものがいっぱい残ってるわけです。だから表に出てくる研究成果ってほんの一部分であって、それ以外に使えるものは、まだまだあるわけです。それがあるということと同時に、それを残してきた。それは大したものです。論文を一流雑誌に載せろとか、そういう話はあるんだけど、それは本当の一部分のことなのであって、やっぱりその基になるものをきちんと整理して残していくっていうことは、これからも大事だと思います。先ほどから、よく生き延びてきたっていう話はしたんだけど、そういうもののをちゃんと残してきたからこそ、生き延びてきたっていうところもあるんだろうなと思います。

田中:確かに資料で残すことはとても重要ですけど、自分が関わったプロジェクトに関しても、どこでそれを思いついたかが、後からよく分からないけどもプロジェクトが始まっていたということがあつた。プロジェクトはどうやって始まるのかという、これも結構重要で。始めたからには終わらせなくちゃいけないから、そこから後はいろいろ考えますが、最初は多分こういう場でのいろんな自由な議論から始まってると思

うんです。私が関わったものでそれが非常にきちんとできたのは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)、それは本当にみんなでこういう議論をしながらできたんです。



『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

小磯さんや山崎さんたちと私が、前川さんがリーダーで、多くのプロジェクトがひと段落して、独法になったという大きな区切りがあつたからだったかもしれませんが、そうやって議論しながらあれをするって決めたんです。あれも、前川さんがこうやると言ったわけじゃないんです。何かそういうようなことをするけど、どうやるかっていう、そういう議論をしていって始めたというのは、大変幸せな始まり方をしたものだっと思うんですけども、そうじゃなくて始まったものもあるんです。どう始まったかと、結果の良しあしは必ずしも対応しないと思うんですけども、どう始めるかの議論、実際にどういうふうに始めたかを、この場で皆さん関わったものを出し合うのも、これからの参考になるんじゃないですか。

大西：そういうのは、どこかに残しておかないといけないと思うね。公式に出るものはカッコいいことしか書かないから。実は、多分にかっこ悪いこととか、反対に血のにじむような努力がどこかにあったりとか、そういうことはあんまり実は表に出てこないんです。そういったものを何らかの形で残せるようなことはやっておくべきです。

小磯：昔の報告書って、どういうところが駄目だった、みたいなことが、結構赤裸々を書いてあって、私、好きなんですよ。本当はそういうことも書くべきだと思います。私、CSJ の時も報告書はすごい頑張って書いたんです。物を出すだけじゃなくて、どういふうにそれをやったのかという記録も残さなきゃいけないなと思ってやってました。

50 周年の時、お 2 人お話しされましたよね、柴田先生と、何だっけ、50 周年の時に。講演。木田さん？ 文部省の。木田さんでしたよね。

相澤：木田宏さん。文部事務次官をされていたこともある。

小磯：そうですね。あと柴田先生じゃなかったでしたっけ。あの時も、何でこういう研究するのかとか、その思いをすごく話されてて。

大西：あと中西進先生の講演も 50 周年じゃなかったっけ。

田中：あの頃は毎年創立記念日に。

小磯：何か外部の人呼んでいましたからね。

田中：50 周年にかかわらず、毎年誰かそういう人を講演に呼んでて、その中西さんは来ましたね。

大西：今大人気ですね。

柏野：あ、万葉集ね。

田中：不易と流行の話をしたんじゃないかな、中西さん。だから結構覚えてますよ。いい話をしてくださったなと思って。

横山：大岡信さんとかも来てた。

大西：評議員なさってたんじゃないかな

っけ。

横山：評議員をやってる人に講演を頼んで、あれはオープンじゃなくて所員だけが聴ける会で、結構大物の先生に来てもらってましたね。

相澤：それから、けっこう本音の講演をされてますよね、聞き手が不特定多数ではないということ为前提に。

横山：気合いが入ってました。

相澤：気合いが。

横山：今日は国語研究所でプロの研究者集団の前で話をする、ちょっと普段よりも気合いを込めて、何かそういう講演者のオーラを国語研の研究者が浴びて、みんな何か気持ちよくなって。

柏野：今コロキウムは、企画はされてはいるんですけど。

小磯：コロキウムは専門性が高いですからね。50 周年記念の時の話、民主主義を広めるためにみたいな、あの有名な話ですけど。それを行った人の生の声を聴けたのはすごく印象に残りました。創立記念日にはそういう講演を企画するのもいいですよ。

大西：創立記念日が忘れられている。

小磯：そうそうそう、創立記念日の行事がなくなっちゃってる。あの全員集合の写真もいいですよ。

相澤：もうひとつ、これから先の研究計画の立てかたに関係することです。先ほどから中だるみの時期のように言ってきた、1980 年代の後半ぐらいからの時期ですが、実は「今どきの若い者の会」という会が、自発的に作られていたのを思い出しました。先日、古い資料を発掘していたら、その時のファイルが出てきて、けっこう自由にいろんなことを議論していたことを思い出しました。山崎さんも覚えていらっしゃると思います。

山崎：若手の会っていったたでしょうか。

相澤：今若（イマワカ）の会ともいってまし

たね。

柏野：今若の会。ほほう。

相澤：何が言いたいのかというと、将来計画の委員会とか、国語研究所が組織として作らなければならないというような話だけではなくて、そういう自発的な会があってもいいのかなと思います。中だるみの時期だったからこそ、そういう会が生まれたんだろうと思いますが、毎回、発題者がいて自由にいろんなテーマで語り合っているので、

そういう場があってもいいんじゃないでしょうか。

柏野：もっと自由な議論が大事とおっしゃってた、そういう場を作らないと。

相澤：やろうぜって言って、作ってもいいんじゃないですかね。

柏野：熱量のある研究がこれまで多くあったことの振り返りと、これからも熱量を持って研究を展開していきたくてというお話しができました。ありがとうございました。

移管10周年記念座談会



日 時 2019年4月1日（月）13時30分～15時30分

場 所 国立国語研究所小会議室

出席者 朝日 祥之（言語変異研究領域准教授）

小木曾智信（言語変化研究領域教授）

木部 暢子（言語変異研究領域教授，副所長）

迫田久美子（名誉教授，広島大学特任教授）

プラシヤント・パルデシ（理論・対照研究領域教授）

司 会 前川喜久雄（音声言語研究領域教授）

前川：最初に司会から。今日はお題を3つ指定されています。最初に「10年前に共同研究プロジェクトを始めるにあたって考えたこと」、次に「大学との差別化（国語研のミッション）」、最後に「今後どうしたらいいか」です。最初のお題については、第3期について話していただいてもいいけども、10年前ということだから第2期について主に話していただければと思います。最初に自分が何を、どんなことを10年前に考えてましたみたいなことを言っていただければと思います。

前川：最初に木部先生、お願いします。

木部：私は鹿児島大学から2010年に国立国語研究所に赴任しました。そのときは消滅危機言語・方言の記録を保存するためのプロジェクトを担当することを考えてきたわけです。鹿児島にいたときから、奄美や沖縄の方言を調査して、そして学生を連れて調査に行ったりもしてましたので。ユネスコの消滅危機言語の発表が2009年です。奄美、沖縄の言葉の多くが消滅危機言語に入っていますので、それを国立国語研究所で記録保存するプロジェクトを作るという考えできました。

国立国語研究所は、方言研究の長い歴史があって、方言調査の蓄積がありました。ある地点に特化した調査も、これまで鶴岡とか白河とか幾つかありました。けれども、危機言語に特化した調査、奄美・沖縄の方言の調査は、国立国語研究所では今まであまり行われていなかった。それで、そういう調査をするという気持ちでできました。

前川：次、迫田先生、お願いできますか。

迫田：木部先生が赴任されたときのことを話されたので、私もその頃の、なぜここに来ることを決断したかということも含めてお話ししたいと思います。私が来るときは、この国語研の中の日本語教育研究領域という

日本語教育の部署がなくなるか、あるいは残すかという、その騒動の真ただ中だったんですね。いろんな仕分けの関係で、それが宙ぶらりんのまま、残るか残らないか分からない状態、その段階でセンター長のお話をいただきました。ですから、もしかしたら赴任しても、なくなるかもしれないという、そういう危機感もあったんです。そのとき、所長から「研究をやってください。教育ではなく研究です。」と言われましたが、実は、そのとき、教育ではなく、どうするのが研究なのかというのが分からないまま、自分の中で解決しないまま国語研に来ました。でも、国語研で4年間一緒にいろいろ仕事をさせていただいて、私がやりたかったことはこういうことなのかなというのが、ぼんやりとですが分かってきました。



迫田久美子氏

私は2012年に国語研に着任しましたから7～8年前ですけども、来た主な理由は2つです。1つは、研究と教育はどう違うのか、それから私たち日本語教師のような、現場で日本語を教えている教師が直面する課題をどうすれば研究にできるのかというこ

とを明らかにしたかったからです。できれば日本語教育をやっている現場の先生たちにも研究がもっと身近であること、あるいは考えられるということと一緒に考えていきたいという気持ちがありました。

もう1つは、日本語学習者のコーパスを作りたいという理由です。これまで、公開された日本語学習者のコーパスというのがほとんどありませんでした。コーパスを使って研究している人は自分の手元には学習者のデータがあっても、それを公開するということがほとんどなかったので、結局、習得研究をやる人はまずデータ収集から始め、それから研究にとりかかるという過程が必要で、2倍も3倍も労力が必要でした。そのため、習得研究をする人がなかなかいませんでした。データ収集が大変なので、一部の習得研究者は、アンケート調査や穴埋めテスト、さらに3つか4つの項目のどれかを選ぶ選択肢テストを行っていました。もう少し学習者の産出データに踏み込んで研究してほしいと残念に思っていました。そこで、国語研で学習者のコーパスをきちんと提示し、そしてコーパスの作り方をもっと日本語教育の人たちに紹介したいという目標を持ってここに来ました。

ですから、私が国語研で共同研究プロジェクトを始める時に考えたのはこの2つです。1つは、教育というものをどうすれば研究にしていけるのか、もう1つは、いいコーパスを作りたいということです。それができるのは、国語研でしかないと思っていましたので、ここに来ることに決めました。

前川:ありがとうございます。続いてプラシヤントさん。

パルデシ:ちょうど2009年の10月1日に、神戸大学から国立国語研究所に赴任しました。当時はこの研究所にはなかった、新たな研究分野の部門を作るという計画があり、

言語対照研究系という名前の新しい研究系ができて、角田先生と私の2人でスタートしました。当初の目標は、世界の言語から見た日本語、あるいは世界の言語の中の日本語の位置付けを明らかにする研究を行うということでした。こういう研究はそれまでもいろんな大学で小規模で行われていたんですけども、そのような研究を国語研で、いろんな大学の先生を巻き込んで大規模に行う、そして研究の成果を国内外で発信するということが目標の1つにしました。つまり、日本語で論文を書く人は日本語で書き、国内で論文集を出版し、英語で書く人は海外の出版社から出版するということです。

それと同時に、類型論の場合は、より多くの研究データをネットで配信するということが当時始まっていました。マックス・プランク研究所のWALS (World Atlas of Linguistic Structures、ワルス)はその先駆けです。WALSと同じようにプロジェクトの中でデータを収集し、それを英語と日本語の両方で、ウェブで分かりやすく、言語地図の形で可視化した上で公開することによって国内外で発信することももう1つの目標です。(図を参照)。



『使役交替言語地図』

<http://watp.ninjal.ac.jp/>

すなわち、日英語による論文の出版とウェブデータの公開という2つの目標を掲げ、国内外の多くの研究者とともに類型論的な

研究を推進するプロジェクトを始めたわけです。

前川：ありがとうございます。続いて朝日さん。

朝日：私は研究所での研究ではなくて、人間文化研究機構の推進している日本関連在外資料の調査研究という事業が第2期から立ち上がったんですが、そこに参画するという立場で申します。10年前というのはまさに事業が立ち上がったタイミングより少し後の時点で、確かその機構が連携研究の公募をすると、募集をするというので、シンポジウムをやるというエントリーをさせていただいたんです。それが日系人の一世たちのオーラルヒストリーのデータを使った調査研究ということで、エントリーをしたら機構のほうから話があって、その在外の資料の調査研究の事業に関わってほしいということを経営の理事から言われて、それで主に音声資料を扱う担当の班ということで参画したのがきっかけです。



朝日祥之氏

なぜそれをやろうと思ったかというと、それまで個人的にサハリンでやっていた、日本語の残存の調査をやっていたんですけども、そのときに直面した問題が、自分が現地に入ったのは2003年からだったんですけども、現地に行って言われたのは、なぜ10年前に来なかったのかという話で、自分

が調査できる時代より前の時代の様子を知らうと思うときに、時代的にアクセスできない状況があつて、そこを埋め合わせてくれるのが、その当時の録音映像資料だった。ただサハリン自体に、70年代、60年代の資料があるわけではなかったもので、調査をする可能性もないというところに、たまたまハワイで日本語で博士論文を書いた人がいて、彼女が1973年に、ハワイ大のある先生のアサインメントのデータを使って分析したというのがあったんですが。そこで何か思い付きというのか、オーディオテープの中に一世の語りがあるということで、その日本語の特徴分析ができればいいなと。もしそれが音声としてさまざまなところに資料としてあるのであれば、それを日本関連の資料と位置付けて、北南米の移民社会で発掘をして、それを言語資料として使える形で資源化していこうということの可能性を感じてプロジェクトに取り組みました。それがきっかけです。

前川：ありがとうございます。最後になりますけど、小木曾さん。

小木曾：恐らく10年前というと、まだ前川さんのところで、BCCWJを作っていた頃だと思います。旧国語研の時代からの、1億語の現代語コーパスを作るという大規模プロジェクトがそろそろ終わりにかけてきた頃でした。そのときに、急に移管という話になったのですが、その中で新たに研究所に日本語の歴史研究を1つの領域として立てて、本格的に行うという話が出てきました。

実はこれは偶然なのですが、私も古い時代の日本語をもともとやっていましたし、BCCWJに取りかかる前には、研究所で『太陽コーパス』という明治時代の資料のコーパス構築をやっていたんですね。そしてBCCWJを作るときには、現代語の形態素解析をやっていたわけですけども、同じ方法で古い時代のテキストの解析ができないか

と個人研究をしていた。そういうときにちょうど話がきたものですから、これはぜひ現代語のコーパスとは別に歴史が研究できるコーパス、それも BCCWJ のように単語で検索できるものを作るべきだというふうに考えました。

当時のプロジェクトリーダーは客員の青山学院大の近藤先生で、続いて内部の田中牧郎さんでしたが、一緒にそういう「通時コーパス」を作るんだということで話を始めたのが最初でした。当時は、そもそもそういうものができるのかとかいうこともよく分かってなかったと思うんです。特に形態素解析については、いろんな日本語の古い資料を解析できるか分からなかったんですけど、最初に平安時代の作品でやってみたらできそうだということで、それだったら奈良時代から現代まで、しかし著作権の関係などもあるので、明治・大正までの時代を研究できる資料を作るというのが、国語研究所でやるべき仕事じゃないかというふうに考えて、それ以来ずっとやってきたというのがこのプロジェクトです。

前川：皆さんかなり抑制的に話していただいて、だいぶ早めに進んでいます。

読者のために補足しておかなきゃいけないと思う情報が幾つかあるのでお伝えしようと思うんですけども。10 年前というのは要するに、国立国語研究所がそれまでの独立行政法人から現在の大学共同利用機関法人という形に変わったタイミングを意味してるわけです。これは非常に大きな変化で、当時の自民党内閣の閣議決定でそういう移管をやるということに決まって、ただその後、迫田先生の話でもちょっと触れられていましたけど、一旦日本語教育はなくていいと言われてたのが、いや、それでは駄目だという国会の付帯決議、参院と衆院の両方の付帯決議で、確か満票だったですね、それがあったもので、急遽日本語教育もと

いう話になったんです。そういうこともあって、10 年前に組織の質も、それからもちろん構造も非常に大きく変わったわけですが、体制も。

それでその観点から見ると、新しくできたのは、プラシヤントさんが属していた当時の対照……。

パルデシ：言語対照。

前川：言語対照研究系、それから今日代表の方はおられないけど、理論・構造研究系という理論的な研究をやるところ。そして最後に小木曽さんが話してた歴史、言語変化、要するに歴史の研究……。

朝日：前は時空間変異でしたよね。言語資源？

木部：前は時空間と言っていました。

小木曽：通時コーパスは言語資源の中で……。

前川：言語資源の中でやってた。

朝日：歴史は時空間でしたよね、前。

木部：そうですね。

前川：それで、でも要するに政府がどこに諮問したんだっけ、学術会議だっけ。

木部：経緯ですか。そこは私よく知らないんです。

前川：だから組織を変えるに当たって、どうするかということに関連する学会の代表なんかが集まったところで、われわれとは別の場所で検討してもらって、その中で通時的な研究、歴史的な研究もやりなさいということ。それから理論的な研究もやりなさいというような意見が加わって、そこでさっき言ったように日本語教育は一度外れてその後国会の決議で元に戻ったと、そういう経緯がありました。

そういう形でそれぞれ始まったわけですから、今の段階で一度、お互いにもし何か言いたいこと、聞きたいことがあったら、ここで意見交換の時間を少し取ろうと思いますけどどうですか。

迫田：逆に、私から質問させていただきたいのですが、現在までの10年ではなくて、その前の10年、つまり20年前からの10年間とその後の10年間というのは、そういう意味では国語研の流れは、変わったということになりますか。

前川：それは以前からいた人間に聞くほうがいいと思いますが、私は司会なので、この二人(朝日と小木曾)に聞こうと思うけど、小木曾さんはどうですか。

小木曾：ものすごく変わったと思います。ただ個人的にやっていたことについては、言語資源についてはほぼそのまま継続されてきたし、なおかつ歴史という観点が加わって割と自然に変化していったから良かったと思います。けれども、分野によってはある意味、ものすごく大きな断絶があったところもあって、社会言語学的な調査などは1回断絶してしまったのではないかと思います。ほかにも幾つかの過去の研究分野は、多分70周年で取り上げられるような過去の研究とは、ずいぶん違うものになった部分はあるかなと。



小木曾智信氏

言語資源ということに関して言うと、実はコーパスを作ってた期間がちょうど移管のときを挟んでますし、またコーパス以前についても、語彙調査というのはずっと戦後の割と早い時期からやっていて、コーパ

スはある意味その延長線上にあるので、そういう意味では比較的継続性は保たれているかなとは思いますが、その他の部分では大きな変化があったと思います。

一方で、歴史の研究そのものをやるというのが研究所では行われてこなかった。昔の規程を見るとやっていいはずだし、やってもおかしくなかったけれども、事実としてはほとんどなかったわけなんですけど、そこに新たに歴史をやることになったという意味で、すごく大きな変化ではあるんです。ところが新しい人が来たかというところ、歴史のところでは来てない、むしろ減ってるので、そういう人の面ではそんなに大きくは変わってないという、そんな感じでしょうか。

もう1つ言わせてもらおうと、これはこの研究所がということじゃないのかもしれませんが、その頃から非常勤の割合がものすごく大きくなっていて、常勤の数より多くなった。それがかなり研究所の仕事の性質にも影響しているかなという思いはあります。

前川：今の話で断絶したもので社会言語学というのがありましたけど、朝日さんはそちらの關係に深いわけですが。

朝日：移管前と後でやっぱり大きく変わったのは、特に社会調査型の大規模なデータを短期間で、所員が20~30人押しにかけて取って取るようなことが全くなってしまうたというのは確かにありますし、特に当時の研究開発部門というのがあった中に、言語生活グループと言語問題グループがあったかな、2つが主に社会言語学に関わる領域だったんですが、移管を境に大きく性格が変わってしまい、それは継続性もなくなってしまい、どこか誰かが受け皿にならざるを得なかった経緯があります。

ちょうど移管をすることが決まり、教員審査をし、顔合わせをする日があったんで

すけども、機構本部で当時のメンバーが行って、確か将来の系長になる先生方が、木部さんがここにいらして、そこで確か新しい研究所の、何をするかという話をした機会があったんですが、その日は実は愛知県の岡崎で敬語調査をする前の日で、それを出て、私、岡崎に入っていって、その次の日から調査の準備をして調査をし、当時の杉戸所長がやって来て、所長に調査に出かけていただいたんですけど、非常に複雑な思いで調査をしたのを覚えてます。その調査の結果をまとめたのが確か 2009 年度だったはずなんですけども。途中で体制が変わるので、誰が引き継いでやるかということは調整をして臨んだんですけども、やっぱり移管した後に、それまできちんと位置付けのあった岡崎のプロジェクトの取りまとめ方に関してはかなり気を遣いましたし、その組織の枠を超えて、取りあえず収束させたという経緯があります。

その後もなかなか……。もちろん時空間変異研究系に私は属しましたし、あそこで相澤さんとか私とか、できる範囲での社会調査型のものを、従来とは違う形でさしてはもらったんですけども、なかなかコーパスという資源を作るという流れと、あと RAW データの提供のところに社会調査型の調査という、どちらかというクロス集計を出すほうが強いので、RAW データを出すということの時間がかかってしまう性格があったので、立ち後れがあってしまって、それが第 3 期になったタイミングで、うまく位置付けが社会言語はできなかったというのが流れとしてはあるかなと。そういう意味では性格は変わってしまったと言わざるを得ないと。

前川: 独法のときは、独立行政法人自体の性格として、国民への直接的なサービスみたいなものがかなり強く意識されてたわけですよ。実はそれを一番担ってたのは恐らく日

本語教育だろうと思います。その辺をずばっと切れという、いわば政治的な要請があったもんで、そこで先ほどの迫田先生のお話につながるんだろうと思うんですよね。サービスマインでやってきたのに、それを切り捨てて研究をやれという話になったから大変だったということですよね。

迫田: そうですね。実は、私は、30~40 年前の国語研の日本語教育夏期研修で育ててもらって日本語の教師になったんです。国語研はそういう社会還元型のサービスをしていたんですよね。日本語教育能力検定試験も何もなかった時代に、これからは日本語教育を広め、留学生を 10 万人増やそうという中曽根首相の号令で、日本語教育の資格のない人たちにとにかく学んでもらおうということで、東京と大阪で日本語教育夏期研修として 1 週間、著名な先生方が朝から晩まで教えてくださったんです。

前川: 古い話になってきました。

迫田: 国語研には、そういう社会貢献の機関としてのイメージがあったので、この 10 年前の移管というのが何か大きな変化をもたらしたのではないかなと思うんです。特に、日本語教育研究センターは教育ではなく研究をしてくださいという任務を受けたので、私の中で国語研の位置付けが、ある意味でとても混乱しました。恐らく周囲の日本語教師や日本語教育に関わる大学の先生方はもっと混乱したのではないかなと思います。したがって、そういう意味で、特に、日本語教育に関わる教師や研究者の中では、この 10 年間のパラダイムの転換というのは、大きかったかなと思います。実際に国語研に入ってみて、本や報告書で知ってはいけれども、方言などの社会言語的な研究やコーパスの研究はこんなふうにするんだというのがよく分かり、研究領域の広がりや研究の方法をもっと広めていくということも大事だと痛感しました。

前川：大きな流れからすると、もともとは独法の前に、いわゆる国立試験研究機関の時代があって、そこはどっちかという、政府から与えられた課題を解決するための研究所という位置付けだったんです。それから、より国民へのサービスを意識した独法になり、そして今は実はある意味一番アカデミックな形で位置付けられたと、私はそう思ってるんですけどね。そのための変化を求められたということです。

木部：大学共同利用機関という組織に入ったことが大きいと思います。やっぱり研究機関ですから。

迫田：それまでの独法時代と、ラベルというレッテルが違うので、中身を変えて。

木部：中身を変えざるを得ない。

前川：と同時に付帯決議もあったから、あれは要するに今までやってきたものをそのままやれということを言ってるわけだから、そこで両方やらなきゃいけなくなって出発点から大変だったんです。一番そこを、いわば負担していただくために（迫田）先生に来ていただいたということだったのだと思います。

前川：それでは1番目の話題はこれぐらいにして、2番目のほうに進みたいと思います。2番目というのは大学との差別化です。これは今言いました大学共同利用機関法人、これをアカデミックな研究に主体を置くという点では大学に近いわけですが教育はしない。総研大というのがありますが教育はしない。総研大というのがありますけども、国語研は参加していないし、そもそも一番重要なところではない。そして、そもそも大学と同じであっては困るわけですね。だからどういう点で、大学と差別化するかということが問題になるんですが、実は、これは実は独法のときから常に言われてきたことで、私のように古い人間には頭にこびりついてる問題です。その私見を言わせてもらおうと、最近独法時代に較べると、ちょっとそ

の差別化が最近あんまり真剣に考えられていないのかなという気がして、あるいは共同利用機関になったことによって、差別化をあんまり意識しないような雰囲気になっちゃったのかなという問題意識があるんです。まあ、私のことはともかくとして、やっぱり皆さん現在の第3期の研究を進めていく上で、大学とどう違う、自分のやってることはどう違うんだということを言えるか言えないかというのは非常に重要なことだと思います。その観点から、これは第2期でも第3期でも構いませんので、それぞれのお仕事について話していただければと思います。

今度は逆順でいいですか。じゃあ小木曾さんから。

小木曾：私がやってる通時コーパスは比較的差別化がやりやすいところで、コーパスを作るというのは規模の面でも、それから継続性の面でも、普通の大学の教員にはできないことなので、だからそれをまずはしっかりやるのが差別化につながるだろうと思っていて、他でできないことだからこそ頑張ってると思うところなんです。



『日本語歴史コーパス』のHP

https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/

いっぽうで研究の面ではどうなのかというと、例えばコーパスを活用した研究というようなときに、これまでの人文科学関係の研究者ってどうしても個人研究中心で、共

同研究といっても個人研究が連なってるだけというものがすごく多かったと思うんですけど、コーパスを本格的に使おうと思うと、やはり内容の高度化ということもありますし、本当の意味での共同研究をしていかなければいけなくなっているのではないかなと思っています。作るのも共同でないとできないんですけど、本格的に使うためにはやっぱり共同研究ということが必要になってきて、そこが従来の個人研究型のものと違いが出てくるところかなと思っています。

前川:ありがとうございます。続いて朝日さんをお願いします。

朝日:基本的に今の第2期、第3期にかけての私がやってるプロジェクトの自分なりのテーマというのは学際性でして、言語研究として日系移民たちの日本語研究をしたいんだけど、彼らの社会、歴史を巡る研究というのは既になんか他分野が先行してまして、特に歴史学、社会学、人類学ではかなり蓄積がある領域です。彼らとの間でどういう関係を持っていくかということと、その中で言語研究をどう位置付けるかということが、僕自身に対する大きな問いではあるんですが。

そういうことを考えたときのプロジェクトの進め方として、そもそも大学との差別化において言えば、多分移民関係の研究自体、学際性を帯びるんだけど、大学が組織的にこの問題をやってるか、多分ほとんどやってないと考えてます。むしろ共同利用研だから他分野の先生方に関わってもらって、国際的に関わってもらって研究を進めるというところは、共同利用研としてのミッションに即したやり方なのかなというふうに考えてますし、あと、今まさにこれから実現させようとしてますが、博物館での企画展示を実施する。これも大学に博物館があれば差別化は難しいのかもしれない

が、一定規模の研究成果を3,000万ぐらいの予算を使って、2カ月近い期間、博物館で展示をするということも、これはそう簡単に大学の一研究者ができることではないだろうというふうに考えます。

これはもちろんこの後に、今のプロジェクトが関わる話、ミッションの1つではあるんですけども、どう日系社会に、現地の社会にどう還元していくかということが問われるものでして、そういう意味では現地の博物館だったり、現博物館、大学が行ういわゆる普及広報的な活動にどう関わっていくかということが問われてきましたし、それは来年度以降にやるようなことではあるので、そういう活動自体が大学との差別化、共同利用研ならではのやり方というふうに個人的には考えます。以上です。

前川:プラシャントさん。

パルデシ:大学との差別化なんですけども、類型論という分野自体が、日本の大学で非常に限られたところにしか先生がいなくて、類型論を専門とする人が非常に少ない。日本の中でより多いのは、個別言語の研究者です。個別言語の研究者の多くは自分の研究対象の言語の記述や研究は行いますが、必ずしも日本語との対照研究は行っていないというような現状があります。



プラシャント・パルデシ氏

そういう中で、国立国語研究所で初めて

新たな分野として対照言語学という系ができて、そこでまず個別言語研究者を集めて、それぞれの研究している言語を理論的な枠組みを援用して、分析し、日本語との対照研究を行うということが1つの大きな課題でした。これは1つの大学の中では解決するのが難しい課題ではないかと思います。

日本語から見た世界の言語、あるいは世界の言語から見た日本語、内から見た日本語、外から見た日本語という観点を全面的に出して、これは角田先生がつねづね口癖で言っていましたけれども、日本語から出発していろんな研究を進めることと同時に世界の言語から日本語がどう見えるかという双方向の研究を行う。そういう方針でプロジェクトを立ち上げました。また、対照研究または類型論の分野では、自分の研究データをどうやって公開するか、あるいは出版するかという課題があります。これも1つの大学の中では解決するのが困難な課題です。我々のプロジェクトでは論文集の出版を企画して、共同研究の成果を国内外で発信することにしました。また、データベースを構築し、ウェブ上で効果的に見せるプラットフォームを提供しました。これも1つの大学の中で作り、維持・管理するのは困難です。このような研究成果を持続的に発信するためのプラットフォームを提供するのが国語研の役目ではないかと思います。

前川：どうありがとう。迫田先生お願いします。

迫田：国語研と大学の差別化については、国語研に入る前と入ってから考えたことがそれぞれ1つずつあります。この2つに共通する大学との違いは、大学の場合、1人の研究者、あるいは2～3人の研究者ではできない調査や研究であっても、国語研であれば、比較的容易にできるという点です。

差別化の1つ目は、大規模なデータを収

集し、そのデータに基づいた実証研究ができるということです。データサイズも単に、ある1つのクラスでの作文データを収集するという規模ではなく、世界を視野に入れた広範囲の教育現場でのデータを収集することができます。さらに、データ数だけでなく、時間をかけて縦断的に収集することもできます。今年で、北京師範大学の日本語学科の学生を対象に、入学時1年から大学を卒業する4年までのデータ収集が完了します。これは国語研が移管された後、北京日本学研究中心と国語研が交流協定を結び、その際に国語研側が提案した研究交流のプロジェクトの成果です。大学1年生が日本語を勉強し始める時期から、4年間で卒業するまでの学生17人のデータが記録されています。このような長期間にわたるデータ収集は、大学の一個人、あるいは2～3人の教員だけではなかなか維持できるものではありません。そういう時間のかかる縦断的なデータ、そして、横断的に多くの言語の学習者データを集めるのは、やはり大きな組織でないと容易にはできないと思います。加えて言えば、より質のいいデータを収集していくこと、先例を示すべきは国語研のデータはないかと考えました。そのためには、まず、研究のための基礎データを明確に示し、そして、それを基にどのような研究ができるのかということを広く示していくことは、ある意味で国語研の使命だと思っています。

差別化のもう1つの点は、他の学問分野・他の研究領域とのコラボレーションです。もちろん大学にも、例えば日本語教育であれば日本語学とか言語学とか、いろいろな分野の研究者がいますが、多くの場合、各自の研究を深めるのに精いっぱい、複数の他領域の研究者と連携して、研究や調査を行う機会は少ないように思います。長い研究の流れの中で、点としてのコラボレーシ

ョンはあっても、線につながるようなコラボレーションの成果がないように感じます。それに対して、国語研ではそれぞれの研究領域が、つながり合うために存在しているように思います。例えば、以前は私自身が学習者の誤用だと思ってるものが実は誤用ではなかったという、非常にショッキングな事実を方言研究や歴史研究から学びました。広い視野で研究ができるという、そのお手本を示すのはやはり国語研の使命だと思うんですね。他領域の視点や成果が自分の研究の過程において栄養となり、自分の研究をより豊かにしてくれると思います。

私は、コーパス開発研究と他領域との連携研究の2つは、国語研がこれから向かっていく、あるいは国語研でしかできない大きな研究の潮流ではないかなと思います。

前川：ありがとうございます。木部さんお願いします。

木部：私は元、大学に長くいたのでその立場で言うと、端的に言って、大学は「教育・研究」、共同利用機関は「研究・教育」です。平成16年に全国の国立大学が法人化されて、そのときに大学共同利用機関も作られました。第1期中期目標・計画(2004～2009年)のときは、私は大学にいましたが、大学で法人化に関する書類を書くときに「研究・教育」と書くと、それは駄目だ。ここは大学だから「教育・研究」と書かなければいけないと言われ、そのように書いて文科省に提出しました。ところが、大学共同利用機関は順序が逆で「研究・教育」なんです。だから、大学は教育をするところ、そのために研究する。大学共同利用機関は研究をするところ、その結果を次世代の若い人に教育する、そうなるんですね。

でも、実際には、大学の先生もみんな研究してますよね。大型の科研費を取っている人も大学にはたくさんいます。それと研究所とどう違うかという、やっぱり組織の

大前提の違いではないかと思います。大学共同利用機関は大きなビジョンに立って、日本の学術研究の計画を立てて、全国の大学の先生がその研究に参加する。大学の先生はそれを持ち帰って教育に反映させる。大学共同利用機関はいろんなところの先生を組織して、それによって更に研究の質を高める、今、はやりの言い方で言うと、研究の高度化を図る、そういう循環システムが法人化のときに作られたんだと思うんです。それで大学共同利用機関と国立大学法人は同じ並びで、同じ法律の下に設置されているわけです。



木部暢子氏

私は大学にいたとき、運営的なことをやってたので、そのように理解していました。それでここに来たときに、やっぱり、大学の先生にはできない全国的組織を作って、そこにたくさんの研究者が集まることによって研究を高度化する、そういうシステムを作りたいと思って、危機言語プロジェクトを運営してきたつもりなんですね。

国語研にきた最初、第2期中期目標・計

画期間中（2010～2015年）は、ユネスコが指定した危機言語、奄美や沖縄、それから八丈だとかアイヌに特化してプロジェクトを運営していましたが、第3期中期目標・計画期間（2016～2021年）からは、対象を本土にまで広げて、ほぼ全国をカバーする規模で危機言語のプロジェクトを実施しています。私自身は全国の大学の先生がプロジェクトにたくさん参加することによって、研究の質を高め、大学の先生にはそれを持って自分の大学や地域に戻る、そういう循環システムを作ろうとしているつもりなんです。

それと、大学とのもう1つの違いは迫田先生もおっしゃったように、大学の先生が研究するための基礎資料、これはプラシャントさんもおっしゃったのかな。大規模な基礎資料を作って公開し、研究のために役立ててもらおうということです。そのためにいろんな分野、多分野と連携して、言語資料、言語資源を整備する。それを提供することだと思っています。今年、方言コーパスを公開しますけども、いろんな人が使って研究できるようなデータを作ることは1つの大学ではできないだろうと思っています。

前川:ありがとうございます。ちょっと注釈を入れますと、木部先生は国語研に来られる前は鹿児島大学の法文学部の学部長をなさってたんですね。今のご発言はそういう経験的なものも含めてだったと思います。

それで今一通り、大学との差別化についてご発言いただきましたけども、中身をまとめますと、1つはやっぱりマス（集団）でやらなきゃいけない、データを作るような仕事です。これはやっぱり大学ではできにくいので、ひとつあるだろうと思います。それからもうひとつは、そういったものを使って共同研究をやるという、そのふたつの面で、意見がだいたいまとまっていたかと思っています。

古くからいる人間からすると、実は共同研究という言葉はずいぶん意味が変わってきていて、昔は集団でやる、研究所の中でたくさん人間がひとつのプロジェクトをやるというのを共同研究と称していて、昔の国語研の年報とかを読むと全部そういう意味で書いてあるんですね。ところが今の体制になってからは、日本全国の研究者、大学の研究者を対象に何か共同研究を組織するという意味の共同研究、そういうふたつの別の意味の共同研究が共に差別化のキーワードになっていて、これは言葉が同じというのはまずいかと、私は常々思ってるんで、何か考えるべきかもしれませんね。でも、とにかく2種類の共同研究というのが大学との差別化において重要なキーワードということでは皆さんの意見は一致していたと思います。

そのうち古くからあるといえますか、集団でコストを集約してコーパスを作るとか、方言調査を行うとか社会調査を行う、そういったものに関して、これは昔からやってきてることなのでとにかくとして、新しいほうの全国の、あるいは国際的な研究のネットワークをどうやって作っていくとか、そこで究極的にはより新しい科学のあり方というか研究のあり方を作っていくということが、恐らく共同利用研のミッションなんだと思うんですね、新しい学問を作り出すということが。その点に関して、3番目の今後どうしたらいいかという話題に入っていこうと思うんですが。その前に今皆さんの中で何かお互いのご発言に対して補足とかあれば。

迫田:木部先生のほうから、国語研は研究から教育へ、大学は教育から研究へというお話が出ましたが、それに関連して、最近、国語研は理論と実践の橋渡しができる機関になるのではないかということを考えるきっかけがありました。

2〜3週間前に北京で講演を頼まれたのですが、そのときのタイトルが「理論を实践につなぐ」というテーマでした。このテーマは、ここ20〜30年間ずっと掲げられ続けていますが、このシンポジウムのおかげで、私は理論を实践につなぐことができるのは国語研ではないかなという思いを強くしました。それは理論というものは、ある種、データから積み上げていくものでもあるし、そしてその理論をいかに現場につなげていくかという実践的な提案も国語研の研究によってできるからです。

私ごとですが、日本語教師になった頃は、学習者には知識を頭に入れること、教えるときはそうすべきだという考え方でしたが、実際に現場で教えてみると、反応が違ふことに気づきました。データを見ることによって、学習者は教えたようには学んでいない、使っていないことに気づかされたのです。その気づきから、教師は指導法を変えたり、練習方法を考えたりします。つまり、データの中には理論のベースとなるものもあり、指導の手がかりとなる情報も潜んでいると思いました。その意味で、コーパスデータを構築する役割を担う国語研は、理論と実践の橋渡しの立場にあるのではないのでしょうか。

もう1つ、データが教育現場に活かされているエピソードをご紹介します。先の北京のシンポジウムで、次のような話を聞きました。ある大学に宿題で出す作文に助詞の間違ひがない中国人留学生がいたそうです。その学生たちに「どうやって助詞の選択を正確に行っているのか」と聞いたところ、彼らはBCCWJ(現代日本語書き言葉均衡コーパス)を利用していると答えたそうです。例えば、助詞の「に・で」の選別で迷った時には、BCCWJのクイックコードダンスを利用して書いた文章を入れ、そこに「に」が出るのか「で」が出るのかを検索し、頻度が高い

ほうを選ぶのだそうです。そのおかげで、彼らが書くレポートには全く助詞の間違ひがないというのです。データも使い方を工夫すれば、さまざまな領域で使うことができると思いました。これも国語研のデータから教育現場への貢献の1つと言えると思います。

前川：今のお話は質問というより補足ですね。

迫田：そうです。

前川：分かりました。

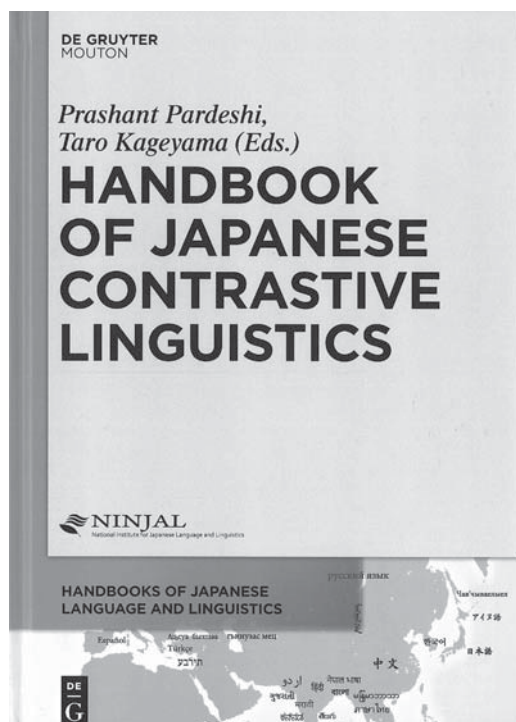
パルデシ：もう1つだけ補足。

前川：ちょっと待って。今の話で實際上今後どうしたらいいかが完全に入ってしまったので、成り行きでそっちのほうに、そっちも含めて発言をしていただければと思います。また今後どうしたらいいかについては、一言ずつ最後で言ってもらおうと思いますけれども、取りあえずここでこんだけ話が出てしまいましたから、続けて同じようなテーマで発言をしていただければと。じゃ、ブラシャントさん。

パルデシ：さっきの大学との差別化の中で、国語研らしい貢献といえるのは、BCCWJコーパスの公開、朝倉書店から出てるコーパスシリーズ、Moutonハンドブックの刊行だと思うんですね。これも1つの大学で行うのは非常に困難かと思います。これらはまさにわれわれが誇りを持つべき共同研究の成果であって、一人でも多くの人に伝えるべきものだと思います。

迫田先生と同じく、私はこの1年間で10カ所以上、世界各国の日本語教師と学習者に向けて日本語学の講習会を共同研究者と行ってきましたけれども、多くの人が国語研のコーパスやデータベースを使っているということがわかりました。同時にこれらのコーパスやデータベースの存在を知らないという人も多く、そのような人たちに知らせる活動を継続的行う必要性を感じまし

た。



Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズ (全 12 巻)

今後も社会に研究成果をいろいろな形で発信していくわけですが、論文やウェブ、の形だけではなかなか一般に浸透しないということは、この 1 年の活動で分かってきました。やはり海外に行って、講習会やチュートリアルなどを行って、作った本人直接伝えることが必要だと思いました。そうでないと、そのツールの機能を正しく伝えることが難しいと思いました。研究所としても、いかに発信していくかということにもう少し力を注いだほうがいいと思います。

前川：ツールの普及というか、そういう話になると恐らく小木曽さんがいろいろあると思うんだけど、どうでしょう。

小木曽：普及活動ですか。

前川：データも含めてもいいけど。

小木曽：いろいろあるところですね。まずユーザーインターフェースを普通の人に使ってもらえるようなのをどう作っていくかと

いうのもあると思うんですが。これはなかなか大変で、研究所に専門家がいるわけでもないし、そういうことはお金も掛かるし、維持していくのも大変だということがあると思います。そかし、それは 1 つやっていかなきゃいけないこととしてあるのかなと思います。

もう 1 つはやっぱり現場に実際に行って説明すると喜ばれるし、広まるんです。それは大事なことだと思ういっぽうで、そこまで全部はできないんじゃないかということもあるんですよ。全国の国立大学行脚とかやっていると、それだけで終わってしまうと思うんです。何かやり方をいろいろ考える必要があるのかなと思います。通時コーパスということに限ってみても、やっぱり年に、実際に行ってるのは 2~3 カ所なんですよね。また、来ていただいた先生に覚えてもらって、という説明会も年に 1~2 回やってるんですけど、なじみのない人たちにはそれだけでは難しいらしくて、これからどうするかなというのはちょっと考えるところです。

1 つ思ってるのは、とにかく自分たちで全部やろうとしないで、うまく巻き込んで循環を作るのが大事かなというふうに思っています。今のような教えることも、広めるということもそうなんですけど、実はデータづくりの側でもそうじゃないかと思っています。今までのように予算なんかを集中投入して、人員も配置して大きなコーパスを作りますというのは、それでできるものは確かに間違いなくいいものなんですけど、お金が掛かりすぎます。たとえば、恐らく BCCWJ ができたのは、あれは独法時代だったからです。今の体制であれを作ることはほぼ不可能だと思います。私自身も多分エフォートの 70% ぐらいをあれに突っ込んでいましたし、周りにいた人たちもそればかりをやっていました。それも研究所の予算と

特定領域の予算を全部突っ込んでということです。ああいう規模のことは今後そうそうできないだろう。またこれは人文系全体でもありますけど、これからパイが小さくなっていくところで、今の状態を維持することさえ、実は結構難しいと思っていて、そういうときにやるとしたら、循環、巻き込んでいくということではないかと。実は、コーパスのよさを分かってくれた人たちが、自分も小さなコーパスを作ろうというふうになってきはじめています。そういうのを国語研でフォーマットみたいなのを決めた上でこちらにうまく取り込んで、雑然としたものを入れるわけにはいかないんだけど、ある程度整理した上で取り込んでいって、それはそれとしてオフィシャルのとはちょっと違うコーパスとしてみんなが使えるような仕組みを作ると、自然とコーパスが大きくなっていくし、いろんな人それぞれが作ったリソースが広まっていくという形になってよいのではないかなんてことを少し考えています。

今後どうしたらいいかということなんで、そういうオープンサイエンスという話に多分つながってくると思っているんですけど。研究所主導で全部やるということが厳しくなってくるので、そのときにはいかに周りをうまく巻き込むか、それは研究者だけじゃなくて、他の機関かもしれないし、あるいは一般市民かもしれないと思うんですけど、そういう形で何かできるとよいかなと。

迫田：循環という意味がよく分からないんですが…つまり、これからは今までのBCCWJのようなものは、そんなには簡単にはできない。そういうのが1つあれば、またもう1つ大きなコーパスを国語研だけが構築するというよりは、それ以外で、さまざまな人たちに協力をしてもらって、それぞれの大学だったり個人だったり何かデー

タを集めてきて、それを吸収していくということですか。そして巨大になっていくという。

小木曾：私がイメージしているのは、歴史コーパスだと、いろんな時代の資料の専門家がいて、その人たちがデータを作ってるんですね。他の人には作れないような高度なデータを作ったりするわけなんですけど、それらは全然違うフォーマットで保存されてたりとか、その人しか使えない形だったりとか死蔵されてたりするのが結構いろいろある。そういったものを国語研の側でうまく取り込んで。

迫田：下請けと言うと変ですが、データ受け入れの支店みたいなのを作って、そしてみんなが本店に差し出すみたいなことになるのでしょうか。

木部：何かそれはヒエラルキーみたい。

小木曾：ヒエラルキーとしては考えてなくて。

木部：民博がフォーラム型ミュージアムというのを第3期から模索しています。民博は世界中に研究の資料があるのですが、それらが急速になくなりつつあるので、地元の人を含めて研究者や学生などだれもが自由に民具などの資料の写真やそのメタデータ情報、意見などをネット上のクラウドに挙げるというシステムです。

迫田：そういう形ですか。

小木曾：それに近いですね。要するに国語研側で「中納言」で検索できるような形までもっていくということで、どっちが下請けか分からないわけですが、ほんとに。作ってくださったものをみんなで使える形に直してやることで、また他の人もということですね。そういう循環が、歴史コーパスで扱うような資料では多分あり得て、少しそういうことを考えていきたいなと思って。

パルデシ：リソースのシェアリングをするというような発想ですね。

小木曾：そうですね。

パルデシ：いろんな人がいろんなリソースを持っていて、それをシェアして、同じプラットフォームで使えるものは同じプラットフォームで提供する。

前川：言語資源では時々インターオペラビリティという言葉を使うんだけど、お互いに運用できるようにする。それは必ずしも、いわゆる生データだけじゃなくて、アノテーションなんかで、小木曾さんなんかはむしろそれを考えて。

小木曾：それも両方考えて。

前川：ある時代のある専門家がこの時代のものについて非常に、その人にしかできないようなアノテーション、それが共有されてみんなで使えるようになって、それができるような形で最初から作業をやってもらいたいな、そのための枠組みを作るとか、そういったことの重要性だね。

小木曾：はい。さっきおっしゃったプラットフォームですね。研究のプラットフォームを作ってフォーマットをこちらで指定して、それに合わせてデータを作って入れてくれたらみんながその上で研究ができるようになるような。一から全部やってあげなくても、多分お手本を1回示せば、こういうふうに資料を作ることによって使えるようになるってことが分かってもらえたら、乗ってるくれる人たちはたくさんいるんじゃないかな。逆に言うと、そういうのがないと、1人の大学の研究者では、データを作ったとしてもみんなに使ってもらう方法がないわけです。作ったデータをそこに乗っけてもらうような形が実現できると、それも全体として一種の共同研究だと思いますし。

木部：方言も同じなんですよね。各地の方言は……。

前川：むしろ典型です。

木部：典型です。やっぱりそのネイティブの人が、実際に入力するのが絶対にいいわ

けです。私たちみたいなノン・ネイティブの人間が学習して、その方言を記述できるようになるのにはものすごく時間がかかるので。それができれば方言のデータというのは瞬く間に増えると思います。

迫田：私も、それはずっと考えています。現在、取り組んでいる学習者コーパスが、もう少しで完成するんですが、その次にやるべき作業は、どのようにデータを集めたいのかというノウハウを明確に、かつ詳細に公開していくことだろうと思っています。特に、学習者データは収集する側の日本語教師たちの関心が高く、それぞれ宿題やテストなど、できるだけ多くの資料を集めようとしています。「これだけデータあるんですけども、これを基に研究できませんか」と言ってデータを持って来られます。多くの先生方は、テーマを考えずにとりあえず学生たちのデータを集めておこうという考えのため、後から使おうと思っても情報が足りないために使えないこともしばしばあります。そのため、これから私たちがすべきことは、データの集め方、コーパスの作り方をさまざまな形で示していくことだと思っています。データを集める際には、まず目的があり、調査デザインがあり、どういう形で公開するのか、などの事前の計画がとても大事であると知らせていくことが課題です。

パルデシ：類型論の分野では、それは非常に昔からやっていて、スタンダードな調査票を作って、世界のいろんな言語からデータを集めて、それで公開するという事はさかんに行われています。

迫田：だいたい決まってるんですか、言語類型論で使うためのデータ集めの作法とかは。

パルデシ：作法とかあります。例えば私は今、名詞修飾表現の言語地図を作ろうということで40言語のデータを共通の調査票で集めています。今年度、それをデータベース化し、順次公開する予定です。

迫田：しかし、それはやはり文法を中心とした統語論……。

パルデシ：それぞれの分野でデータを集めるスタンダードな手法を示せば、その手法に従って世界中から均質のデータを集められるのでは……。

迫田：しかし、日本語学習者の言語を研究する場合は、文法を見るのか、音声を見るのか、言語形式のバリエーションを見るのか、相づちとか、言いよどみなどを見るのかによって、データの取り方が違うんです。

小木曾：例えば I-JAS なんかはいろんな目的で使えるようにデータを作られると思うので、I-JAS 方式みたいなのを 1 つ作って、こういうふうには話者情報とかを作ったら同じように使えますよというのを広めると……。そのまま挙がってくるデータはきれいじゃないかもしれませんが、こちらが手間かけたら追加できるようなものになるかもしれないと、そういう趣旨なんです。



I-JAS の HP

<http://lsaj.ninjal.ac.jp/?cat=3>

前川：今の話は、歴史研究、日本語教育、あるいは類型論、やっぱりある意味、言語学の中の話なんだけど、ただ先ほどの朝日さんの話を聞いてると、全然違う領域とのコラボがあるわけですね。そういうところではどうですか、データの集め方を標準化するというか、どういう考えがありますか。

朝日：さまざまな資料を扱うので、単なる音

声だけではなくて、いわゆる文書だったりメモだったり、日記だったり、写真だったりしたものが含まれるので、それぞれに対してどういうアノテーションを付与するか、まさに移民を扱うのであれば、領域をまたいだ問題でもあるし、同時にそれぞれの立ち位置、例えば自分は社会学をやりたいと、自分は歴史をやりたいと、言語をやりたいと、例えば食文化をやりたいという、アノテーションの範囲が変わってきたりもするし、その間の調整は難しい部分はあったりもします。なので、1 つはアーカイブ的な発想に立つ、取りあえずテーマを決めて集めると。

これは今お金が取れるのは、強制収容の話は確実に今アメリカでお金が取れるので、70 代ぐらいから話者がほとんどいなくなってるから金が取れるんですが、それで金を取った人たちが何をやるかと。強制収容の方たちがぼそっと、ぱっと集めてしまって、一律のアノテーションを付けて、取りあえず表に出すんですね。多分この話とずれるかもしれないけど、移民の資料で問題になるのは近現代の資料なので、あまり資料の価値が分からないままに、例えば資料を集めちゃう。メモなんて簡単に集まるし、写真なんか撮っちゃえば済む話だし、実はそうなってくると、写真 1 枚 1 枚のアノテーションを誰が付けるかといったら、撮った人は分かるけど、そこら辺に何万枚とまで写真があって、さあこれと言ったら分かりっこないんですよ。だからそれでどうするか、そのときにさっきおっしゃってたような、いわゆるフォーラム型の資料情報を整備する。オープンに写真を載せて書き込んでもらうというような形です。例えばこれ誰々の家の何とかさんというようなことを教えてもらって、情報を追加していくような形か。

あと、これは僕が試みとしてやってるの

が、写真を自動認識させて、写真をパーツを解析させて、その解析させた情報を統合させるというような発想で、今整理を始めて、そうすると1枚の無意味な写真が、背景によって場所が特定できたり、話者が他の写真の顔と顔認識をさせることで、顔の情報で人が分かるということをやっていると、単なる無意味なアノテーション付きにくいものじゃなくて、もう少し自動化によって情報が整備されていく、そのためにもやはり分かっている情報をインプットしていかないと始まらないし、それを強化していかなくちゃいけないというのが移民関係であるとか、それからデジタル・ヒューマニティーの関係者の話とか聞いていくと出てきたりもしています。

前川: そういう話で言えば、恐らく方言の録音なんてのは、日本津々浦々に山のようにあると思うんですけど、何かそういう試みはあるんですか。

木部: 手法を統一化する部分と、朝日さんが言うようにとにかくアーカイビングする、その必要があると思うんです。そのために、海外のデジタル・アーカイビングの専門家を呼んで、去年はマーク・トゥーリンさんという方を呼んでワークショップを行いました。自分が集めた資料をどういう方法で公開すればいいか、そういうノウハウをいろんな人に提供するというのを去年からやっているわけです。

それから、デジタル・アーカイビングを目指すいろんな人たちと共同することを今、考えています。歴史関係の人は、紙資料をデジタル化して公開するというのをやっています。このような分野の人と問題意識を一緒にして、言語学だとか歴史学だとか情報学だとかアーカイビングだとか、問題を解決するためにいろんな分野が連携する、それが今後の国語研が目指すところじゃないかなと思っています。

それぞれの人が個別の研究をやるのは素晴らしいけども、その寄せ集めでは絶対共同研究にはならない。やっぱりいろんな分野の人が目的意識を1つにして、同じ題材でワークする、それによって、それぞれの学問分野が高められるんじゃないかって思います。顔認識の技術はほんとうにすごいですよね。多分、移民の言語研究にも、とても役に立つと思うんですよ。

朝日: これは一番、別の話なんですけど、そういう作業をして一番喜ぶのは、写ってる家族が一番喜んでくれて、特に写真が、自分は知らないお父さんの写真がここにあったとかというのも喜ぶし、音声、肉声が聞けるとか、あと映像が残ったりすることが分かると大喜びするんですよ。いっぽうで研究としてのまとめもあるけど、地位継承という意味で、例えば日系の歴史を伝えることも大事なんですけど、やっぱり大事なもので、話者たちの、本人たちの家族にそういう存在を知らせるということは、実は非常に地味ではあるんですけど大事なことで、この10年活動してて感じるところで、何回かそういう機会があったんで、それで何とか頑張ろうと思ってやったところもあったりしますし、そういう還元も忘れてはならないのかなとは思っています。顔認識は素晴らしい技術で。

木部: やっぱり違う分野の人と一緒にやると、言語学的発見がありますよね、すごく。

朝日: ありますね。Facebookで写真を顔認識でやってるから、あのイメージです。その元データ、リソースが要るんですけど、それができるとかなり進みますし、移民研究はそういう意味では、歴史上重要人物はたいがい語られてますので、歴史学のほうで。そのデータを入れてやっていけばある程度のところまではカバーできます。写真に写らない、その他多数の一般の人はどうなるか分からないですけど、ある程度の進展は見

込めるところです。

前川：もうだいぶ今後どうしたらいいかの話になってきたんですけども、今後のあり方のひとつとして、ここは先ほどからたびたび話題になってるように大学共同利用研なわけですね。従って大学とどういう関係性を持つかということは根本的な重要性を持つ問題なわけです。そしてそのためのひとつの、うちは総研大には現時点では参加していないので、そのための一種の代わりのというか代償的な形として、東京外国語大学との連携大学院をやっています。それからそれ以前、独法の時代から一橋大学ともやってるわけです。一橋のほうはそれ以前からでしたけども、東京外大とのものは今の体制になってから始めたものなわけです。それでクロスアポイントメント制を利用してやってるんですけども、何でこんな話持ち出したかという、たまたまそれに関係してる人間がみんないるんです。

木部：みんないるんですか。

前川：3年前に始まって、最初の2年間は木部さんと小木曽さんが行っていて、去年からは朝日さんと私が行っているという形です。私、以前からあれについてちょっと疑問に思ってることがあって、もちろん外大での、われわれがやってきた授業は恐らく外大の学生の役には立っていると信じたいわけですけども、本来逆じゃないかという気もするんです。つまり共同利用研におけるクロスアポイントメント制度の利用というのは、例えば高エネ研とかで見ると逆なんですよ。大学の先生がクロアポで来るんです。そしてその研究制度を利用して、ばっと1年間来る人もいるし、1カ月だけ来る人もいるんですけども、そういう制度なんです。うちは逆やってるんです。

何でこんな話を持ち出したかという、先ほどのふたつの共同利用共同研究の後のほう、大学の人とのという関係のあり方な

んですけども、何かどうもそこにも同じ問題が潜んでるような気がして、つまり国語研の先生がお金持ってて、皆さん参加してくださいって言うてるけども、ほんとにそれがうまくいってるかです。うまくいってるかと聞かれたら、みんなうまくいってる言うかもしれないけども、本当にうまくいってるかどうかは、やっぱり一度考えてみるべき問題だと思うんです。よりよい形にもっていけないか、大学との関係において。



前川喜久雄氏

そういう観点に絞って、最後に今後どうしたいかということを一言ずつ伺いたいんですけどよろしいですか。今の問題設定は通じましたか。大学、ふたつ目の共同研究、大学との関係、それで私がクロアポの例を出したのは、国語研がやりたいことがあって、それにいろいろ協力していただいているという形もあるけど、本来もっと大学のほうでやりたい人がここに来て研究に参加するような、そういう、より底辺からという用語弊があるけども、大学の先生たちからの

盛り上がりみたいなものをわれわれが受け皿となって受けるみたいな、そういうのが恐らく望まれてる形だと思うんです。少なくとも他の領域ではそういう形でクロアポなんかを利用してと思います。そういう問題点から、皆さんの今持ってるプロジェクトなんかで、今問題があるならこういう問題があるという指摘でもいいし、それから今後こういうことでやればより盛り上がりが出てくるだろうというようなご意見でもいいんですけども。急に振って考えをまとめるのが大変かもしれませんから、どちらからというより手を挙げて1人ずつ発言していただければと思うんですけど、どうですか。

朝日：うまく言えないんですけど、僕、1年目が今終わって2年目に今日から入るんですが、昨年外大に1年行かせてもらって、外大の先生からは外大の先生が足りない部分の領域を国語研の人に来てもらって授業してもらおうと。それが外大の院生たちの関心に合えばいいですけど、合わないとな人が来ない、来れば来るというのが現実的な問題として、そんなことを何か思ったりするし、いっばうで授業をしに来た後は、具体的な交流は講演会をするぐらいで、こちらから仕掛けてかないとないような感じかなと思ったんですが。ただ他方で、依頼された連続講演が、迫田先生も一度外大でされたと思うんですが、あのイベントのときに、向こうの早津委員長と話をしたときに出たのが、向こうの先生たちと何か一緒に研究を、プロジェクトをやりたいという、そのために何か体制を作って提案をするような形ができたということは話題にはなるんですが、具体的にその先に何を求めるかが全然なくて、要は国語研ユニットとの関わりがある人たちだから、そういうのであって、他のその他多数の教員がどこまで現実的に思ってるかが分からない。声を掛ければ言

うでしょうけど、ただ彼ら、彼女たちが何を考えていて、どういう領域のどういうテーマが必要だと思ってるかということ、もう少し国語研から行ってる立場としては聞く意味があるかなと思ったりもするので、昼食会という名のもとに、何度か会合を持って話はするようにしてきたんですが。なかなかその後の何か出てきましたというときに、どういう手順で何をするかも分からない状態はこの1年ありました。

ただせっかくこのタイミングなので、どういつもりで、あと1年外大の先生方とお付き合いするのかということは考えたいなどは個人的には思ってます。ただまとまってないので、すいません。

前川：先ほどの話の振りがあまりよくなかったかもしれないけども、例えば現在の第3期中期計画の4年目に入るわけです。ということはもう次をまた考えなきゃいけないんで、ここ3人（前川、木部、迫田）はもう関係ないんだけど、残り3人の人は第4期につながるわけで、次を考えなきゃいけない。今、小木曽さんを中心に次期の将来計画の委員会も動いてるんだけど、それとは別にやっぱりひとりひとりとして考える。そのときに大学の先生方、今外大の例が挙がってたけど、それ以外も含めてどういう関係性をそこでつくっていくのがいいのかというようなことだね。そういう点から何か発見していただければと思うけどね。

朝日：考えてます。

パルテシ：大学の教育に国語研が貢献するという趣旨で、恐らくクロスアポイントみたいなものが、政府が制度としてつくって、今はやらざるを得ないというような状況だと。

前川：そうじゃない。

木部：クロアポだけじゃなくて、大学共同利用機関は大学の教育の支えをしなさいという事を言われています。

前川：クロアポは必ずしも共同利用研が大学に協力するための制度じゃないから、逆であっても全然構わない。

パルテシ：日本国内を含め、海外の大学でも、日本語学を専門と学科では教員の数少なく、ある分野の専門しかいないということがよくあります。言語学会がこの問題に気付いて、二十数年前に夏期講座みたいなものをスタートして、関西、関東でやっています。そこでいろんな分野の入門者から上級者レベルの講義を提供しています。これはアメリカのサマースクールをまねているような感じですけども。

今は海外を含め、日本語の研究者がだんだん減っているというような状況です。この状況を打開するために国語研ができることは国内外からいろいろな分野の専門家を集めてネットで日本語学の講義を提供することです。そしてそれを自由に利用できるようにすれば、世界中の大学や個人の学習者にとってメリットが大きいと思います。一昨年にインド政府の放送大学の依頼に基づいて、30 コマ分の講義を収録し、ウェブ上で公開しました。これに似たようなものを第4期に行いたいと思います。大学の講義のように1つの空間と時間に限られていると、その、恩恵を受ける人は限られてしまうけれども、時間と空間の縛りをなくせば、多くの人がその恩恵を受けることができるのではないかと考えています。

前川：現在の第3期に始まるときに、私、それを提案したんだけど却下されちゃった。

パルデシ：だからそこはもうちょっと議論を……何とおっしゃいました。

前川：却下されちゃったでしょ。私は非常に残念で。

迫田：既にそういう提案を前川先生のほうからなされたんですか、何年か前に。

木部：4年ぐらい前に。

前川：ぜひやってください。

迫田：なぜ、却下されたんですか。

前川：知らない。

木部：あまり具体的なイメージがわかなかった。

前川：教科書を作るって話になっちゃったんだよね。

木部：そう。

前川：当時の機構の理事さんの意向で、具体的な教科書を作るということになって、その方向で話が動いちゃったから。

迫田：前川先生やプラシャント先生がおっしゃるのは、ここにある人材で、例えば講義を作る、つまり、MOOC（大規模公開オンライン講義）のような感じですよ。

木部：慶應大学だとか早稲田大学でやりますよね。

前川：いろんなところが発信してるよね、今ね。

パルテシ：だから今われわれが何をすべきかということ、例えば、日本語学概論のような講義と100コマ？ぐらいを展開したとします。その中からある大学ではコマを選んで、試験を行う、単位を与えることもできます。

木部：放送大学が、その目的のためにあるんじゃないですか。

パルデシ：私は日本語の講義に英語の字幕をつけてやろうと思っています。ウェブ発信ですので、海外でも利用できる。撮影などについて放送大学と協力してやりたいです。

前川：そういう形でのウェブでの講義の発信というのは、僕は必須だと思うんで、ぜひやっていただきたい。

パルデシ：時空間を超えてすべての大学に、質のよいコンテンツを提供することができればスタンダーダイゼーションにもつながると思います。

前川：今の話は日本語学の教育というほうの話だったんだけど、同時にそういうものは研究のほうでもできるはずですよ。研究のほうでいかに大学と共同的な関係を、

どうですか。

小木曾：さっきの話に、前川さんがおっしゃったように、地球研なんかはそうだと思うけど、大学の教員が来て勉強していく場なんですよね。研究して最新の研究成果を持って帰るような場だと思うんです。そういうのがないのは確かにどうかなというのがあるんですよね。いま共同研究発表会などで発表してもらったとき、当然それぞれ立派な大学の先生ですから、自主性に任せることになるわけじゃないですか。そうするとともに個人研究でやってますし、また自分の研究手法を確立して今まで研究を積み上げてきたから今がある方たちばかりなので、新しい研究手法だとか、あるいは共同で何かやるということがなかなかできにくいことはあるんですよね。

前川：ある程度年齢の上の人？

小木曾：そうですね。すごく若い人を連れてきたら、また話は違うとは思いますがね。これはちょっともったいなくて、本当はそういう場であれば、新しい方法を学んだりそれで研究したり、一緒に共同研究をやったり、そういうことをする場にしたいんだけど、なかなかそれがうまく展開できていないというのが実感としてあります。それを打開するのにどうしたらいいか、なかなか難しくて。その先生方に時間があれば研究所に来てもらってということができると思うんですが、なかなかそれも今の状況では難しそうなので。もっと学生がたくさんいるような偉い先生方に来てもらって柔軟なことをやってもらえる、そういう環境ができると、本当の共同研究ということができていくのかなと。

前川：ふたつ目のことね。

小木曾：ふたつ目のほうですね。

木部：今、人文・社会系の評価をどうするかということが問題になってるんですけども、評価は置いといて、大学の人文・社会系と共

同利用機関、国語研だけじゃなくて、歴博とか民博とかも含めて、そういうところが協定を結んで、教員のやりとりを行う、そういう組織作りをしてもいいかなと思うんです。大学の先生も、今、ほんとうに大変なんです。過重労働でね。どこかで改善しなきゃいけないので、それも併せて、どこかが音頭を取って、人文系の大学と人間文化研究機構が話し合って、お互いに人事交流をするようなシステム。人事交流というと何か文科省的になっちゃうので、もうちょっといい名前で、お互いに研究のやりとりをしたいですね。教員のサバティカルのようなものも含めて。

前川：クロアボはまさに使えるんじゃないんですか。

木部：クロアボも含めてね。何かそういう検討会を作ったらいいのかもしれないと思いました。

前川：ここのうちの話だけじゃなくて、機構レベルとか、もっと上のレベルで。

朝日：この間終わったんですが、機構間連携の事業で、よその学という予備的研究があったんですけど、結局あのユニットは極地研さんがリードを取ったんですが、実際は地球研のスタッフが取りまとめをしたんですけども、結局最後に出てきたのは地球研のローカルプロジェクトとして、地球研のインキュベーションスタディから始まる、地球研独法の手順に従った研究のエントリーをするということで、話としてまとまったんです。そのときに誰がリーダーをやるのかということと、それが機構内の人間であれば、機構内でクロスアポイントメントのルールを作って、例えば国語研の誰かが地球研のプロジェクトを6年間やるのに出て行って、6年フルリサーチをして帰ってくるというようなことをやってみるといふ発想は実際に話題になっています。

木部：やっぱり持ってますよね。

朝日：持ってます。特に地球研はクロスアポイントメントを取ってるんですから、そういう意味では、結局国語研も取ってるかというのが、そういう意味では、そういう利便性というのか、システムをうまくこちらにも採用するというのがあるのかなとは。

木部：最初誰が言い出すか、どこが音頭を取るかという話だけど、実は以前、学部長をしていたときに、人文系 17 大学学部長会議というのがあって、昭和 24 年に新制大学として発足した大学がメンバーなんですけど、その学部長さんたちと、17 大学同士で教員の交換を、例えば半年間ずつ教員を交換するというようなことをやってみませんかと話したことがあるんです。実現はしませんでしたけども。当時はそういう制度がなかったの。だからそういうことがあったらいいと思うんです。

前川：問題がここまで来ると、結局人文社会科学における研究というものの性質、いまだに非常にやっぱり個人的なものが多いですよ。だから共同研究の論文に対する、一種の偏見もあると僕は思うんだけどね。偏見あるいは誤解もあって、共著論文だと業績評価で点が下がるみたいなそういうことを言うことがありますよね。非常に下世話な問題ですけども、しかしそこにわれわれの認識が反映されているわけです、広い意味でもね。そういった問題がここで出てきたのは、僕はよかったと思うんだけども。ぜひ今後そういった問題から目をそらさずに、解決するような方向に向けて、すぐ解決するわけではないんだけど、少しずつ努力、日本全体が努力すべきだし、その中でも、わけでも共同利用研であるんだから、国語研は当然何かの役割を果たさなきゃいけない。特に言語の領域においてはわれわれしかないんだから、一種の義務として、ミッションというより義務として、そういったものをこの研究所が果たしていくのが重要な

というような気がしました。へたなまとめですけど、こんな感じでよろしいですか。

パルデシ：最後にもう 1 つだけ、研究所が大きな問題抱えてるなというのは、10 年間見て思ったんですけども、サバティカル制度がないんですね、研究所には。内部にいる人間は、常に何か最新の知識を持っているという錯覚を起こしている。世界の最新の研究を学ぶ機会がない。次から次へとプロジェクトを遂行しなければならず、それに追われて、新しい知識や技術を身に着ける余裕がない。これに対して、大学ではサバティカル制度があり、外部でいろいろ学び、充電することができます。それがないと、多分持続可能な研究所にはならないというふうに思っています。私はここに来て 10 年、何も充電してないので、もうそろそろバッテリーが切れそうです。

前川：サバティカル的な制度は重要でしょうね。

パルデシ：そうでないと、新しいものを吸収することは、チャンスはありません。

前川：完璧にないわけじゃなくて、何かありますよね、准教授あたりを対象にした。

木部：機構の海外派遣プログラム。

朝日：専任は多分准教授は誰も行けない制度ではありますね。

前川：だから運用の問題だよ。

木部：確かにこの 10 年間、特にプロジェクトのリーダーは忙しかったですね。常にリーダーとしてプロジェクトを運営しなきゃいけなかったの。それをチェンジするシステムですね。6 年間リーダーをやったら次はちょっとお休みとかね、そういう制度を作ったほうがいいかもしれないですね。

パルデシ：それがなくて……。

前川：だけど、ただそれをやるためには、実はテーマが多すぎて交代できない。その意味で、もうちょっと絞り込みとかが実現するためには必要なのかもしれないね。

パルデシ:あるいは、これは将来計画委員会で議論すべきテーマで、リーダーと副リーダーを立てて、プロジェクトを推進するというのも考える必要があるかと思うんですけど。つまり 6 年間一人のリーダー人がずっと出っぱなしというのも……。

木部:10 年間リーダーしっぱなしでしたよね。

パルデシ:出っぱなしで、土曜日も日曜日も休みも何もないような状況ですから、それが大きな問題。

前川:この話はちょっと将来計画委員会のほうでやってもらうとして、他に何かご意見ありましたら。

迫田:国語研の働き方改革の話になってきていますが、日本語教師の働き方と国語研の社会貢献について考えたことなんです。

さきほど、国語研は 1970 年代から 2000 年過ぎまで、日本語教育夏期研修を行っていて、多くの日本語教師を育ててきたという話をしましたが、これは社会貢献だと思います。国内の先生も海外の先生もさまざまなプレッシャーを受けながら、雑多な仕事を任せられ、学生指導と業績向上を目指して働き、疲弊しながら教師を続けています。そのような教師への再教育の機会が求められていると思います。また、日本語教育の関係者には、大学教員のみならず、日本語学校の教員も多く、彼らが研究業績を増やし、キャリアアップする上で、かつてのような教育研修の場を提供することも重要ではないかと思うのです。そういった意味で、さきほど話しましたが、研究と教育をつなぐのは国語研であり、日本語教育研修などを通して、それを示すのは大きな社会貢献として重要なのではないかと思います。

前川:分かりました。他はいかがですか。最後にこれだけはというのは。よろしいですか。

木部:実は人間文化研究機構を含めて、大学

共同利用機関が今後、どういう組織になるかがまだ分からない。しばらくはこのままいくんじゃないかという話もありますが、それは分かりません。でも、そんなことに振り回されないで、国語研は国語研としてやるべきことをやっていれば、つぶれることはないという信念を持つことだと思います。

迫田:さきほど、世界発信という言葉が出ましたが、これからの教育を考える上で、大学は IT (information technology) を使った研究が求められると思います。そのためにも、国語研の財産を残しておくことの必要性を感じます。ある学会では、レジェンドと呼ばれるようなかつて活躍された先達の講演やセミナーの録音テープが保存されていました。同様に、国語研でもさまざまな形で国語研の財産を後世に残しておくことは、使命であるとも思います。多くの若い世代の方々に、見たり、聞いたりしてもらいたいし、それと同時に、それを伝えるプログラムができるといいなと思っています。

前川:迫田さんと木部さんからだいぶん……。

迫田:すみません、熱い想いが先行してしまっています。

前川:遺言めいた、次の世代への希望が出てきましたので、締めくくりにいいかと思うんですけど。私も消えていく側に入りますんで、最後に私からも一言。

いろんな意見が出てきたわけですが、まだしばらくはこの研究所も恐らく社会的にいろいろな使命を果たしていきなさいと思います。ただ、やっぱり私も短い期間ですけども、大学で教えてたこともあり、その後、東工大と一橋と外大と 3 つの大学で、客員教授みたいな形で一応 20 年近くやってきてます。そういう観点から見ると先ほどの迫田さんの話にもありましたけども、やっぱり大学に比べて、すごく恵ま

れてるんですよね、国語研てのは。ほとんど努力しないで予算が結構な金額が取れる、これはもうやっぱり夢のような話ですよね。それからふたつの共同研究のひとつ目のほうで言うと、ある程度努力すれば、普通大学ではあり得ないような研究体制を取ることができる。それから先ほど迫田さんの話だったかな、いろいろな領域の言語学の方のいろんな領域の人間が隣にいて、努力すれば、その人からいくらでも話を聞くことが

できる。その意味では、やっぱり普通の大学では考えられないような恵まれた環境だと思います。恵まれた環境にいる者は、やはりそれに対する義務を果たす必要があって、それをぜひ活用できるような方向に向かっていていただきたいなという、今後向かっていけばいいんじゃないかなという気はします。そういうことを私からの遺言として申し上げておきたいと思います。

資

料

沿革

1. 設立の経緯

(1) 設立の展望

国語国字の改善を図るために、専門の研究機関が必要であるということは、明治以来の先覚者によって唱えられたことである。戦後、我が国が新しい国家として再生しようとするに当たって、国民生活の能率の向上と文化の進展には、まず国語国字の合理化が基礎的な要件であり、そのためには、国語に関する科学的、総合的な研究を行う有力な機関を設置すべきであるという要望が特に強くなった。

国語審議会は、昭和 22 年 9 月 21 日の総会において、文部大臣に対して、国語国字問題の基本的解決を図るために大規模な基礎的調査機関を設けることを建議した。また、昭和 22 年 8 月、安藤正次氏（「国民の国語運動連盟」世話人）ほか 5 氏によって「国語国字問題の研究機関設置に関する請願」が衆参両院に提出され、第 1 回国会のそれぞれの本会議において議決採択された。

(2) 創設委員会の設置

文部省は、かねてから国立の国語研究機関創設の議を練り、準備を整えていたのであるが、各方面の要望にこたえ昭和 23 年度に設立することを計画し、また、昭和 23 年 4 月 2 日の閣議において、前記請願の趣旨にそってその実現に極力努めるということが決定されると、直ちに国立国語研究所創設委員会を設け、民主的な討議に基づいてこの研究機関の基本的事項を定めることとした。創設委員会は、安藤正次、時枝誠記、柳田国男等 18 氏を委員として昭和 23 年 8 月、国立国語研究所の性格及び国立国語研究所設置法案を審議し、文部大臣に意見を提出した。

(3) 設置法の制定

国立国語研究所設置法案は、創設委員会の審議を経たものを原案として関係方面との折衝の末、昭和 23 年 11 月 13 日に閣議決定を経て国会に提出された。この法案は、両院の審議を経て、同年 11 月 21 日可決成立した。

法案提出の際の文部大臣下条康磨氏の提案理由説明は次のとおりである。

国立国語研究所設置法案提案理由

わが国における国語国字の現状を顧みますときに、国語国字の改良の問題は教育上のみならず、国民生活全般の向上に、きわめて大きな影響を与えるものでありまして、その解決は、祖国再建の基本的条件であると申しても過言ではありません。

しかしながら、その根本的な解決をはかるためには、国語および国民の言語生活の全般にわたり、科学的総合的な調査研究を行う大規模な研究機関を設けることが、絶対に必要なのであります。

言い換えますならば、国語国字のような国家国民に最も関係の深い重大な問題に対する根本的な解決策をうち立てますためには、このような研究機関によって作成される科学的

な調査研究の成果に基づかなければならないと存じます。

国家的な国語研究機関の設置は、実に、明治以来先覚者によって提唱されてきた懸案であります。また、終戦後においては、第1回国会において、衆議院および参議院が、国語研究機関の設置に関する請願を採択し、議決されましたのはじめ、国語審議会からの建議ならびに米国教育使節団の勧告等、その設置については、各方面から一段と強く要望されるに至りました。

政府におきましても、その設置について久しい間種々研究を重ねてきたのでありますが、実現を見ることなくして今日に至ったのであります。しかるに、このたび、国会におきまして請願が採択され、世論の支持のもとに、急速にその準備が進められることになりました。

さて、この法案を立案するに当りましては、その基本的な事項につきましては、国立国語研究所創設委員会を設けて学界その他関係各界の権威者の意見を十分とり入れるようにいたしました。

次に、この法案の骨子について申し述べます。

第一に、国立国語研究所は、国語および国民の言語生活について、科学的な調査研究を行う機関であり、その調査研究に当っては科学的方法により、研究所が自主的に行うよう定めてあります。

第二に、この研究所の事業は、国民の言語生活全般については広範な調査研究を行い、国語政策の立案、国民の言語生活向上のための基礎資料を提供することといたしてあります。

第三には、この研究所の運営については、評議員会を設けて、その研究が教育界、学界その他社会各方面から孤立することを防ぐとともに、研究所の健全にして民主的な運営をはかるようにいたします。

この研究所が設置され、調査研究が進められてまいりますならば、わが国文化の進展に資するところは、はなはだ大きいと存じます。(以下略)

このようにして、国立国語研究所設置法は、昭和23年12月20日、昭和23年法律第254号として公布施行され、ここに国立国語研究所は正式に設置された。同日、文部次官井出成三氏が所長事務取扱となり、昭和24年1月31日、西尾実氏が所長に就任した。また、同年2月4日創設委員であった安藤正次氏ほか16氏が評議員に委嘱された。

2. 設置法の廃止と組織令の制定

総理府の附属機関として設置された臨時行政調査会（会長 土光敏夫、施行昭和56年3月16日）は、昭和58年3月14日、最終答申を中曽根首相に提出し、これを受けた政府は同年5月24日、新行政改革大綱「臨時行政調査会の最終答申後における行政改革の具体化方策について」を閣議決定した。

この新行政改革大綱に基づく機構の整理、再編、合理化の一環をなすものとして、国立国語研究所設置法（昭和23年法律第254号）は、国家行政組織法の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整理等に関する法律（昭和58年法律第78号）第60条の規定により廃止され、国立国語研究所は、新たに、文部省組織令（昭和59年政令第227号）第108条（文化庁の施設等機関）に定める研究所として昭和59年7月1日に発足し、研究所の事業組織、

運営その他研究所に関し必要な事項は、国立国語研究所組織令（昭和 59 年政令第 283 号）で定められた。

3. 独立行政法人への移行，大学共同利用機関への移管

中央省庁等改革の推進に関する方針（平成 11 年 4 月 27 日中央省庁等改革推進本部決定）により，独立行政法人に移行した。

平成 19 年 12 月 24 日，独立行政法人整理合理化計画により，国立国語研究所が大学共同利用機関に移管されることが閣議決定した。これを受けて平成 20 年 7 月 7 日，科学技術・学術審議会学術分科会から「国語に関する学術研究の推進について（報告）」が出され，その中で人間文化研究機構に設置されることが適当と結論付けられた。平成 21 年 3 月 31 日，「独立行政法人にかかる改革を推進するための文部科学省関係法律の整備等に関する法律」（平成 21 年法律第 18 号）が成立した。

4. 年表

昭和 23 年 12 月 20 日	国立国語研究所設置法公布施行。（昭和 23 年法律第 254 号）研究所庁舎として宗教法人明治神宮所有の聖徳記念絵画館の一部を借用。 文部次官井手成三所長事務取扱に就任。 総務課及び 2 研究部によって発足。
昭和 24 年 1 月 31 日	西尾実初代所長就任。
昭和 24 年 12 月 20 日	総務課から庶務部となる。
昭和 29 年 10 月 1 日	千代田区神田一ツ橋 1 丁目 1 番地の一橋大学所有の建物を借用し，移転。
昭和 30 年 10 月 1 日	組織規程改正。3 研究部となる。
昭和 33 年 4 月 1 日	組織規程改正。4 研究部となる。
昭和 35 年 1 月 22 日	西尾実所長退任。岩淵悦太郎二代所長就任。
昭和 37 年 4 月 1 日	現在の北区西が丘 3 丁目 9 番地 14 号（旧北区稲付西山町）に移転。
昭和 40 年 3 月 19 日	旧図書館竣工。
昭和 41 年 1 月 10 日	（旧）電子計算機室竣工。
昭和 42 年 2 月 6 日	敷地等大蔵省から所管換え。
昭和 43 年 6 月 15 日	文化庁設置とともに，文部省から移管され，文化庁附属機関となる。
昭和 49 年 3 月 22 日	研究棟竣工。
昭和 49 年 4 月 11 日	組織規程全部改正。庶務部，5 研究部及び日本語教育部となる。
昭和 51 年 1 月 16 日	岩淵悦太郎所長退任。林 大三代所長就任。
昭和 51 年 9 月 30 日	管理部門及び日本語教育センター庁舎竣工。
昭和 51 年 10 月 1 日	組織規程一部改正。日本語教育部を日本語教育センターに改める。
昭和 52 年 4 月 18 日	組織規程一部改正。日本語教育センターに第二研究室新設（10 月 1 日）。 及び日本語教育教材開発室設置（振替）。
昭和 54 年 3 月 14 日	皇太子殿下御視察。
昭和 54 年 10 月 1 日	組織規程一部改正。日本語教育センターに第三研究室新設。

昭和55年10月1日	組織規程一部改正。日本語教育センターに第四研究室新設。
昭和56年4月1日	組織規程一部改正。日本語教育センターに日本語教育指導普及部設置（振替）。
昭和57年4月1日	林 大所長退任。野元菊雄四代所長就任。
昭和58年12月2日	国家行政組織法の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整理等に関する法律（昭和58年法律第78号）により国立国語研究所設置法は廃止されることになった。
昭和59年7月1日	文部省組織令の全部改正（昭和59年政令第227号）。 国立国語研究所組織令施行（昭和59年政令第228号）。
昭和63年10月1日	組織規程一部改正。国語辞典編集室新設。
平成元年4月1日	組織規程一部改正。情報資料研究部の設置（振替）及び2研究部の室の改編。
平成2年3月31日	野元菊雄所長退任。
平成2年4月1日	水谷 修五代所長就任。
平成10年3月31日	水谷 修所長退任。
平成10年4月1日	甲斐睦朗六代所長就任。
平成11年12月22日	独立行政法人国立国語研究所法公布（平成11年法律第171号）
平成13年4月1日	独立行政法人国立国語研究所発足。管理部及び3研究部門（研究開発部門・日本語教育部門・情報資料部門）
平成13年10月1日	政策研究大学院大学、国際交流基金日本語国際センターとの連携による大学院教育開始。
平成17年3月31日	甲斐睦朗六代所長退任。
平成17年2月1日	立川市に移転。
平成17年4月1日	一橋大学との連携による大学院教育開始。
平成17年4月1日	杉戸清樹七代所長就任。
平成18年4月1日	日本語教育部門を日本語教育基盤情報センターに改編。
平成21年3月31日	独立行政法人に係る改革を推進するための文部科学省関係法律の整備等に関する法律成立。
平成21年9月30日	杉戸清樹七代所長退任。
平成21年10月1日	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所発足。 管理部及び4研究系・3センター（理論・構造研究系、時空間変異研究系、言語資源研究系、言語対照研究系、研究情報資料センター、コーパス開発センター、日本語教育研究・情報センター）
平成21年10月1日	影山太郎八代所長就任。
平成28年4月1日	第3期中期目標・中期計画期間の開始に伴う体制整備。管理部及び研究系（5研究領域）・2センター。
平成29年9月30日	影山太郎八代所長退任。
平成29年10月1日	田窪行則九代所長就任。

組織の変遷

1948	1949	1950. 9
総務課	庶務部	庶務部
庶務掛	庶務課	〃
会計掛	会計課	〃
研究第 1 部	研究第 1 部	研究第 1 部
第 1 研究室	第 1 研究室	〃
	(東京方言各地方言)	(話しことば)
第 2 研究室	第 2 研究室	〃
	(共通語)	(書きことば)
	資料室	
研究第 2 部	研究第 2 部	研究第 2 部
第 3 研究室	第 3 研究室	〃
	(学力標準の設定ほか)	(学習指導法ほか)
第 4 研究室	第 4 研究室	〃
	(学習指導法ほか)	(学力標準の設定, 言語効果ほか)
第 5 研究室	第 5 研究室	資料室
	(言語効果)	
第 6 研究室	第 6 研究室	
	(マス・コミュニケーションほか)	

1951	1952-53	1954
庶務部	庶務部	庶務部
庶務課	〃	〃
会計課	〃	〃
研究第 1 部	研究第 1 部	第一研究部
	〃	話しことば研究室
第 1 研究室		(旧第 1 研究室)
第 2 研究室	〃	書きことば研究室
		(旧第 2 研究室)
	第 6 研究室	地方言語研究室
	(地域社会の言語)	(旧第 6 研究室)
研究第 2 部	研究第 2 部	第二研究部
第 3 研究室	〃	国語教育研究室
(学習指導法ほか)		(旧第 4 研究室)
第 4 研究室	〃	言語効果研究室
(学力標準の設定ほか)		(旧第 5 研究室)
第 5 研究室	〃	
(言語効果)		
資料室	資料室	資料室

1955	1956-57	1958-60
庶務部	庶務部	庶務部
〃	〃	〃
〃	〃	〃
		図書室 (58.4.1)
第一研究部	第一研究部	第一研究部
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃
第二研究部	第二研究部	第二研究部
〃	〃	〃
〃	〃	〃
第三研究部	第三研究部	第三研究部
近代語研究室	〃	〃
資料調査室	資料調査室	第四研究部
調査室	〃	第一資料研究室
編集室	〃	第二資料研究室
文献室	〃	第三資料研究室

1961-64	1965	1966-70
庶務部	庶務部	庶務部
庶務課	〃	〃
会計課	〃	〃
図書室	図書館（40.10.1）	〃
第一研究部	第一研究部	第一研究部
話しことば研究室	〃	〃
書きことば研究室	〃	〃
地方言語研究室	〃	〃
第二研究部	第二研究部	第二研究部
国語教育研究室	〃	〃
言語効果研究室	〃	〃
第三研究部	第三研究部	第三研究部
近代語研究室	〃	〃
（古代語研究室開設準備室）	〃	
第四研究部	第四研究部	第四研究部
第一資料研究室	〃	〃
第二資料研究室	〃	〃
第三資料研究室	〃	〃
	言語計量調査室	〃

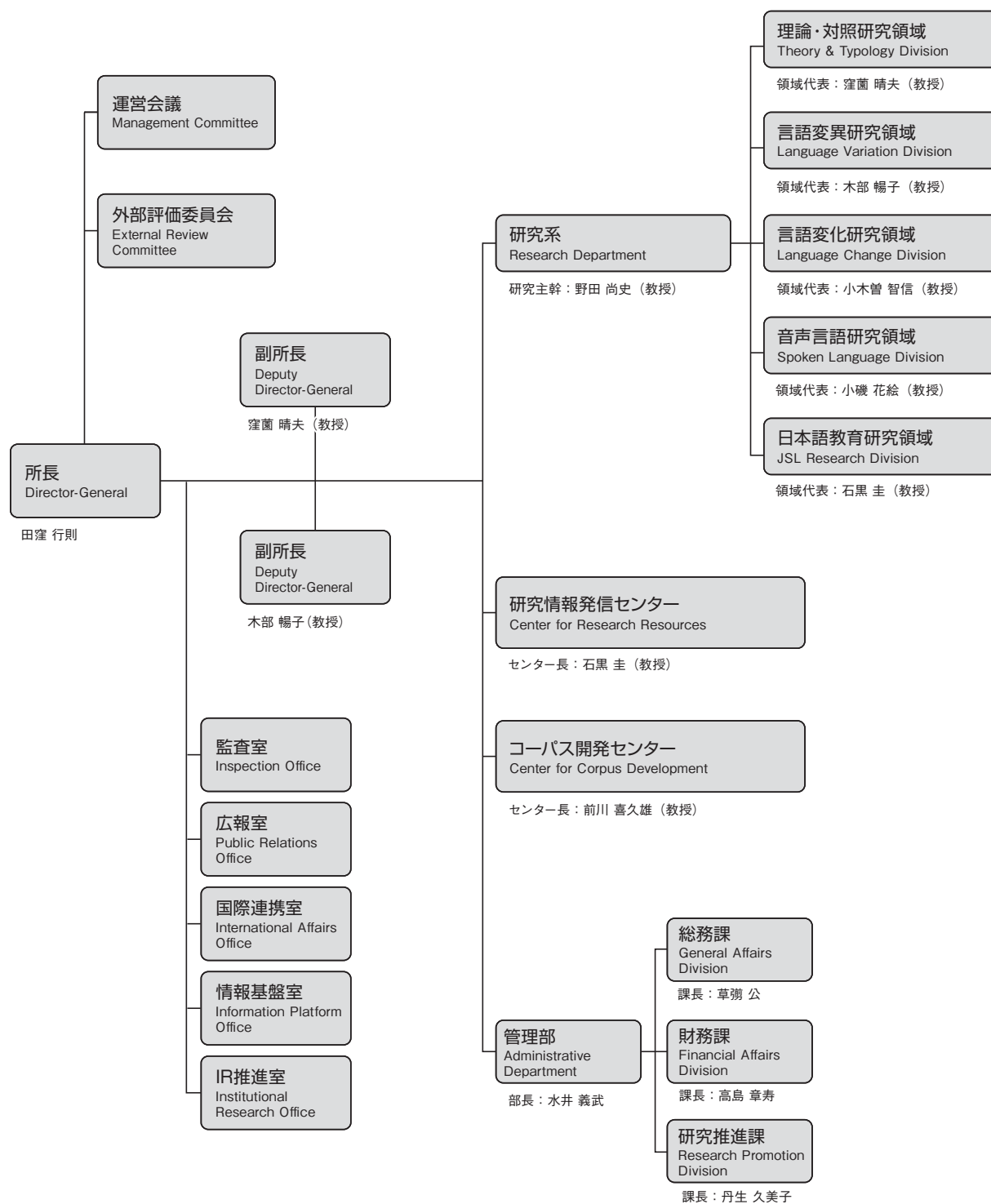
1971-73	1974~1975	1976
庶務部	庶務部	庶務部
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃
第一研究部	言語体系研究部	言語体系研究部
〃	第一研究室	〃
	(旧話しことば研究室)	
〃	第二研究室	〃
	(旧書きことば研究室)	
〃	言語行動研究部	言語行動研究部
	第一研究室	〃
第二研究部	(旧言語効果研究室)	
〃	第二研究室	〃
〃	(旧第二資料研究室)	
第三研究部	第三研究室	〃
〃	言語変化研究部	言語変化研究部
文献調査室	第一研究室	〃
第四研究部	(旧地方言語研究室)	
〃	第二研究室	〃
〃	(旧近代語研究室)	
〃	文献調査室	〃
〃	言語教育研究部	言語教育研究部
	第一研究室	〃
	(旧国語教育研究室)	
	言語計量研究部	言語計量研究部
	第一研究室	〃
	(旧第一資料研究室)	
	第二研究室	〃
	(旧第三資料研究室)	
	第三研究室	〃
	(旧言語計量調査室)	
	日本語教育部	日本語教育センター
		(51.10.1 名称変更)
	日本語教育研究室	日本語教育研究室
	日本語教育研修室	日本語教育研修室

1977-78	1979	1980
庶務部	庶務部	庶務部
庶務課	〃	〃
会計課	〃	〃
図書館	〃	〃
言語体系研究部	言語体系研究部	言語体系研究部
第一研究室	〃	〃
第二研究室	〃	〃
言語行動研究部	言語行動研究部	言語行動研究部
第一研究室	〃	〃
第二研究室	〃	〃
第三研究室	〃	〃
言語変化研究部	言語変化研究部	言語変化研究部
第一研究室	〃	〃
第二研究室	〃	〃
文献調査室	〃	〃
言語教育研究部	言語教育研究部	言語教育研究部
第一研究室	〃	〃
言語計量研究部	言語計量研究部	言語計量研究部
第一研究室	〃	〃
第二研究室	〃	〃
第三研究室	〃	〃
	国語辞典編集準備室	〃
日本語教育センター	日本語教育センター	日本語教育センター
第一研究室（77.10.1） （旧日本語教育研究室）	〃	〃
第二研究室（77.10.1）	〃	〃
	第三研究室（79.10.1）	〃
		第四研究室（80.10.1）
日本語教育研修室	〃	〃
日本語教育教材開発室	〃	〃

1981-87	1998	1989-2000
庶務部	庶務部	庶務部
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃
言語体系研究部	言語体系研究部	言語体系研究部
〃	〃	〃
〃	〃	〃
		第三研究室
言語行動研究部	言語行動研究部	言語行動研究部
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	
言語変化研究部	言語変化研究部	言語変化研究部
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	
言語教育研究部	言語教育研究部	言語教育研究部
〃	〃	〃
言語計量研究部	言語計量研究部	情報資料研究部
〃	〃	第一研究室
〃	〃	第二研究室
〃	〃	電子計算機システム開発研究室
〃	国語辞典編集室（88.10.1）	国語辞典編集室
日本語教育センター	日本語教育センター	日本語教育センター
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃
日本語教育指導普及部	日本語教育指導普及部	日本語教育指導普及部
〃	〃	〃
〃	〃	〃

2001-2005	2006-2009. 9	2009. 10-27
管理部	管理部	管理部
	総務課	総務課
	会計課	財務課
		研究推進課
図書館	図書館	
研究開発部門	研究開発部門	研究系
第一領域	言語資源グループ	理論・構造研究系
第二領域	言語生活グループ	時空間変異研究系
	言語問題グループ	言語資源研究系
情報資料部門	情報資料部門	言語対照研究系
第一領域	資料整備グループ	センター
第二領域	文献情報グループ	研究情報資料センター
	電話応対グループ	コーパス開発センター
	図書館担当グループ	日本語教育研究・情報センター
日本語教育部門	整備普及グループ	
第一領域	用例用法グループ	
第二領域	学習項目グループ	
	評価基準グループ	

組 織 (2019年4月1日現在)



創立以降の研究課題一覧

年度	題目
1949	マス・コミュニケーションの研究
1949	漢字・漢語に関する調査研究
1949	現代共通語の実態の調査研究
1949	国語教育に関する研究
1949	辞典編集方法の研究
1949	造語法の研究
1949	東京方言および各地方言の調査研究
1949	白河市および附近の農村における言語生活調査
1949-52	国語学力標準設定に関する調査研究
1949-53	文字配列の合理化に関する実験的研究
1950	パーソナリティの調査
1950	義務教育終了者に対する語彙調査の試み
1950	現代語の助詞・助動詞の調査研究
1950	山形県鶴岡市および附近の農村における言語生活調査
1950	新聞語彙の調査研究
1950	長野県飯田市および上久堅村における言語生活調査
1950	読紙作業の実験的研究
1950	福島県白河市および附近の農村における言語生活の実態調査の集計・分析
1950	放送言語理解尺度設定の基礎的研究
1950-51	マス・コミュニケーションに関する研究
1950-51	各地方言の調査
1950-51	個人差に応じた国語学習指導方法の研究
1950-51	全国方言語彙の調査
1950-52	国語関係文献の整理
1950-52	辞典の編集方法に関する調査研究
1950-52	婦人（生活）雑誌の語彙の調査研究
1950-53	現代書き言葉の調査研究
1950-64	国語の歴史的発達に関する調査研究
1951	スポット・アナウンスの理解度と効果に関する研究
1951	学校における共通語指導状態の調査
1951	鶴岡市および附近の農村における言語生活の実態調査の集計・分析
1951	国語の学習法に関する研究
1951	国語能力の発達段階に関する調査研究
1951	地域社会における言語調査

1951	白河におけるパーソナリティ調査と新聞調査
1951	飯田市および附近の農村における言語生活の実態調査
1951-52	「読みやすさ」の基礎的研究
1952	三重県上野市における敬語の調査
1952	新聞に対する態度・経験・能力の発達に関する調査
1952	地方言語の敬語に関する調査
1952-53	国語の学習と指導に関する研究
1952-53	ラジオ・ニュース文体の研究
1952-53	文字言語の学習負担についての研究
1952-60	言語能力の発達に関する調査研究
1952-64	言語の効果に関する調査研究
1952-64	話し言葉の調査研究
1953	愛知県岡崎市における敬語の調査
1953	語彙調査に生ずる狂いの種類・原因・対策
1953	三重県上野市における敬語調査の集計・分析
1953	総合雑誌語彙の準備調査
1953	地方言語の敬語に関する調査 1
1953	地方言語の敬語に関する調査 2
1953	当用漢字の実施によって生じた問題とその解決法の研究
1953	日常談話語の調査
1953-54	国語科学力水準調査
1953-66	国語関係文献の調査
1954	「放送が児童の言語に与える影響」の調査
1954	愛知県岡崎市における敬語調査の資料・分析
1954	全国方言の概観調査
1954	総合雑誌の語彙調査
1954-55	語形確定のための基礎調査
1954-55	青年の新聞への接近・理解とその影響
1954-63	地域社会の言語生活の調査
1954-64	国語教育に関する調査研究
1954-64	書き言葉の調査研究
1955	音声史資料の収集と整理
1955	選挙公報文章の調査
1955	方言地図作成のための準備研究
1955-57	総合雑誌の用語の調査
1955-57	琉球首里方言辞典の編修
1955-67	明治時代語の調査研究
1956	日本言語地図作成のための準備調査

1956	用言 30 語の用法
1956-57	新聞の文章の漢字使用に関する実験的研究
1956-57	特殊問題の調査研究
1956-60	雑誌一般の用語の概観調査
1956-62	話しことばの文型の調査研究
1957	語構成に関する分析
1957-64	日本言語地図作成のための調査
1958	外来語の分析
1958-59	新聞の文章のわかりやすさに関する調査研究
1958-59	中国の文字改革に関する調査
1958-60	同音語の調査
1958-60	北海道の言語についての調査
1959	漢字使用の実態
1959	国内の国語問題に関する情報の収集・整理
1960	国内における国語問題に関する情報の収集・整理
1960	新聞の文章に関する調査研究
1960	総合雑誌の用字調査
1961	古辞書の索引作成
1961-63	現代雑誌一般の用語・用字の概観調査
1961-63	国語文章の横組みのための印刷条件の研究
1961-63	類義語の調査研究
1961-64	中学校生徒の言語能力の発達に関する研究
1962	国民各層の言語生活の実態調査
1962	中国の言語・文字問題に関する調査
1962-63	『色葉字類抄』の用語索引作成
1963-64	国民各層の言語生活の実態調査（A）
1963-64	国民各層の言語生活の実態調査（B）
1963-64	大量語彙調査機械化のための準備的研究
1963-64	話しことばの文法の調査研究
1963-65	各地方言の共通語との対照的研究
1963-65	現代語における漢字ならびに用字法に関する調査研究
1963-66	言語表現における場面の効果の研究
1964	現代敬語の調査研究
1964	対人的言語行動の研究
1964	地方の言語に関する調査研究
1964-66	動詞・形容詞等の意味用法の記述的研究
1965	作文による中学生の漢字使用に関する実態調査
1965	電子計算機による大量語彙調査の準備的研究

1965-66	中学生の漢字習得に関する研究
1965-66	中学生の言語習得に関する研究
1965-66	日本言語地図の編集と刊行
1965-66	文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究
1965-66	幼児の言語発達に関する準備的研究
1965-67	現代語の文法の調査研究
1965-73	言語の表現機能と伝達効果の研究
1965-73	社会構造と言語の関係についての基礎的研究
1966	中学校の漢字学習指導の実態に関する調査
1966	新聞の語彙調査
1966	電子計算機による話しことば資料の分析・処理の研究
1966-67	現代語の表記法に関する調査研究
1966-73	全国方言文法の対比研究
1967	言語情報処理に関する基礎的研究
1967	現代語の音声の研究
1967	国語および国語問題に関する資料・情報の調査研究
1967	日本言語地図の作成のための研究
1967-68	中学生の言語習得に関する研究—漢字習得—
1967-71	語の意味・用法の記述的研究—動詞・形容詞等—
1967-73	就学前児童の言語能力に関する全国調査
1967-73	電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—
1968-69	現代語の表記法に関する研究—送りがな・漢字—
1968-72	X線像による調音運動の研究
1968-73	日本言語地図作成のための研究—作図ならびに検証調査—
1968-73	明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—
1968-87	電子計算機による言語処理に関する基礎的研究
1968-88	国語および国語問題に関する情報の収集・整理
1969	高校生の漢字力に関する研究
1969-73	現代語の文法の研究—文体と文法との関係—
1970	児童・生徒の漢字使用に関する研究
1970-72	漢字機能度の研究
1970-75	現代語の表記法に関する研究—新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究—
1971-74	現代児童・生徒の言語能力の動態調査
1972-73	図形および文字の知覚および認識機構の研究
1972-74	語彙論上の諸問題に関する調査・研究
1972-76	漱石・鷗外の用語の研究
1973-76	各地方言親族語彙の言語社会学的研究
1973-78	発音過程に関する研究

1973-88	所属集団の差異による言語行動の比較研究
1974	現代語の比喩表現の研究
1974	地域社会における言語使用の変遷と変容の研究
1974	日本語教育のための内容と方法に関する基礎的研究
1974-75	高校教科書の用語調査
1974-75	日本言語地図の検証調査
1974-76	「各地方言資料の収集および文字化」のための研究
1974-82	明治初期における漢語の研究
1974-83	現代語文法の記述的研究
1974-84	幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究
1974-86	図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究
1975	新聞語彙調査の短単位語処理
1975	日本語教育に関する既存の研究成果の調査研究
1975	日本語教育の現状(内容と方法)についての実態の調査
1975	日本語教育研修の調査および実施
1975-77	日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究
1975-80	敬語の社会的研究
1975-80	現代語の表現の文体論的研究
1975-87	日本語教育教材および教授資料の作成
1975-87	現代語彙の概観的調査
1976	各地方言文法調査の準備的研究
1976	現代語の表記についての調査研究
1976-79	高校教科書の用語用字調査
1976-93	日本語教育の内容と方法についての調査研究
1976-93	日本語教育研修の実施
1976-94	日本語の対照言語学的研究
1977	日本語教育のための研修に関する調査研究
1977-78	国語辞典編集準備委員会
1977-78	文字・表記の体系的記述のための基礎的研究
1977-78	方言における音韻・文法の諸特徴に関する全国的調査研究
1977-79	現代表記の多様性の実態と表記意識に関する調査研究
1977-80	日本人と外国人との言語行動様式の比較対照的研究
1977-87	言語行動様式の分析のための基礎的研究
1977-96	日本語教育教材開発のための調査研究
1978-80	現代人文関係用語の成立過程に関する研究
1978-81	日本語教育のための基本的な語彙に関する比較対照研究
1978-91	日本語教育に関する情報資料の収集・提供
1978-98	日本語教育研修の内容と方法についての調査研究

1979	国語辞典の編集準備
1979-81	方言における音韻・文法の諸特徴についての全国的調査研究
1979-87	現代の文字・表記に関する研究
1979-88	動的人工口蓋による発音過程に関する研究
1980-82	教科書用語および文章表現に関する調査研究
1980-82	大量用語用字調査のための表記テーブルの作成に関する研究
1980-87	国語辞典編集に関する準備調査
1981	方言調査法に関する基礎的研究
1981-84	日本語教育における基本文型に関する研究
1981-85	日英対照による日本語の発話行為の研究
1981-87	現代敬語行動の研究
1981-87	母語別日本語学習辞典の編集
1982	文法の諸特徴についての全国的調査研究—補充調査—
1982-85	日本語教育のための照応現象に関する比較・対照的研究
1982-86	現代語彙の源流に関する研究
1982-86	方言研究法に関する基礎的研究
1982-89	日本語とインドネシア語との対照言語学的研究
1982-93	日本語と中国語との対照言語学的研究
1983-87	言語計量調査—語彙調査自動化のための基礎的研究—
1983-87	文法的特徴の全国的地域差に関する研究
1983-87	明治時代における漢語の研究
1984-85	現代語文法の調査・研究
1985	国内の日本語教育機関におけるテストに関する基礎的調査
1985-87	児童・生徒の言語習得に関する調査研究
1985-87	日本語動詞の名詞句支配に関する文法的研究
1986-87	現代日本語文法の調査・研究
1986-88	各地方言親族語彙の言語社会学的研究
1986-89	談話の構造に関する対照言語学的研究
1986-91	日本語と英語との対照言語学的研究
1986-93	言語教育における能力の評価・測定に関する基礎的研究
1987-92	方言分布の歴史的解釈に関する研究
1987-93	漢字仮名まじり文の読みの過程に関する研究
1988	言語ロボット構築のための基礎的研究
1988	語彙調査の方法に関する基礎的研究
1988	児童・生徒の作文に関する調査研究
1988	新聞の語表記の分析
1988	地域社会における方言変化の動向に関する準備的研究
1988	文法的類義表現の研究

1988	翻訳文体の対照的研究—『花柳春話』の文体別用例対照表の作成—
1988	幼児・児童の書きことばの獲得に関する予備的調査研究
1988-89	英和辞書における訳語の研究
1988-89	簡約日本語の創成と教材作成に関する研究
1988-89	現代敬語行動の研究—言語行動の目的・機能および対人的な配慮を明示する言語表現についての研究—
1988-89	児童・生徒の漢字習得に関する調査研究
1988-90	現代敬語行動の研究—学校生活における敬語の研究—
1988-90	日本語教育のための述部からみた文構造の研究
1988-91	自然科学用語の語史研究
1988-92	言語計量調査—テレビ放送の用語調査—
1988-93	日本語学習辞典の編集—基本語用例データベースの作成—
1988-93	国語辞典編集のための用例採集
1988-93	日本語教育モデル教材の作成
1988-94	大量日本語データの蓄積と検索に関する基礎的研究
1988-94	方言文法地図作成のための研究
1988-98	日本語教育参考資料の作成
1989	雑誌 90 種資料における和語表記の調査
1989	談話中での音声特徴の変動についての準備的研究
1989-90	資料評価のための探索的研究
1989-90	児童・生徒の語彙力調査のための基礎的研究
1989-90	社会言語学資料についてのデータベース構築に関する準備的研究
1989-90	新聞における国語関係記事の蓄積と活用法に関する準備的研究
1989-90	文献情報の収集・整理法に関する準備的研究
1989-90	話しことばにおける文の構造の研究
1989-91	『花柳春話』の文体別使用語彙の比較研究
1989-91	文字・表記の研究の国際的現状の調査
1989-93	幼児・児童の書きことばの獲得に関する調査研究
1990	簡約日本語の創成と教材開発に関する研究
1990	現代語彙成立過程の調査
1990	言語生活における発話の種類とその機能に関する準備的研究
1990-91	敬意表現行動の種類と機能に関する社会言語学的研究
1990-92	雑誌における振り仮名の調査研究
1990-92	人文関係用語の訳語索引の作成
1990-92	連続音声の音響的特徴についての実験的研究
1990-93	漢字の学習指導の実態に関する調査研究
1990-93	言語伝達行動に関する対照言語学的研究
1990-93	日本語とスペイン語との対照言語学的研究
1990-93	日本語とタイ語との対照言語学的研究

1991	音声言語教育の現状と問題点
1991	各国の言語状況についての情報収集
1991	疑問表現の意味に関する研究
1991	語彙指導のための基礎的研究
1991	国語関係新聞記事の蓄積と活用法に関する研究
1991	国語教育における言語教育研究の情報収集
1991	国立国語研究所資料の活用に関する研究
1991	雑誌九十種語彙表のフロッピー版作成
1991	録音・録画資料の保存
1991-92	現代敬語行動の研究—小集団内の敬語行動—
1991-93	教育基本語彙データベースの構築
1991-93	現代日本語の語法の記述的研究
1991-93	国際語としての日本語の創成とその教材化
1991-93	児童・生徒の語彙能力の調査方法に関する研究
1991-93	日本語否定表現の用法に関する基礎的研究
1991-93	社会言語学資料についてのデータベース作成
1991-93	地域言語の計量的研究方法に関する調査研究
1991-94	文献情報の収集・整理法に関する研究
1991-94	発話の伝達効果に関する基礎的研究
1991-94	日本語情報資料データベース構築のための準備的研究
1991-95	学術用語の語構成の研究
1991-95	国語辞典編集のための準備的研究
1992	近代語の探索的研究
1992	中学校・高校教科書等語彙表のフロッピー版作成
1992	日本語音声の韻律的単位に関する記述的研究
1992-93	『分類語彙表』の増補
1992-93	技術研修生のための日本語教育の標準的カリキュラム等の作成に関する調査研究協力者会議
1992-94	国語関係新聞記事の蓄積と活用の研究—「台帳」の整備と試験的活用—
1992-94	日本語と英語との対照言語学的研究—対話構造に関する研究—
1992-94	日本語と朝鮮語との対照言語学的研究—両言語の複文の構造についての基礎的研究—
1992-94	言語処理システム上での漢字の情報伝達特性に関する研究
1992-94	自然科学用語の変遷と定着
1992-96	日本語運用能力育成のための準備的研究
1992-96	日本語社会における敬意表現の総合的研究
1992-98	言語情報資料緊急整備
1992-98	日本語教育文献索引の作成及び情報収集のための講演会等の開催
1992-98	日本語教育関係資料の収集・提供

1993	テレビ放送の語彙についての計量的研究
1993	パケット式用例採集の試み
1993	ポルトガル語の話しことばの諸相
1993	国立国語研究所国際シンポジウム―「世界の国語研究所―言語問題の多様性をめぐって―」―
1993	謝罪表現の意味に関する研究
1993	連続音声の音響的特徴についての実験的研究(補完)
1993-94	日本語の文末の韻律に関する記述的研究
1993-95	近代訳語の歴史的研究
1993-96	言語計量調査―現代雑誌の用字―
1993-97	『方言文法全国地図』『日本言語地図』分析のための基礎的研究
1993-98	日本語研究のための情報システムの構築に関する調査研究
1994	引用表現の記述的研究
1994	国立国語研究所国際シンポジウム―「新しい言語理論と日本語」―
1994	謝罪の方略に関する研究
1994	談話の構造パターンに関する教材開発のための基礎的研究
1994	日本語とタイ語との対照言語学的研究―人間関係を保つための言語行動に関する研究―
1994	日本語と中国語との対照言語学的研究―語彙・文法についての基礎的研究―
1994	日本語コミュニケーション能力に関する国際共同研究―日英対照修辭論に関する探索的研究―
1994	名詞の語彙・統語情報記述のための予備的研究―形式名詞の用法と意味―
1994-95	ポルトガル語の話しことばの諸相―日本語とポルトガル語との社会言語学的対照研究―
1994-95	談話資料の活用に関する研究
1994-95	日本語教育の内容と方法についての調査研究―朝鮮語を母語とする学習者に対する教育―
1994-95	日本語教育モデル教材の作成―日本語教育映像教材初級編及び同中級編関連教材の作成―
1994-95	日本語教育用学習辞典の記述法に関する研究
1994-96	技術研修生に対する日本語教育の標準的カリキュラム等の作成
1994-96	計量的地域言語研究とその計算機支援に関する調査研究
1994-96	言語レベルと結合関係―日西対照研究―
1994-96	国際社会における簡略達意な日本語コミュニケーションの研究
1994-96	視聴覚教材の利用方法に関する探索的研究
1994-96	日本語の韻律構造とその音声学的実現についての研究
1994-96	文字・表記システムと読みの過程の関係についての研究
1994-97	テレビ放送における音声・文字言語の研究
1994-97	教育基本語彙に関する研究
1994-97	言語表現と話者の心的態度に関する対照言語学的研究
1994-97	幼児・児童・生徒の文字習得の問題点に関する探索的研究
1994-98	スカウト式用例採集の実施

1994-98	国語辞典の編集
1994-98	国定読本用語総覧の編集刊行
1994-98	社会言語学的研究情報の運用に関する基礎的研究
1994-98	代表例抽出索引方式による用例採集
1994-98	地域社会における言語接触の研究
1994-98	日本語学習辞典の作成—基本語用例データベースの作成—
1994-98	日本語教育教材等の作成
1994-98	日本語教育研修
1994-98	日本語教育相互研修ネットワーク
1994-98	日本語教育長期専門研修
1994-98	日本語教育特別集中研修
1995	引用表現の類型に関する記述的研究
1995	国立国語研究所国際シンポジウム—「世界の言語教育・日本の国語教育」—
1995	日本語の対照言語学的研究—日本語方言のモダリティに関する記述的研究—
1995-96	近代語彙の形成の研究
1995-96	談話における非言語行動の記述・分析に関する探索的研究
1995-96	日本語とタイ語との対照言語学的研究—人間関係を保つための言語行動に関する社会言語学的研究—
1995-96	日本語と朝鮮語との対照言語学的研究—文構造に関する研究—
1995-96	発話の伝達効果をめぐる意識についての基礎的研究
1995-97	音声コミュニケーションの現状と問題点に関する調査研究
1995-97	国語関係新聞記事の蓄積と活用の研究—効率的な記事検索のためのキーワードの整備—
1995-97	昭和41年の新聞記事による漢字単語頻度データベースの作成
1995-97	日本語と英語との対照言語学的研究—会話スタイルに関する研究—
1995-97	日本語と中国語との対照言語学的研究—中国語を母語とする日本語学習者の学習困難点を明らかにするための多角的対照研究—
1995-97	文献情報の収集・整理法に関する研究—データベース化のための実践的研究—
1995-99	児童生徒に対する日本語教育のカリキュラムに関する国際的研究
1995-98	大量日本語データのデータベース構築に関する研究
1995-98	日本語とフランス語の音声
1995-98	日本語の変化予測についての基礎的研究
1995-98	日本語コミュニケーション能力に関する国際共同研究
1995-98	方言文法・表現法地図作成のための研究
1996	国立国語研究所国際シンポジウム—「国際社会の日本語」—
1996	日本語の対照言語学的研究—名詞述語文に関する研究—
1996-97	理工系学術用語の基本語基の研究
1996-99	ブラジル人と日本人との接触場面
1996-98	国語学研究文献目録データベースの作成
1996-98	日本語とインドネシア語との対照言語学的研究—「基礎日本語活用辞典」の改

	訂一
1996-98	日本語教育の内容と方法についての調査研究—視聴覚的教育手段の活用—
1996-98	日本語教育モデル教材の作成—日本語教育映像教材初級編利用方法の開発—
1996-98	日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成
1996-99	複合辞の意味・用法の記述的研究
1996-98	方言録音文字化資料に関する研究
1996-98	明治前期英和辞書における日本語の歴史的研究
1997	国立国語研究所国際シンポジウム—「言語研究と世界のシソーラス」—
1997	読みの過程の統合モデルについての研究
1997	日本語と東アジア諸言語との対照言語学的研究—文法形式の用法差に関する探索的研究—
1997	日本語の対照言語学的研究—談話における非言語行動の記述・分析に関する探索的研究
1997	日本語教育教材開発のための調査研究—視聴覚教材を利用した授業計画に関する探索的研究—
1997	発話の伝達効果をめぐる意識についての調査研究
1997-98	グローバル・コミュニケーションに関する研究
1997-98	学校の中の敬語についての社会言語学的研究
1997-98	国定教科書用例データベース作成
1997-98	対象別日本語教育カリキュラムに関する調査研究
1997-98	第二言語による簡略達意な日本語コミュニケーションの研究
1997-99	日西対照研究—動詞とその周辺—
1997-98	日本語とタイ語との対照言語学的研究—社会における人間関係維持を意識した言語行動の特徴についての研究—
1997-98	日本語運用能力育成のための総合的研究
1997-00	日本人の話しことばに関する総合的研究
1998	ディスコース・コミュニティと日本語学習の研究
1998	基礎語の用法分類
1998	教育基本語彙の活用に関する研究
1998	語の使用頻度を規定する諸要因についての基礎的研究
1998-99	国語関係新聞記事の蓄積と活用の研究—索引情報と本文の活用—
1998	国立国語研究所国際シンポジウム—「国際社会と日本語」—
1998	日本語と英語との対照言語学的研究—会話スタイルの分析—
1998	日本語と東アジア諸言語との対照言語学的研究—言語間対照研究の基礎に関する研究—
1998	日本語の対照言語学的研究—言語行動におけるストラテジーの展開構造に関する研究—
1998	日本語教育教材開発のための調査研究—教材活用法に関する探索的研究
1998-00	文献情報の収集・整理法に関する研究—収集・編集システムの高度化・効率化に関する基礎的研究—
1998-00	文法的意味の普遍性と多様性に関する研究（言語表現の意味・機能の普遍性と多様性に関する研究）
1998	方言文法の記述とその通時的解釈に関する基礎的研究

1998	幼児・児童・生徒の言語習得の問題点に関する調査研究
1999-00	現代雑誌 200 万字言語調査
1999-00	言語行動の多様性に起因する言語問題についての研究領域の創成
1999-00	方言文法の総合的研究 (①方言文法・表現法地図作成のための研究②方言文法の記述とその通時的解釈に関する基礎的研究)
1999-00	言語発達・言語教育・言語生活に関する総合的研究
1999-00	日本語研究資源の形成と共有のための基盤に関する研究 (①研究成果の組織的蓄積と公開に関する研究②日本語データベースの構築③新聞の JIS 外漢字に関する研究)
1999-00	方言録音文字化資料に関する研究
1999-00	言語研究に現れる術語の語誌的研究
1999	タイ・カンボジア後の韻律の対照と、日本語教育への応用
1999-00	日本語教育研修の内容・方法と評価に関する研究
1999-00	日本語学習の内容と方法に関する開発的研究—日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成—
2000	国語関係新聞記事の蓄積と活用に関する研究—記事本文の活用と資料収集法の検討—
2000	学習手段選択時代の日本語教育に関する国際共同研究

独立行政法人 国立国語研究所

年度	題目
2001-05	現代日本語における書き言葉の実態解明と雑誌コーパスの構築
2001-05	・「現代雑誌 200 万字言語調査報告書」の刊行
2001-04	・「太陽コーパス」の作成及び報告書の刊行
2001-05	日本語の多様性に関する基盤データの整備と研究方法の探索
2001-05	・「学校敬語・敬意表現調査報告書」の刊行
2001-05	・「方言文法全国地図」の刊行
2001-05	・「話し言葉コーパス」の作成及び報告書の刊行
2001-05	日本語教育のための言語資源及び学習内容に関する調査研究
2001-05	・作文教育のための「アジア版対訳コーパス」及び「欧米版対訳コーパス」の作成
2001-05	・発音教育のための「音声データベース試作版」の作成
2001-05	日本語教育の教師教育の内容と方法に関する調査研究
2001-05	・「国内の教師養成機関における教師教育の実態に関する資料」の作成
2001-05	・「目的別、課題別の研修に関する研修報告資料」の作成
2001-05	日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
2001-05	・「国内外の日本語教育機関における学習と教育の実践データ集」の作成
2001-05	・「海外の日本語学習をとりまく学習環境の実態調査データ集」の作成
2001-05	・「映像教材を利用した授業設計事例集」の刊行
2001-05	・「映像教材の利用方法など教師用指導参考書」の刊行
2003-05	日本語の現在
2002-05	分かりにくい外来語の言い換え提案

2002-05	汎用電子情報交換環境整備プログラム
2006-09	大規模汎用日本語データベースの構築とその活用に関する調査研究：現代日本語書き言葉コーパスの構築等
2006-09	国民の言語行動・言語意識・言語能力に関する調査研究
2006-09	研究成果の活用による日本語像の提案
2006-09	喫緊の課題に対応した調査研究の実施
2006-09	・文化審議会の審議課題に関する調査研究
2006-09	・電子政府のための調査研究
2006-09	日本語教育に関する情報の提供
2006-09	・日本語教育情報資料の作成・提供
2006-09	・日本語教育情報の作成基盤の整備及び成果の普及
2006-09	情報発信
2006-09	・調査研究の成果の公表及び普及広報事業
2006-09	・情報・資料の収集・整理等と情報提供システムの強化・効率化
2006-09	・内外機関との連携協力

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所

年度	題目	種別
2009-15	日本語レキシコンの音韻特性	基幹型
2009-15	日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性	基幹型
2009-15	文字環境のモデル化と社会言語科学への応用	基幹型
2010-15	日本語レキシコンー連濁事典の編纂	基幹型
2009-15	消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究	基幹型
2009-15	方言の形成過程解明のための全国方言調査	基幹型
2009-15	多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明	基幹型
2009-13	日本語変種とクレオールの形成過程	基幹型
2012-16	日本語の大規模経年調査に関する総合的研究	基幹型
2013-15	日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究	基幹型
2009-15	コーパスアノテーションの基礎研究	基幹型
2009-15	通時コーパスの設計	基幹型
2009-15	コーパス日本語学の創成	基幹型
2009-15	形容詞節と体言締め文：名詞の文法化	基幹型
2009-15	節連接へのモーダル的・発話行為的な制限	基幹型
2009-15	述語構造の意味範疇の普遍性と多様性	基幹型
2012-15	日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究	基幹型
2010-15	多文化共生社会における日本語教育研究	基幹型
2013-15	コミュニケーションのための言語と教育の研究	基幹型
2009-15	敬語と敬語意識の半世紀ー愛知県岡崎市における調査データの分析を中心にー	領域指定型

2009-15	言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究	領域指定型
2009-15	日本語教育のためのコーパスを利用したオンライン日本語アクセント辞書の開発	領域指定型
2009-15	文末音調と発話意図とを統合した話し言葉のアノテーションの可能性—日本語諸方言の同意要求表現を中心に考える—	領域指定型
2009-15	パラ言語情報および非言語情報の研究における基本概念の体系化	領域指定型
2009-15	空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究	領域指定型
2011-14	学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築	領域指定型
2011-14	日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究	領域指定型
2010-13	複文構文の意味の研究	独創・発展型
2009-12	大規模方言データの多角的分析	独創・発展型
2009-12	接触方言学による「言語変容類型論」の構築	独創・発展型
2010-13	日本語文法の歴史的な研究	独創・発展型
2009-12	近代語コーパス設計のための文献言語研究	独創・発展型
2011-14	多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化	独創・発展型
2009-12	日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成	独創・発展型
2009-12	定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究	独創・発展型
2009-12	訓点資料の構造化記述	萌芽・発掘型
2010-13	会話の韻律機能に関する実証的研究	萌芽・発掘型
2010-13	首都圏の言語の実態と動向に関する研究	萌芽・発掘型
2009	仮名写本による文字・表記の史的研究	萌芽・発掘型
2010-13	方言談話の地域差と世代差に関する研究	萌芽・発掘型
2010-13	近現代日本語における新語・新用法の研究	萌芽・発掘型
2009-12	テキストの多様性を捉える分類指標の策定	萌芽・発掘型
2009-12	テキストにおける語彙の分布と文章構造	萌芽・発掘型
2009-12	文脈情報に基づく複合的言語要素の合成的意味記述に関する研究	萌芽・発掘型
2010-13	統計と機械学習による日本語史研究	萌芽・発掘型
2016-21	対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法	基幹型
2016-21	統語・意味解析コーパスの開発と言語研究	基幹型
2016-21	日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成	基幹型
2016-21	通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開	基幹型
2016-21	大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的な研究	基幹型
2016-21	日本語学習者のコミュニケーションの多角的な解明	基幹型
2016-	方言の記録と継承による地域文化の再構築	広領域連携型
2016-	表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化	広領域連携型

2016-21	北米における日本関連在外資料調査研究・活用一言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築	ネットワーク型
2016-	日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得	領域指定型
2016-	議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究	領域指定型
2016-	古文教育に資する，コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究	領域指定型
2016-	会話における創発的参与構造の解明と類型化	領域指定型
2016-	「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発	領域指定型
2016-	語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究	新領域創出型
2016-18	all-words WSD システムの構築及び分類語彙表と岩波国語辞典の対応表作成への利用	新領域創出型
2016-	日本語の間接発話理解：第一言語，第二言語，人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究	新領域創出型
2019-	現代語の意味の変化に対する計算的・統計力学的アプローチ	新領域創出型
2019-	多文化共生社会における日本語の言語的障壁の低減に関する研究	新領域創出型
2019-	発達障害児の聞き取りの困難さの要因を探る実証研究	新領域創出型
2019-	NPCMJ コーパスに対する日本語意味役割分析	共同利用型
2019-	音声の個人内変化を推定するためのコーホート分析の有効性に関する実証研究	共同利用型
2019-	訓点資料の精密解読によるデジタルアーカイブの検証	共同利用型
2019-	言語接触における英語のインパクト：語彙の英語化に関するウェルフェア・リングイスティクスの視点から	共同利用型
2019-	語彙使用・漢字使用に着目した児童の文章作成能力の経年変化の実態調査	共同利用型
2019-	第1～3次岡崎敬語調査調査票・調査員記録簿の分析	共同利用型
2019-	大規模コーパスを利用した言語処理の計算心理言語学的研究	共同利用型
2019-	東北方言の地理的・世代的動態についての研究	共同利用型
2019-	難解用語の言語問題に対応する言い換え提案の検証とその応用	共同利用型
2019-	日本語音声の韻律的特徴におけるポーズと話速の実証的研究	共同利用型
2019-	日本語研究の戦前と戦後—国立国語研究所草創期に関与した研究者を通して明らかにする日本語の研究史—	共同利用型
2019-	北海道調査データを再活用した言語変化の実時間プロセスの解明へ向けた研究	共同利用型

科研費による研究課題一覧

年度	種別	題目	代表者
1949	試験研究	白河市および附近の農村における言語生活の実態調査	西尾実
1949	刊行費	言語生活の実態：白河市および附近の農村における	西尾実
1950	試験研究	鶴岡市および附近の農村における言語生活の実態調査	西尾実
1951	総合研究	平曲の研究	土居光知
1952-53	総合研究	敬語の社会心理学的研究	西尾実
1952	刊行費	言語生活の実態：鶴岡市および附近の農村における	西尾実
1953-54	試験研究	当用漢字の適用によって生ずる問題とその解決法の研究	岩淵悦太郎
1953	各個研究	都会の女性における接頭辞「お」の使用に関する調査	柴田武
1953	助成研究	法華経の訓読についての研究	廣濱文雄
1953	機械購入	Sonagraph (KAY Electric Co.製)	西尾実
1954-55	総合研究	青年の新聞への接近・理解とその影響：新聞記事の表現と効果	西尾実
1954	各個研究	現代チベット語（とくにラサ方言）の文法・語彙の調査研究	北村甫
1954	刊行費	点本書目	廣濱文雄
1955	各個研究	一方言体系の記述的研究	柴田武
1955	助成研究	文章論史研究：文の展開論の考察	市川孝
1955	助成研究	琉球首里方言の形態論的・意味論的研究	上村幸雄
1956-58	試験研究	伝達の効率化に関する基礎的言語研究	西尾実
1956	助成研究	福島県方言の研究	飯豊毅一
1957	各個研究	方言調査基礎地図の作成	柴田武
1958-60	総合研究	北海道の言語の実態と共通語化の過程	岩淵悦太郎
1958-59	各個研究	基本語彙設定のための語義分類表作成に関する研究	林大
1959-60	各個研究	文音調より見た京都方言	宮地裕
1961	各個研究	現代標準語における文型の実態調査	林四郎
1962	各個研究	日本語のイントネーションの研究	宮地裕
1962-63	各個研究	教育基本文型の研究	宮島達夫
1963-64	各個研究	言語地理学的方法についての検証	柴田武
1964-65	総合研究	現代語誌記述のための基礎的研究	林大
1964-65	各個研究	就学前児童の語彙の実態	大久保愛
1965-67	総合研究	地方における話しことば教育法改善のための基礎的研究	大石初太郎
1965-66	各個研究	電子計算機による自動言語単位分割の研究	岩淵悦太郎
1965	各個研究	移入集団の言語と被移入地域語・共通語との交渉に関する研究	飯豊毅一
1967-69	各個研究	作品用語の類似度の研究	宮島達夫
1968-69	試験研究	言語情報処理における漢字処理の実験的研究	林四郎
1968	奨励研究(A)	音韻知覚の発達についての実験心理学的研究	天野清
1969-71	一般研究(B)	現代語の形成過程に関する基礎的研究	岩淵悦太郎
1969-70	一般研究(C)	語の情緒的意味の Semantic Differential による研究	西尾寅弥
1970-71	総合研究(A)	日本語の電子計算機処理のための基礎的研究	岩淵悦太郎
1971-72	試験研究	社会変化と言語生活の変容	岩淵悦太郎
1972-73	一般研究(B)	電子計算機による総合語彙表作成のための基礎的研究	岩淵悦太郎
1973	一般研究(C)	幼児・児童のかな文字の筆順に関する教育心理学的研究	村石昭三
1973	一般研究(D)	語彙の教育的構造化の研究	林四郎
1974	総合研究(A)	大都市における言語生活の実態	野元菊雄

1974	一般研究(B)	作品用語検索組織の研究	石綿敏雄
1974	一般研究(C)	現代の国語表記におよぼした洋学・漢学の影響	斎賀秀夫
1976	総合研究(B)	表現法の全国的地域差を明らかにするための調査方法に関する研究	飯豊毅一
1976-78	一般研究(A)	幼児・低学年児童の語彙調査	芦沢節
1976-78	一般研究(A)	現代の漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研究	斎賀秀夫
1977-78	特定研究	談話行動の実験社会言語学的研究	渡辺友左
1977-78	特定研究	日本語教育のための基本的な言語能力の測定に関する研究	野元菊雄
1977-78	特定研究	児童の概念形成過程における言語の役割りとその教育効果に関する研究	林大
1977-78	総合研究(A)	表現法の全国的調査研究	飯豊毅一
1977-78	一般研究(B)	雑誌用語の変遷に関する研究	宮島達夫
1978	特定研究	言語運用メカニズムの発達的研究	上野田鶴子
1979-80	一般研究(C)	言語解析を応用した日本語文修正処理の効率化に関する研究	斎藤秀紀
1980-82	一般研究(A)	話しことばの計量国語学的調査・分析のための基礎的研究	斎賀秀夫
1980-81	一般研究(B)	日本人の言語行動様式に関する比較対照的研究	江川清
1981-82	一般研究(B)	日本語シソーラス作成法の研究	宮島達夫
1981-82	一般研究(B)	話しことばの構文の記述に関する日本語教育学的研究	野元菊雄
1981-82	一般研究(C)	分散処理による大量日本語処理の効率化に関する研究	斎藤秀紀
1982-84	特定研究	常用漢字の学習段階配当のための基礎的研究	村石昭三
1982-84	特定研究	日本人の言語行動の類型	渡辺友左
1982-84	特定研究	第二言語教育における教育内容・方法の改善と標準化	野元菊雄
1982-84	特定研究	日本語の正書法及び造語法とそのあり方	林大
1983-85	総合研究(A)	日仏語の基本語彙の対照言語学的研究	野元菊雄
1983-85	一般研究(B)	方言研究資料の電子計算機による作成及び分析に関する研究	佐藤亮一
1983	奨励研究(A)	形態結合における音融合の実態およびその生起条件に関する研究	石井久雄
1984-85	一般研究(A)	国定読本の用語の研究	飛田良文
1984-85	一般研究(B)	日本語教育用学習辞典の記述法に関する研究	川瀬生郎
1984	奨励研究(A)	音聴取の錯覚の様相およびその音韻論的定位に関する研究	石井久雄
1984	奨励研究(A)	児童の書きことばの獲得と文章化能力の発達に関する言語心理学的研究	茂呂雄二
1985-88	一般研究(A)	国語学研究の動向の調査研究	佐竹秀雄
1985-86	一般研究(B)	日本語語彙教育のための分類用例集の開発と試作	南不二男
1985	一般研究(C)	古代的言語表現の享受と創造：現代日本語における	石井久雄
1985	奨励研究(A)	文献資料と方言分布の対照による語史構成のための基礎的研究	小林隆
1985	奨励研究(A)	言語行動の目的・機能及び対人的な配慮を明示する言語表現	杉戸清樹
1986-87	特定研究	連語構造における意味素性の適合に関する言語間比較	南不二男/中道真木男
1986-88	特定研究	言語データの収集と処理の研究	野村雅昭
1986-88	総合研究(A)	北海道における共通語化および言語生活の実態	江川清
1986-88	一般研究(A)	漢字情報のデータベース化に基づく常用漢字の学習段階配当に関する研究	村石昭三/野村雅昭
1986-87	一般研究(B)	日本語教育における指導要素としての言語単位に関する研究	上野田鶴子
1987-88	一般研究(B)	光学文字読み取り装置によるコンコーダンス作成システムの開発	飛田良文
1988	一般研究(B)	文章理解のメカニズムに関する基礎的研究	田中卓史
1989-92	重点領域研究	日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究	野元菊雄/水谷修
1989-90	一般研究(B)	言語研究におけるシソーラスの利用法	宮島達夫

1989-90	一般研究(C)	日本語教育のための意味記述用基本語彙の選定と記述	中道真木男
1989	奨励研究(A)	文献と方言との間における語の意味の対応関係についての研究	小林隆
1989	奨励研究(A)	漢字の学習指導法に関する文献目録の作成とそれに基づいた漢字の学習指導法の分類	島村直己
1989	奨励研究(A)	擬似識字段階にいる幼児の文字使用に関する社会：文化的研究	茂呂雄二
1989-90	国際学術研究	米国における研究者のための日本語教育に関する共同研究	水谷修
1990	奨励研究(A)	身体各部位の名称の全国方言分布	小林隆
1990	奨励研究(A)	音声実験のための語彙検索システムの研究	前川喜久雄
1990	奨励研究(A)	三陸沿岸地域方言音調の共時的・通時的研究	大西拓一郎
1990	奨励研究(A)	幼児・児童のもつ読み書き概念に関する社会・文化的研究	茂呂雄二
1991-92	重点領域研究	聴解指導研究資料文献の現状と問題点：国語教育・日本語教育の実践に役立てるための方策	甲斐睦朗
1991-92	総合研究(A)	地域社会の言語生活：鶴岡市における戦後の変化	江川清
1991	総合研究(A)	留学生に求められる日本語能力の内容と水準の策定	水谷修
1991	奨励研究(A)	画像付き単語検索システムの研究	伊藤雅光
1991	奨励研究(A)	否定疑問文に対する応答に関する研究	井上優
1991	奨励研究(A)	ネットワーク法による「方言区画」に関する研究	熊谷康雄
1991	奨励研究(A)	全国方言分布調査における通信調査法の有効性と問題点	小林隆
1991	奨励研究(A)	種々の教育・保育環境とその活動の比較からみた幼児の読み書き能力の獲得に関する研究	茂呂雄二
1992-94	一般研究(A)	「国立国語研究所新聞記事データベース」の作成と活用に関する研究	斎藤秀紀
1992-93	一般研究(B)	在日外国人と日本人との言語行動接触における相互「誤解」のメカニズム：日本語と英・タイ・朝・仏語の総合的対照研究	西原鈴子
1992-93	一般研究(B)	日本語シソーラス・データベースの構築とその利用法の研究	中野洋
1992	奨励研究(A)	計量的方言区画と言語伝播に関わる地理学的条件との接続に関する研究	熊谷康雄
1992	奨励研究(A)	方言圏分布の事例収集とその諸特徴の概観のための調査	小林隆
1992	奨励研究(A)	方言における動詞の活用：普遍性と特殊性	大西拓一郎
1992	奨励研究(A)	方言使用地域の児童の就学後の書きことばの獲得に関する社会文化的研究	茂呂雄二
1993-95	総合研究(A)	日本語教育のための韻律特徴の対照言語学的研究	鮎澤孝子
1993-95	一般研究(B)	日本語教育と国語教育における聴解過程の解明：教室談話の観察と分析による	甲斐睦朗
1993	一般研究(C)	教室談話過程の質的分析：方言と共通語のコード交替に注目して	茂呂雄二
1993	奨励研究(A)	単語の心像喚起力に及ぼす表記形態の影響に関する研究	横山詔一
1993	奨励研究(A)	歴史的中央語と現代方言との時代的・地理的対応関係についての研究	小林隆
1993	奨励研究(A)	日本語教育における学習ストラテジーに関する基礎的研究	石井恵理子
1993	奨励研究(A)	日本語無アクセント方言の韻律構造についての理論的・実験的研究	前川喜久雄
1993	奨励研究(A)	方言における用言の活用の記述的研究	大西拓一郎
1993	奨励研究(A)	謝罪及び謝罪に対する応答に関する日英対照研究：脚本を資料として	池田理恵子
1994-98	創成的基礎研究	国際社会における日本語についての総合的研究	水谷修
1994-95	総合研究(A)	ネットワーキングによる日本語教師の自己改善,教育革新支援システムの開発研究	西原鈴子
1994-96	一般研究(A)	文章解析・生成のための日本語構造の記述に関する基礎的研究	中野洋
1994-96	一般研究(B)	外国人日本語学習者の韻律習得過程に関する縦断的研究	鮎澤孝子
1994-95	一般研究(C)	日本語教員としての諸能力の同定と測定ツール開発に関する研究	柳沢好昭

1994	奨励研究(A)	日本語学習者の文章産出過程における読み手との共通の枠組み設定に関する研究	石井恵理子
1994	奨励研究(A)	方言における活用の記述的研究：全国方言の動詞・形容詞・助動詞の活用	大西拓一郎
1994-95	国際学術研究	国際化時代における日本語研究文献情報の収集と分析	西原鈴子
1994-95	データベース	『国語研究所新聞記事データベース』の拡充と活用に関する研究	江川清
1995-97	重点領域研究	インターネットにおける学術漢字の符号化に関する基礎的研究	斎藤秀紀
1995-97	総合研究(A)	多角的な日本語学習を支える地域社会内ネットワーク研究	古川ちかし/西原鈴子
1995	奨励研究(A)	否定疑問文の意味・機能に関する対照言語学的研究	井上優
1995	奨励研究(A)	複合動詞の成立条件解明のための語構成論的研究	石井正彦
1995	奨励研究(A)	方言における用言の活用の通時的対応の研究	大西拓一郎
1996-97	基盤研究(B)	発話の韻律構造と語用論的・パラ言語的意味の関連についての実験的研究	前川喜久雄
1996-97	基盤研究(C)	臨時一語の構成に関与する文章論的諸特徴の記述的研究	石井正彦
1996	基盤研究(C)	明治初期の日本人のリテラシーに関する調査研究	島村直己
1996	奨励研究(A)	長野県中・南部方言におけるアスペクト表現の動態に関する調査・研究	井上文子
1996	データベース	教育基本語彙データベース	島村直己
1997	基盤研究(C)	「全国方言談話資料データベース」に基づく方言文法の研究と検証調査	井上文子
1998	特定領域研究	インターネットにおける学術漢字の符号化に関する基礎的研究：日本語学習の支援を含めて	斎藤秀紀
1998-01	基盤研究(B)	文法体系のバリエーションに関する対照方言学的研究	井上優/大西拓一郎
1998-00	基盤研究(B)	音声によるパラ言語情報の伝達メカニズムに関する実験的研究	前川喜久雄
1998-99	奨励研究(A)	統語情報の分析に基づく古代情意述語の意味用法の研究	田中牧郎
1999-98	一般研究(C)	日常談話の生成・受容における「構え」の言語行動論的研究	杉戸清樹
1999-00	基盤研究(B)	日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築	宇佐美洋
1999-01	基盤研究(C)	記述的日本語研究のための電子化コーパスの試作と活用の研究	山崎誠
1999-98	基盤研究(C)	教室における異文化間コミュニケーションの評価に関する研究	石井恵理子
1999-98	奨励研究(A)	日本語教育へのコミュニケーションの能動的受容理論の導入に関する研究	ロラン・マリージョゼ
1999-98	奨励研究(A)	日本全国における小地名使用漢字に関する調査研究	笹原宏之
1999-98	奨励研究(A)	全国方言の文法的対応の研究	大西拓一郎
1999-00	奨励研究(A)	動詞の多義性解消過程解明のための形態・連語・文脈情報の抽出に関する研究	柏野和佳子
1999-98	国際学術研究	海外日本語学習リソース提供システムの実験研究	柳澤好昭
2000	基盤研究(A)	年少者日本語教育における学習環境と言語習得の研究	佐々木倫子
2000-01	基盤研究(B)	日本語教育遠隔研修システム（WebSTER）の研修効果の研究	柳澤好昭
2000-02	基盤研究(C)	新聞 6 億字の言語調査と日本語学習者への Web 出版によるデータ提供	横山詔一
2000-01	奨励研究(A)	意味解析用辞書の構築における用例分析プラットフォームに関する研究	山口昌也
2001-03	基盤研究(A)	年少者日本語教育における学習環境と言語習得の研究	石井恵理子
2001-04	基盤研究(B)	日韓新時代における若者の国際コミュニケーションのあり方と意識に関する研究	尾崎喜光
2001-02	基盤研究(C)	時間表現・空間表現の意味の構造化に関する日本語と中国語の対照研究	井上優

2001-03	基盤研究(C)	大都市における消滅に瀕した伝統的方言の記録とデータベース作成	三井はるみ
2001-03	基盤研究(C)	インターネット・マルチメディアを利用した日本語教育実践の可能性と効果に関する研究	杉本明子
2001-02	基盤研究(C)	日本語教育における評価法に関する基礎的資料整備とその分析	菅井英明
2001	基盤研究(C)	東アジアにおける日本語観国際比較調査の実施（準備調査）	米田正人
2001-02	若手研究(B)	韻律的特徴の持つ談話構造に関する情報伝達能力の解明	小磯花絵
2001-02	若手研究(B)	日本語非母語話者の話す日本語の発音に対する日本人評価に関する基礎的研究	小河原義朗
2001-02	若手研究(B)	書簡文研究資料としての明治期往来物の収集と資料的性格の分析	小椋秀樹
2002-04	基盤研究(B)	日本語学習者による日本語発話と、母語発話との対照データベース：開発・応用のための研究	宇佐美洋
2002-05	基盤研究(B)	方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究	大西拓一郎
2002-05	基盤研究(B)	「20世紀初期総合雑誌コーパス」の構築による確立期現代語の高精度な記述	田中牧郎
2002-04	基盤研究(C)	「談話資料」による方言コードの変容に関する研究	井上文子
2002-03	基盤研究(C)	自発音声データに対する多面的アノテーション情報のXML化に関する研究	前川喜久雄
2002-04	基盤研究(C)	日本語コミュニケーション能力の養成に関する教師の実践的知識の研究	福永由佳
2002-03	若手研究(B)	現代日本の「異体字」の実態に関する調査研究	笹原宏之
2003-05	基盤研究(A)	児童・生徒の言語能力と言語生活	島村直己
2003-05	基盤研究(B)	今後の日本語教師教育のための指導者の役割とリーダーシップに関する研究	柳澤好昭
2003-04	基盤研究(C)	外国人定住者の社会的統合に関する政策提言のための実態調査	菅井英明
2003-05	基盤研究(C)	社会動向を反映した日本語研究のための課題設定に関する基礎的研究	相澤正夫
2003-05	萌芽研究	地理情報システム言語地図の開発	大西拓一郎
2003-04	若手研究(B)	自発音声コーパスを用いた音声転訛現象の言語内的・外的要因の分析	小磯花絵
2003-04	若手研究(B)	外国人の日本語の発音に対する日本人評価の研究：方法論の検討と日本語教育への応用	小河原義朗
2003-04	若手研究(B)	漢語研究資料としての明治前期語い集型往来の資料的性格の分析と語い索引の作成	小椋秀樹
2004-06	基盤研究(B)	話し言葉コーパスに基づく言語変異現象の定量的分析	前川喜久雄
2004-06	基盤研究(C)	対照研究の成果を生かした中国語母語話者向け日本語文法教材の開発	井上優
2004-06	基盤研究(C)	電子政府6万字種データベースに準拠した海外日本語研究者向けWeb漢字辞書の作成	横山詔一
2004-06	基盤研究(C)	日本語教育における協働志向の実践研究に関する調査研究：実態調査と方法論の検討	金田智子
2004-05	萌芽研究	コーパスに基づく話し言葉文体論の構築	前川喜久雄
2004-05	若手研究(B)	日本語学習者と日本語母語話者の提案の言語行動に関する実証的研究	梶本総子
2005-08	基盤研究(B)	多文化共生社会に対応した言語教育政策の構築に向けた学際的研究：複合領域としての日本語教育政策研究の新たな展開を目指す	野山広
2005-06	基盤研究(C)	日本語学習者の書き言葉に関する対照言語学的・文書論的研究	宇佐美洋
2005-06	基盤研究(C)	医療における専門家と非専門家のコミュニケーションの適切化のための社会言語学的研究	吉岡泰夫
2005	基盤研究(C)	代表性を有する大規模な日本語書き言葉コーパスの構築と運用に関わる企画調査	前川喜久雄

2005-06	若手研究(B)	現代日本語の話しことばに現れる「言い直し表現」の体系化に関する研究	丸山岳彦
2005-07	若手研究(B)	「デジタル版山梨方言辞典」作成のための調査研究とデータ構築	吉田雅子
2005-06	若手研究(B)	音声コーパスを用いた対話と独話の比較：韻律的・統語的特徴に着目して	小磯花絵
2005	若手研究(B)	日本語音声教育支援システムの評価と改善：授業実践における利用とその分析を通して	小河原義朗
2005-07	若手研究(B)	サハリンに残存する日本語の地位に関する調査研究	朝日祥之
2005-07	若手研究(B)	国語辞典における多義語の意味レベルの使用実態と意味構造の解析	柏野和佳子
2005-06	若手研究(B)	海外日本語教育用 Web 漢字辞書の開発研究	和田志子
2006-10	特定領域研究	代表性を有する現代日本語書籍コーパスの構築	山崎誠
2006-10	特定領域研究	代表性を有する大規模書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備	前川喜久雄
2006-10	特定領域研究	言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用	田中牧郎
2006-09	基盤研究(B)	地理情報システムに基づく言語地理学の再構築	大西拓一郎
2006-08	基盤研究(C)	方言談話データベースを活用した表現法の変化に関する研究	井上文子
2006-08	基盤研究(C)	三者面接調査における回答者間相互作用のバリエーションに関する研究	熊谷智子
2006-08	基盤研究(C)	日本語教育場面における社会的相互作用と学習の関係性の解明	杉本明子
2006-07	基盤研究(C)	コーパス言語学の方法に基づく言文一致現象の解析	田中牧郎
2006-08	萌芽研究	加齢による社会活動の変化にともなう言語使用の変化に関する研究	尾崎喜光
2006-08	若手研究(B)	「外国人にとってわかりにくい日本語」の判断基準に関する研究	植木正裕
2007-09	基盤研究(A)	敬語と敬語意識の半世紀：愛知県岡崎市における第3次調査	杉戸清樹
2007-10	基盤研究(B)	国内地域間コミュニケーション・ギャップの研究：関西方言と他方言の対照研究	尾崎喜光
2007-08	基盤研究(B)	コンピュータ利用日本語教育におけるコンテンツと学習の研究：効果と評価の観点から	柳澤好昭
2007-08	基盤研究(C)	医療コミュニケーションを適切化するポライトネス・ストラテジーの研究と資料の提供	吉岡泰夫
2007-08	若手研究(B)	近代文語文を対象とした形態素解析のための電子化辞書の作成とその活用	小木曾智信
2007-08	若手研究(B)	日本語学・日本語教育の概念を応用した国語科言語事項の指導法開発	森篤嗣
2007-08	若手研究(B)	日本語学習者の語彙力および読解力の発展におけるメタ言語的スキルの役割	和田志子
2008	基盤研究(B)	「生活のための日本語」に関する基盤的研究：段階的発達の支援を目指して	金田智子
2008-11	基盤研究(C)	明治期国語調査委員会資料と『日本言語地図』『方言文法全国地図』による分布解釈研究	吉田雅子
2008-10	基盤研究(C)	学習者の自発的学習と柔軟な運用を考慮した作文支援システムの実現	山口昌也
2008-10	基盤研究(C)	日本語のコロケーションを記述するための統計指標のコーパスによる検証	山崎誠
2008-10	基盤研究(C)	辞書用例の記述仕様標準化のための実証研究	柏野和佳子
2008-10	若手研究(B)	樺太方言と北海道方言の言語変容に見られる関係についての調査研究	朝日祥之
2008-09	若手研究 スタートアップ	近世後期日本語逆接条件表現に関する記述的研究	宮内佐夜香
2009-11	基盤研究(C)	日本語方言における間投表現の使用の様相に関する研究	井上文子

2009-10	基盤研究(C)	日本語方言の終助詞の意味の類型に関する研究	井上優
2009-11	基盤研究(C)	日本語諸方言における意味的隣接表現の文法体系への取り込みに関する研究	三井はるみ
2009-11	基盤研究(C)	書き言葉コーパスに基づくテキスト分類尺度の探索的研究	小磯花絵
2009-11	基盤研究(C)	和文系資料を対象とした形態素解析辞書の開発	小木曾智信
2009-11	基盤研究(C)	「単語情報付きコーパス」を用いた近現代の語彙・語法史の研究	田中牧郎
2009-10	若手研究(B)	20 世紀後半の新聞における外来語の基本語化に関する調査研究	金愛蘭
2009-10	若手研究(B)	日本語「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」測定法の設計	佐野大樹
2009-11	若手研究(B)	漢字政策の改定が漢字使用に及ぼす影響に関する研究	小椋秀樹
2009-11	若手研究(B)	埼玉県における方言形成の構造に関する言語地理学的研究	鎌水兼貴
2009	若手研究(B)	公共情報媒体としての広報紙を対象とした表記法の在り方に関する調査研究	齋藤達哉
2009-11	挑戦的萌芽研究	「福祉言語学」の創成・確立に資する研究モデルの探索	相澤正夫
2010-13	基盤研究(A)	日本語のアクセントとアクセント類型論	窪菌晴夫
2010-12	基盤研究(B)	学習者の日本語運用に対する日本人評価の類型化・モデル化に関する研究	宇佐美洋
2010-13	基盤研究(B)	漢字字体変容の原理：敦煌文献から現代日本戸籍漢字まで	高田智和
2010-12	基盤研究(B)	N 型アクセントに関する総合的調査研究	木部暢子
2010-12	基盤研究(C)	南琉球諸方言要地アクセントの緊急調査研究	上野善道
2010-12	基盤研究(C)	日本語方言オノマトペの記述モデル構築に関する研究	竹田晃子
2010-12	基盤研究(C)	明治以降の文学作品に使用された外来語の実態研究	飛田良文
2010	若手研究(B)	学習言語が教科内容の理解に及ぼす影響の研究	森篤嗣
2010-11	若手研究(B)	近代日本語「点字資料」を用いた仮名遣い改定史の調査研究	中野真樹
2010-11	研究活動 スタート支援	現代日本語の音韻交替	ティモシー・バンス
2010	挑戦的萌芽研究	優れた言語学プログラム構築のための調査研究	窪菌晴夫
2011-15	基盤研究(A)	方言分布変化の詳細解明：変動実態の把握と理論の検証・構築	大西拓一郎
2011-13	基盤研究(C)	自発音声データの定量的解析による日本語韻律構造理論の再構築	前川喜久雄
2011-13	基盤研究(C)	促音の発声・調音に関わる音声生理学的研究	藤本雅子
2011-13	基盤研究(C)	コーパス分析に基づく辞書の位相情報の精緻化	柏野和佳子
2011	若手研究(B)	日本語アクセントの平板化に関する実証的研究	儀利古幹雄
2011-12	若手研究(B)	近代語コーパスの高度なタグ付けと形態素解析による待遇表現・人称代名詞の計量的研究	近藤明日子
2011-12	若手研究(B)	基本外来語の談話構成機能に関するコーパス言語学的研究	金愛蘭
2011-12	若手研究(B)	第二言語習得理論に基づく日本語指導法の実証的研究：インプット重視の処理指導の実践	中上亜樹
2011-13	若手研究(B)	サハリンで形成された日本語樺太方言の多様性に関する社会言語学的研究	朝日祥之
2012-15	基盤研究(A)	海外連携による日本語学習者コーパスの構築：研究と構築の有機的な繋がりに基づいて	迫田久美子
2012-13	基盤研究(B)	和漢の両系統を統合する平安・鎌倉時代語コーパス構築のための語彙論的研究	田中牧郎
2012-14	基盤研究(B)	実践的な読解教育実現のための日本語学習者の読解困難点・読解技術の実証的研究	野田尚史
2012-14	基盤研究(C)	自発的な話し言葉に見られる節連鎖構造の研究	丸山岳彦
2012-14	基盤研究(C)	語彙分類の理論的整備に基づくシソーラスの改良に関する研究	山崎誠
2012-14	基盤研究(C)	近世口語文を対象とした形態素解析辞書の開発	小木曾智信
2012-14	基盤研究(C)	日英語話し言葉コーパスにおける言い淀み分類の精緻化と機能の対照分析	渡辺美知子

2012-13	若手研究(B)	コーパスに基づいたアイヌ語動詞範疇についての類型論的研究	アンナ・ブガエワ
2012-13	若手研究(B)	Ruby と MSXML による日本語名詞述語文の実例調査とコーパス分析ツールの構築	今田水穂
2012	若手研究(B)	瀬戸内伊吹島および真鍋島方言の音調変化に関する研究	竹村亜紀子
2013-14	基盤研究(B)	言語運用に対する個人の評価価値観の形成とその変容に関する研究	宇佐美洋
2013-16	基盤研究(B)	言語コーパスに対する読文時間付与とその利用	浅原正幸
2013-15	基盤研究(B)	方言話し言葉コーパスの構築とコーパスを使った方言分析に関する研究	木部暢子
2013-15	基盤研究(C)	公用語の地域差に関する社会言語学的総合研究	井上史雄
2013-15	基盤研究(C)	方言ロールプレイ会話における談話展開の地域差に関する研究	井上文子
2013-15	基盤研究(C)	自発音声における発話の継続・終了の予測に関わる韻律情報の解明	小磯花絵
2013-14	基盤研究(C)	日本語危機方言アクセントの再調査による研究の深化	上野善道
2013-15	基盤研究(C)	多様な方言資料の横断的分析による新たな方言分布研究	鎌水兼貴
2013-14	基盤研究(C)	聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達性能を評価するための尺度の構築	籠宮隆之
2013-14	若手研究(B)	近代口語文翻訳小説コーパスの構築と計量的文体研究	小西光
2013	若手研究(B)	音響的特徴に基づく話者交替に関する発話単位の認定基準の構築	石本祐一
2013	若手研究(B)	中古中世歌合コーパスに基づく和歌評論の語彙論的研究	富士池優美
2013	研究活動 スタート支援	自然発話に基づいた北京語音声の定量的研究	高橋康德
2013-15	挑戦的萌芽研究	「呼びかけイントネーション」に関する萌芽的研究	窪菌晴夫
2013-14	挑戦的萌芽研究	新規言語事象の集中的多角的調査による首都圏の言語状況の把握	三井はるみ
2014-17	基盤研究(A)	日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型	窪菌晴夫
2014-17	基盤研究(B)	字体記述のデジタル化に基づく文字規範史の定位	高田智和
2014-16	基盤研究(B)	自発音声コーパスの分析による filled pause の音声学的特徴の解明	前川喜久雄
2014	基盤研究(B)	北東ユーラシア少数言語の電子アーカイブ環境構築とドキュメンテーション研究	長崎郁
2014-17	基盤研究(C)	大規模方言分布データの計量的分析方法の開発	熊谷康雄
2014-17	基盤研究(C)	「書き言葉的」と「話し言葉的」という文体差のある語の分析	柏野和佳子
2014-17	基盤研究(C)	多言語環境にある外国人の日本語観と言語選択に関する研究：在日パキスタン人を中心に	福永由佳
2014-16	挑戦的萌芽研究	即時性と教育効果を考慮した協調学習過程の構造化手法に関する研究	山口昌也
2014-15	挑戦的萌芽研究	多言語社会に対応した言語サービスとサービス評価の在り方に関する萌芽的研究	野山広
2014-16	若手研究(B)	韓国語サイソリにおける意味構造とプロソディの方言・言語対照研究	黄賢暲
2014	若手研究(B)	文章と発話の自発性からみた主語標示の助詞「が・の」の計量的研究	南部智史
2014-17	若手研究(B)	コーパスから取得しやすい情報と取得しにくい情報の研究	保田祥（加藤祥）
2015-18	基盤研究(A)	日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用	小木曾智信
2015-18	基盤研究(A)	読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究	野田尚史
2015-20	基盤研究(B)	統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に	プラシャント・パルデシ
2015-18	基盤研究(B)	会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張	山崎誠
2015	基盤研究(C)	近代語コーパスの計量分析に基づく同語異表記の通時的研究	間淵洋子

2015-18	基盤研究(C)	音声アシスタントとの円滑な話者交代を実現する音声言語特徴の解明	石本祐一
2015-17	基盤研究(C)	北海道北見市常呂町居住者の方言と郷里方言との相関に関する社会言語学的研究	朝日祥之
2015-18	基盤研究(C)	19 世紀半ば～ 20 世紀半ばロシア北東地域のユカギール語資料に関する言語学的研究	長崎郁
2015-18	基盤研究(C)	後続要素の複雑さが言い淀みの発生に及ぼす影響についての日英対照研究	渡辺美知子
2015-17	基盤研究(C)	実環境下を想定した聴覚補助機による非言語・パラ言語情報伝達性能評価試験の開発	籠宮隆之
2015-16	若手研究(B)	讃岐方言における発話行為体系と発話未表現の相関の解明のための予備的研究	乙武香里
2015	若手研究(B)	旋律と歌詞の計量的分析による日本民謡の地域的特徴の解明	河瀬彰宏
2015-17	若手研究(B)	消滅の危機に瀕した八丈語の音声資料作成とその分析に関する研究	三樹陽介
2015	若手研究(B)	コーパス内話者情報を利用した近世後期江戸語・上方語の研究	市村太郎
2015-16	若手研究(B)	自然言語における省略可能な統語範疇に関する通言語的研究	船越健志
2015	若手研究(B)	統語・意味情報付き形容詞を実装した通時コーパスによる中古形容詞の意味・用法研究	池上尚
2015-16	研究活動 スタート支援	超音波映像資料から見るロシア語の有声阻害音と無声阻害音の口頭特徴	松井真雪
2015	研究活動 スタート支援	訓点資料電子化のためのデジタル記述法と電子化プロセスの確立	堤智昭
2015	研究活動 スタート支援	「色葉字類抄」を中心とする国語辞書史研究	藤本灯
2015-16	挑戦的萌芽研究	近代語コーパスに対する統語情報アノテーションの基準策定	浅原正幸
2016-19	基盤研究(A)	海外連携による日本語学習者コーパスの構築及び言語習得と教育への応用研究	迫田久美子
2016-20	基盤研究(A)	日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓	木部暢子
2016-19	基盤研究(B)	コーパス言語学的手法に基づく会話音声の韻律特徴の体系化	小磯花絵
2016-19	基盤研究(B)	文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究	石黒圭
2016-17	基盤研究(C)	統辞・意味解析情報タグ付き日本語ツリーバンクからの資格意味情報の抽出と応用	アラスデア・バトラー
2016-18	基盤研究(C)	LINE における待遇表現ストラテジーの計量的研究	宮寄由美
2016-17	基盤研究(C)	形態論情報付きコーパスを活用した近代日本語の位相の計量的研究	近藤明日子
2016-18	基盤研究(C)	近現代の新語・新用法および言語規範意識の研究	新野直哉
2016-18	挑戦的萌芽研究	大規模コーパスに基づく日本語機能語の基礎研究と機能語検索ツールの応用	プラシャント・パルデシ
2016-18	挑戦的萌芽研究	方言圏論と方言区画論の統合による新しい言語地理学の創成	大西拓一郎
2016-18	挑戦的萌芽研究	基礎教育保障学の構築に向けた萌芽研究	野山広
2016-18	若手研究(B)	日本方言の活格性に関する基礎的研究	坂井美日
2016-18	若手研究(B)	日本方言の活格性に関する基礎的研究	坂井美日
2016-19	若手研究(B)	琉球諸語の記述と復興研究のためのプラットフォーム基盤構築研究	山田真寛
2016	若手研究(B)	歴史コーパスに基づく中世・近世語の複合辞および連語の研究	渡辺由貴
2016-17	若手研究(B)	『色葉字類抄』を中心とする本邦国語辞書収録語彙の通時的研究	藤本灯
2016-17	研究活動 スタート支援	対話コーパスに基づく指示場面における発話機能の実証的研究	川端良子
2017-21	基盤研究(A)	日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション	浅原正幸
2017-18	基盤研究(B)	移動表現による言語類型：実験的統一課題による通言語的研究	松本曜

2017-19	基盤研究(B)	リアルタイム MRI および WAVE データによる調音音声学の精緻化	前川喜久雄
2017-20	基盤研究(B)	言語使用と非言語的認知操作における空間指示枠の相関についての実験的研究	田窪行則
2017-19	基盤研究(C)	地域的多様性の教材としての参加型方言データベースの構築	井上文子
2017-19	基盤研究(C)	アカデミック・ライティング技術の習得を目指したピア・レスポンスの実証的研究	烏日哲
2017-19	基盤研究(C)	ビデオアノテーションを利用した協同型実習活動支援システムに関する研究	山口昌也
2017-19	基盤研究(C)	ハンガリー語の周辺方言における結合の複数に関する調査研究	大島一
2017-18	基盤研究(C)	ノートの筆記過程の分析に基づく日本語学習者の講義理解過程の実証的研究	田中啓行
2017-19	基盤研究(C)	日本語学習者の小説読解困難点に関する実証的研究と読解支援教材開発のための研究	藤原未雪
2017-19	基盤研究(C)	学術的文書作成のための文体差のある語の計量的分析	柏野和佳子
2017-19	基盤研究(C)	近代小説 100 冊における外来語の研究	飛田良文
2017-20	挑戦的研究(萌芽)	疫学的統計手法と人工知能学の融合活用による敬語の変化予測研究	横山詔一
2017-19	挑戦的研究(萌芽)	促音（重子音）に関する学際的・国際的共同研究のためのネットワーク形成	窪蘭晴夫
2017-19	挑戦的研究(萌芽)	漢文訓点資料の国際文書構造記述による共有化と書き下し文自動作成のための基礎研究	高田智和
2017-19	挑戦的研究(萌芽)	日本語研究用オントロジーの設計と開発	山崎誠
2017-19	挑戦的研究(萌芽)	クラウドソーシングを用いたビジネス文書のわかりやすさの言語学的研究	石黒圭
2017-19	挑戦的研究(萌芽)	日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究	野田尚史
2017-19	若手研究(B)	会話における対人関係の実証的研究：自然会話データを用いて	臼田泰如
2017	若手研究(B)	消滅の危機に瀕した八重山語諸方言の音声・例文付き辞書作成	原田走一郎
2017-20	若手研究(B)	音韻対立の消失・出現・転換の過程における音声産出・知覚機構の解明	松井真雪
2017-18	若手研究(B)	語構造情報を付与した狂言コーパスによる語形成の歴史的研究	村山実和子
2017-19	若手研究(B)	宮古語諸方言の言語記録のための基礎的研究とデータ収集	林由華
2017-18	研究活動 スタート支援	構成的アプローチに基づく日本語否定極性表現の研究	井戸美里
2017-18	研究活動 スタート支援	津軽方言の談話資料を用いた複数種の対格の使用動機の究明	大槻知世
2017-18	研究活動 スタート支援	明治期法律用語の成立と展開	南雲千香子
2018-21	基盤研究(A)	語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的分析	宇佐美まゆみ
2018-20	基盤研究(B)	訓点資料訓読文コーパスの構築と古代日本語史研究の革新	高田智和
2018-21	基盤研究(B)	地域社会の共在的記録に基づくコミュニケーションと記憶の活性化	小磯花絵
2018	基盤研究(C)	上代語コーパスへの統語・意味情報アノテーション	スティーブン・ライト・ホーン
2018-22	基盤研究(C)	文体分析を目的としたコーパスの文書情報拡張及びその利用	加藤祥
2018-21	基盤研究(C)	日本語の母音無声化における心内処理に関する基礎的研究	吉田夏也
2018-20	基盤研究(C)	名詞句の飽和性と意味機能との相互関係についての理論的・実証的研究	西川賢哉
2018-20	基盤研究(C)	自発会話コーパスを用いた「会話の間合い」に関わる音声・言語特徴の解明	石本祐一

2018-20	基盤研究(C)	日本語と英語のパラレルコーパスを用いた言い淀みの対照言語学的研究	渡辺美知子
2018-20	基盤研究(C)	中国人日本語学習者の言語習得過程の実証的研究と教育的資源の提供	布施悠子
2018-19	基盤研究(C)	中国人日本語学習者のビジネス・コミュニケーションの困難点の解明	蒙韞
2018-20	挑戦的研究(萌芽)	コミュニケーション能力を高める自然会話教材の高度共有化：共同体の構築に向けて	宇佐美まゆみ
2018-20	挑戦的研究(萌芽)	コーパスからの比喻表現収集とその分析	浅原正幸
2018-21	若手研究	日本語とりたてて詞の複合における否定呼応現象の統語と意味	井戸美里
2018-20	若手研究	危機言語コミュニティにおける言語生態系と言語移行の関係：琉球沖永良部語を事例に	横山晶子
2018-21	若手研究	日本語諸方言におけるイントネーションの対照研究	佐藤久美子
2018-21	若手研究	奄美大島宇検村内の隣接する多地点方言間の体系的差異の解明	新永悠人
2018-20	若手研究	紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言アクセント類型論の形成	平田秀
2018-21	若手研究	日本の消滅危機言語を対象とした大量の言語資料収集・蓄積方法に関する基礎研究	麻生玲子
2018-19	研究活動 スタート支援	精緻な文字表記情報を持つ近代新聞コーパスの構築による表記・文体変遷の計量的研究	間淵洋子
2018-19	研究活動 スタート支援	日本語教育支援のための中学校社会科教科書の言語的困難点に関する基礎的研究	宮部真由美
2018-19	研究活動 スタート支援	淡路方言の系統の解明と西日本方言の区画の再検討	中澤光平
2019-23	基盤研究(A)	消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築	窪蘭晴夫
2019-22	基盤研究(A)	昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究	小木曾智信
2019-23	基盤研究(A)	基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究	野山広
2019-22	基盤研究(B)	空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究	松本曜
2019-20	基盤研究(C)	汎用的な範疇文法ツリーバンクの構築	窪田悠介
2019-21	基盤研究(C)	シソーラスの整備・拡張のための分類基準の作成と活用	山崎誠
2019	基盤研究(C)	いきいきとした介護のオノマトペ使用のための学習映像教材の開発に関する研究	神村初美
2019-21	基盤研究(C)	多義語に対するプロトタイプ義の量的分析：クラウドソーシングによる大規模調査	西内沙恵
2019-21	基盤研究(C)	北海道北見市常呂町岐阜方言の方言敬語に関する調査研究	朝日祥之
2019-22	基盤研究(C)	シベリア先住民族諸言語のテキストコーパス構築と文法及びその構造的変化に関する研究	長崎郁
2019-21	基盤研究(C)	首都圏における言語資料の高密度収集と言語動態分析	鎌水兼貴
2019-21	挑戦的研究(開拓)	日本語コーパスに対する情報付与を核としたオープンサイエンス推進環境の構築	小木曾智信
2019-20	挑戦的研究(萌芽)	Exploring the re-emergence of grammar: The Russian new vocative in an interplay of morphology, phonology and phonetics	松井真雪
2019-20	挑戦的研究(萌芽)	定量的分析による条件異音存立基盤の再検討：音韻論スリム化の試み	前川喜久雄
2019-22	若手研究	南琉球宮古語の語彙体系の多様性を探る：通方言的な音声付の語彙データベースの構築	セリック・ケナン
2019-22	若手研究	アクセント情報付き大規模単語データベースの構築	岡照晃
2019-21	若手研究	ハワイ日系人の戦時抑留体験をめぐる記憶のポリティクス	宮崎早季
2019-21	若手研究	超音波診断装置を用いた日本語学習者における撥音の調音運動の研究	溝口愛
2019-22	若手研究	日本語諸方言の準体に関する類型論的研究	坂井美日

2019-21	若手研究	多様な場面における参照の相互認識達成のための方略の研究	川端良子
2019-22	若手研究	日常対話コーパスにおける述語項構造アノテーションの作成と分析	大村舞
2019-22	若手研究	青森県津軽方言の文末イントネーションの記述的研究	大槻知世
2019-20	若手研究	日本語・琉球語における情報構造と述語類型	中川奈津子
2019-22	若手研究	明治期英語教科書の翻訳本データベース化による欧文の直訳的な表現の研究	八木下孝雄
2019-21	若手研究	蘭語学・英語学における文法用語の基礎的研究	服部紀子
2019-22	若手研究	コーパスを用いた近世読本のルビと漢字表記の研究	片山久留美
2019-22	若手研究	属性叙述を含めた包括的なテンス・アスペクト体系の解明	鈴木彩香
2019-20	新学術領域研究(研究領域提案型)	南琉球八重島諸語における伝播過程の解明と言語系統樹の構築	麻生玲子
2019-20	新学術領域研究(研究領域提案型)	日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて	林由華

創立以降の刊行物一覧（2019 年 3 月現在）

国立国語研究所年報		
1～45（昭和 24 年度～平成 5 年度）		秀英出版

国語年鑑		
昭和 29 年版～2007 年（平成 19）版		秀英出版・1996 年版以降大日本図書

日本語教育年鑑	発行	刊行年月
2000 年版～2008 年版	くろしお出版	2002.6-09.3

国立国語研究所報告（創立～2009 年 9 月）

番号	題目	発行	刊行年月
1	八丈島の言語調査	秀英出版	1950.3
2	言語生活の実態：白河市および付近の農村における	〃	1951.4
3	現代語の助詞・助動詞：用法と実例	〃	1951.8
4	婦人雑誌の用語：現代語の語彙調査	〃	1953.3
5	地域社会の言語生活：鶴岡における実態調査	〃	1953.3
6	少年と新聞：小学生・中学生の新聞への接近と理解	〃	1954.3
7	入門期の言語能力	〃	1954.3
8	談話語の実態	〃	1955.3
9	読みの実験的研究：音読にあらわれた読みあやまりの分析	〃	1955.3
10	低学年の読み書き能力	〃	1956.3
11	敬語と敬語意識	〃	1957.3
12	総合雑誌の用語（前編）：現代語の語彙調査	〃	1957.3
13	総合雑誌の用語（後編）：現代語の語彙調査	〃	1958.2
14	中学年の読み書き能力	〃	1958.3
15	明治初期の新聞の用語	〃	1959.3
16	日本方言の記述的研究	明治書院	1959.11
17	高学年の読み書き能力	秀英出版	1960.3
18	話しことばの文型（1）：対話資料による研究	〃	1960.3
19	総合雑誌の用字	〃	1960.11
20	同音語の研究	〃	1961.3
21	現代雑誌九十種の用語用字（第 1 分冊，総記，語彙	〃	1962.3
22	現代雑誌九十種の用語用字（第 2 分冊，漢字表）	〃	1963.3
23	話しことばの文型（2）：独話資料による研究	〃	1963.3
24	横組みの字形に関する研究	〃	1964.3

25	現代雑誌九十種の用語用字（第3分冊，分析）	秀英出版	1964.3
26	小学生の言語能力の発達	明治図書	1964.10
27	共通語化の過程：北海道における親子三代のことば	秀英出版	1965.3
28	類義語の研究	〃	1965.3
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	1966.3
30-1	日本言語地図 第1集	大蔵省印刷局	1966.3
	日本言語地図〈縮刷版〉	〃	1986.10
30-2	日本言語地図 第2集	〃	1967.3
	日本言語地図〈縮刷版〉	〃	1982.8
30-3	日本言語地図 第3集	〃	1968.3
	日本言語地図〈縮刷版〉	〃	1983.6
30-4	日本言語地図 第4集	〃	1970.3
	日本言語地図〈縮刷版〉	〃	1984.2
30-5	日本言語地図 第5集	〃	1972.3
	日本言語地図〈縮刷版〉	〃	1985.3
30-6	日本言語地図 第6集	〃	1974.3
	日本言語地図〈縮刷版〉	〃	1985.3
31	電子計算機による国語研究	秀英出版	1968.3
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究（1）： 親族語彙と社会構造	〃	1968.3
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	1968.12
34	電子計算機による国語研究（Ⅱ）：新聞の用語用字調 査の処理組織	〃	1969.3
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究（2）： マキ・マケと親族呼称	〃	1970.2
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	1971.3
37	電子計算機による新聞の語彙調査	〃	1970.3
38	電子計算機による新聞の語彙調査（Ⅱ）	〃	1971.3
39	電子計算機による国語研究（Ⅲ）	〃	1971.3
40	送りがな意識の調査	〃	1971.3
41	待遇表現の実態：松江24時間調査資料から	〃	1971.3
42	電子計算機による新聞の語彙調査（Ⅲ）	〃	1972.3
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	1972.3
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	1972.3
45	幼児の読み書き能力	東京書籍	1972.3
46	電子計算機による国語研究（Ⅳ）	秀英出版	1972.3
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究（3）： 性向語彙と価値観	〃	1973.2
48	電子計算機による新聞の語彙調査（Ⅳ）	〃	1973.3
49	電子計算機による国語研究（Ⅴ）	〃	1973.3

50	幼児の文構造の発達：3歳～6歳児の場合	秀英出版	1973.3
51	電子計算機による国語研究（VI）	〃	1974.3
52	地域社会の言語生活：鶴岡における20年前との比較	〃	1975.3
53	言語使用の変遷（1）：福島県北部地域の面接調査	〃	1974.3
54	電子計算機による国語研究（VII）	〃	1975.3
55	幼児語の形態論的な分析：動詞・形容詞・述語名詞	〃	1975.2
56	現代新聞の漢字	〃	1976.3
57	比喩表現の理論と分類	〃	1977.2
58	幼児の文法能力	東京書籍	1977.3
59	電子計算機による国語研究（VIII）	秀英出版	1977.3
60	X線映画資料による母音の発音の研究：フォネーム研究序説	〃	1978.3
61	電子計算機による国語研究（IX）	〃	1978.3
62	研究報告集-1-	〃	1978.3
63	児童の表現力と作文	東京書籍	1978.7
64	各地方言親族語彙の言語社会学的研究（1）	秀英出版	1979.1
65	研究報告集-2-	〃	1980.3
66	幼児の語彙能力	東京書籍	1980.3
67	電子計算機による国語研究（X）	秀英出版	1980.3
68	専門語の諸問題	〃	1981.3
69	幼児・児童の連想語彙表	東京書籍	1981.3
70-1	大都市の言語生活（分析編）	三省堂	1981.3
70-2	大都市の言語生活（資料編）	〃	1981.3
71	研究報告集-3-	秀英出版	1982.3
72	幼児・児童の概念形成と言語	〃	1982.3
73	企業の中の敬語	三省堂	1982.3
74	研究報告集-4-	秀英出版	1983.3
75	現代表記のゆれ	〃	1983.3
76	高校教科書の語彙調査	〃	1983.3
77	敬語と敬語意識：岡崎における20年前との比較	三省堂	1983.3
78	日本語教育のための基本語彙調査	秀英出版	1984.3
79	研究報告集-5-	〃	1984.3
80	言語行動における日独比較	三省堂	1984.3
81	高校教科書の語彙調査Ⅱ	秀英出版	1984.3
82	現代日本語動詞のアスペクトとテンス	〃	1985.1
83	研究報告集-6-	〃	1985.3
84	方言の諸相：『日本言語地図』検証調査報告	三省堂	1985.3
85	研究報告集-7-	秀英出版	1986.3
86	社会変化と敬語行動の標準	〃	1986.3

87	中学校教科書の語彙調査	秀英出版	1986.3
88	日独仏西基本語彙対照表	〃	1986.3
89	雑誌用語の変遷	〃	1987.3
90	研究報告集-8-	〃	1987.3
91	中学校教科書の語彙調査Ⅱ	〃	1987.3
92	談話行動の諸相：座談資料の分析	三省堂	1987.3
93	方言研究法の探索	秀英出版	1988.3
94	研究報告集-9-	〃	1988.3
95	児童・生徒の常用漢字の習得	東京書籍	1988.3
96	研究報告集-10-	秀英出版	1989.3
97-1	方言文法全国地図 1 助詞編	大蔵省印刷局	1989.3
97-2	方言文法全国地図 2 活用編Ⅰ	〃	1991.3
97-3	方言文法全国地図 3 活用編Ⅱ	〃	1993.3
98	児童の作文使用語彙	東京書籍	1989.3
99	高校・中学校教科書の語彙調査 分析編	秀英出版	1989.3
100	日本語の母音・子音・音節	〃	1990.3
101	研究報告集-11-	〃	1990.3
102	場面と場面意識	三省堂	1990.3
103	研究報告集-12-	秀英出版	1991.3
104	研究報告集-13-	〃	1992.3
105	研究報告集-14-	〃	1993.3
106	常用漢字の習得と指導 付・分類学習漢字表	東京書籍	1994.3
107	研究報告集-15-	秀英出版	1994.3
108	日本語とスペイン語 (1)	くろしお出版	1994.3
109-1	鶴岡方言の記述的研究：第3次鶴岡調査報告1	秀英出版	1994.8
110	研究報告集-16-	〃	1995.3
111	マイペンライ：タイ人の言語行動を特徴づける言葉とその文化的背景についての考察 その1	くろしお出版	1995.3
112	テレビ放送の語彙調査Ⅰ 方法・標本一覧・分析	秀英出版	1995.12
113	日本語における表層格と深層格の対応関係	三省堂	1997.3
114	テレビ放送の語彙調査Ⅱ 語彙表	大日本図書	1997.3
115	テレビ放送の語彙調査Ⅲ 計量的分析	〃	1994.4
116	日本語基本語彙：文献解題と研究	明治書院	2000.7
117	教育基本語彙の基本的研究：教育基本語彙データベースの作成	国立国語研究所	2001.6
118	学校の中の敬語1 アンケート調査編	三省堂	2002.4
119	現代雑誌の漢字調査	国立国語研究所	2002.3
120	学校の中の敬語2 面接調査編	三省堂	2003.6
121	現代雑誌の語彙調査：1994年発行70誌	国立国語研究所	2005.3

122	雑誌『太陽』による確立期現代語の研究：『太陽コーパス』研究論文集	博文館新社	2005.3
123	言語行動における「配慮」の諸相	くろしお出版	2006.3
124	日本語話し言葉コーパスの構築法	国立国語研究所	2006.3
125	現代雑誌の表記：1994 年発行 70 誌	〃	2006.3
126	公共媒体の外来語：「外来語」言い換え提案を支える調査研究	〃	2007.3
127	教育基本語彙の基本的研究 増補改訂版	明治書院	2009.2
128	日本語教育における学習項目一覧と段階的目標基準の開発：報告書	国立国語研究所	2009.9
129	日本語学習者による言語運用とその評価をめぐる調査研究：「日本語能力の評価基準・項目の開発」成果報告書	〃	2009.9

報告書番号のない研究成果（2009 年 9 月まで）

題目	発行	刊行年月
高校生と新聞（新聞協会と共編）	秀英出版	1956.6
青年とマス・コミュニケーション（新聞協会と共編）	金沢書店	1956.3
日本語教育の概観	国立国語研究所	1976.11
基礎日本語活用辞典インドネシア語版	〃	1988.3
白書、広報紙等における外来語の実態（本編，資料編）	〃	2000.5
現代語複合辞用例集	〃	2001.3
日本語の文字・表記：研究会報告論集	〃	2002.3
定着度による外来語分類の試み	〃	2002.3
汎用電子情報交換環境整備プログラム成果報告書（日本規格協会，情報処理学会との共編）	日本規格協会	2003.3-09.3
行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査（自治体調査）	国立国語研究所	2004.3
日本語ブックレット 2002	〃	2004.3
外来語に関する意識調査（全国調査）	〃	2004.3
外来語に関する意識調査Ⅱ（全国調査）	〃	2005.3
現代雑誌の漢字調査（頻度表）	〃	2005.10
『現代雑誌の語彙調査』に基づく漢字音訓一覧	〃	2005.11
話し言葉における敬語形式の出現実態	〃	2005.11
世界の言語テスト	くろしお出版	2006.3
外来語言い換え手引き：分かりやすく伝える	ぎょうせい	2006.6
『現代雑誌の語彙調査』に基づく表記一覧	国立国語研究所	2006.11
「国語力観」に関する全国調査	〃	2006.12
地域社会の言語生活：鶴岡における 20 年間隔 3 回の継続調査	〃	2007.3
病院の言葉を分かりやすく：工夫の提案	勁草書房	2009.3
「国語力観」に関する全国調査 研究発表と分析	国立国語研究所	2009.8

国立国語研究所共同研究報告書（2009 年 10 月以降）

番号	題目	発行	刊行年月
10-01	全国方言準備調査結果データ集.	国立国語研究所	2011.3
10-02	方言メール調査報告書	〃	2011.3
10-03	「事前研究」報告書.	〃	2011.3
11-01	喜界島方言調査報告書	〃	2011.8
11-02	仮名文字表記による喜界島方言調査データ集	〃	2012.3
12-01	北海道と東北・新潟の 30 歳代から 50 歳代における方言の地理的勢力分布	〃	2012.7
12-02	南琉球宮古方言調査報告書	〃	2012.8
12-03	近代語コーパス設計のための文献言語研究成果報告書	〃	2012.10
12-04	全国若者語調査地図集	〃	2013.3
12-05	大規模方言データの多角的分析成果報告書：言語地図と方言談話資料	〃	2013.3
12-06	テキストにおける語彙の分布と文章構造成果報告書	〃	2013.3
12-07	日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成	〃	2013.3
12-08	訓点資料の構造化記述成果報告書	〃	2013.3
13-01	形容詞節と体言締め文:名詞の文法化：人魚構文の研究	〃	2013.4
13-02	首都圏言語研究の視野：首都圏の言語の実態と動向に関する研究成果報告書	〃	2013.4
13-02 別冊	首都圏の言語に関する研究文献目録（稿）	〃	2014.2
13-03	近現代日本語における新語・新用法の研究	〃	2014.3
13-04	方言談話の地域差と世代差に関する研究：成果報告書	〃	2014.3

2009 年 10 月以降刊行物（プロジェクトの成果及び所員の編著書）

題目	発行	刊行年月
言語のタイポロジー：認知類型論のアプローチ	研究社	2009.10
自動詞・他動詞の対照	くろしお出版	2010.6
レキシコンフォーラム No.5	ひつじ書房	2010.6
常用漢字・送り仮名・現代仮名遣い・筆順 例解辞典（改訂新版）	ぎょうせい	2010.7
数字とことばの不思議な話	岩波書店	2011.6
図解 日本の語彙	三省堂	2011.9
日本語文法の歴史と変化	くろしお出版	2011.11
日英対照 名詞の意味と構文	大修館書店	2011.11
Grammatical Change : Origins, Nature, Outcomes	Oxford U. P.	2011.11
日中理論言語学の新展望 1 統語構造	くろしお出版	2011.12
A Grammar of Warrongo	De Gruyter Mouton	2011.12
今帰仁方言アクセントの諸相	ココ出版	2012.2

文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究報告書	国立国語研究所	2011.2
米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻 桐壺～藤裏葉	〃	2011.3
属性叙述の世界	くろしお出版	2012.3
東北方言オノマトペ（擬音語・擬態語）用例集：青森県・岩手県・宮城県・福島県〔最終版〕	国立国語研究所	2012.3
マリアナ諸島に残存する日本語：その中間言語的特徴	明治書院	2012.4
日中理論言語学の新展望 2 意味と構文	くろしお出版	2012.4
日本語教育のためのコミュニケーション研究	〃	2012.5
日中理論言語学の新展望 3 語彙と品詞	〃	2012.6
日本語アクセント入門	三省堂	2012.9
サハリンに残された日本語樺太方言	明治書院	2012.10
外来語研究の新展開	おうふう	2012.10
シリーズ社会言語科学 1 「配慮」はどのように示されるか	ひつじ書房	2012.10
Lingua 122 巻 13 号 特集「ピッチアクセント体系」	Elsevier	2012.10
A Frequency Dictionary of Japanese: Core Vocabulary for Learners	Routledge	2013.1
米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文 句宮～夢浮橋	国立国語研究所	2013.3
レキシコンフォーラム No.6	ひつじ書房	2013.6
10分でわかる！四字熟語 なぜだろうなぜかしら	実業之日本社	2013.6
ビジネスコミュニケーションのためのケース学習 職場のダイバーシティで学び合う【教材編】	ココ出版	2013.7
Five Levels in Clause Linkage	国立国語研究所	2013.8
方言学入門	三省堂	2013.8
そうだったんだ！日本語：近代書き言葉はこうしてできた	岩波書店	2013.8
よんだ 100 人の気持ちがよくわかる！百人一首 なぜだろうなぜかしら	実業之日本社	2013.8
The Japanese Language in Palau	国立国語研究所	2013.9
現代日本語の動態研究	おうふう	2013.10
消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：八丈方言調査報告書	国立国語研究所	2013.10
Journal of East Asian Linguistics, Volume 22, Issue 4, November 2013, Special issue on Japanese Geminate Obstruents	Springer	2013.11
アジアの人びとの自然観をたどる	勉誠出版	2013.11
HUMAN—知の森へのいざない vol. 5	平凡社	2013.12
そうだったんだ！日本語：じゃっで方言なおもしろとか	岩波書店	2013.12
ハローキティと楽しく学ぶ漢検 3 級 基礎も！検定対策も！	実業之日本社	2013.12
ハローキティと楽しく学ぶ漢検 4 級 基礎も！検定対策も！	〃	2013.12
漢検 3 級らくらく合格一直線 基礎も検定対策もこれ 1 冊で！	〃	2013.12
漢検 4 級らくらく合格一直線 基礎も検定対策もこれ 1 冊で！	〃	2013.12
三省堂国語辞典 第七版	三省堂	2014.1
複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて	ひつじ書房	2013.12
日本語複文構文の研究	〃	2014.2

日本語教育学の新潮流 7 「非母語話者の日本語」は、どのように評価されているか 評価プロセスの多様性をとらえることの意義	ココ出版	2014.2
首都圏方言アクセントの基礎的研究	おうふう	2014.2
C-JAS 構築に関する報告書 (Corpus of Japanese as a second Language)	国立国語研究所	2014.3
人間文化研究機構 連携研究「大規模災害と人間文化研究」公開シンポジウム報告書	人間文化研究機構	2014.3
日本語文字・表記の難しさとおもしろさ	彩流社	2014.3
「うまい！」と言わせる文章の裏ワザ	河出書房新社	2014.4
日本語の配慮表現の多様性 歴史的変化と地理的・社会的変異	くろしお出版	2014.6
交際型日语教学语法研究	外语教学与研究出版社	2014.9
話し言葉と書き言葉の接点	ひつじ書房	2014.10
日本語教師のための 実践・作文指導	くろしお出版	2014.10
日本語を書くトレーニング 第2版	ひつじ書房	2014.12
音声は何を伝えているか：感情・パラ言語情報・個人性の音声科学	コロナ社	2014.12
心を引き寄せる大人の伝え方集中講義	サンクチュアリ出版	2015.2
災害に学ぶ：文化資源の保全と再生	勉誠出版	2015.3
アメリカ・ハワイ日系社会の歴史と言語文化	東京堂出版	2015.3
アイヌ語研究の諸問題	北海道出版企画センター	2015.3
甕島里方言記述文法書	国立国語研究所	2015.3
大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集：SP 盤レコード文字化資料	日外アソシエーツ	2015.4
Laboratory Phonology, Vol.6, No.3-4, (Special issue: Corpus-based approaches to the phonological analysis of speech)	De Gruyter Mouton	2015.10
コーパスと日本語史研究	ひつじ書房	2015.10
有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照から見えてくるもの	くろしお出版	2015.12
日本語・マラーティー語 基本動詞辞典（改訂版）	Rajhans Prakashan	2015.12
シリーズ日本語史 1 音韻史	岩波書店	2016.1
A Functional Account of Marathi's Voice Phenomena: Passives and Causatives in Marathi	Brill	2016.2
SP 盤演説レコードがひらく日本語研究	笠間書院	2016.3
椎葉村方言語彙集（中間報告）	国立国語研究所	2016.3
尾前調査班 中間報告書：宮崎県椎葉村尾前方言簡易語彙集と文法概説	〃	2016.3
敬語表現の成人後採用：岡崎における半世紀の変化（日本語の大規模経年調査に関する総合的研究）	〃	2016.3
海外連携による日本語学習者コーパスの構築：研究と構築の有機的な繋がりに基づいて：I-JAS 構築に関する最終報告書 (International Corpus of Japanese As a Second Language)	〃	2016.3

消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：出雲方言調査報告書	国立国語研究所	2016.3
消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：与論島・沖永良部島方言調査報告書	〃	2016.3
第4回鶴岡市における言語調査報告書 発展的調査編	〃	2016.3
はじめて学ぶ方言学 ことばの多様性をとらえる 28 章	ミネルヴァ 書房	2016.3
レキシコンフォーラム No. 7	ひつじ書房	2016.5
語彙力を鍛える：量と質を高めるトレーニング	光文社	2016.5
心ときめくオキテ破りの日本語教授法	くろしお出版	2016.5
Sequential Voicing in Japanese: Papers from the NINJAL Rendaku Project	John Benjamins	2016.6
Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond	De Gruyter Mouton	2016.7
日本語コーパス活用入門：NINJAL-LWP 実践ガイド	大修館書店	2016.7
書きたいことがすらすら書ける！ 「接続詞」の技術	実務教育出版	2016.7
ことばの地理学：方言はなぜそこにあるのか	大修館書店	2016.9
漢字字体史研究 二：字体と漢字情報	勉誠出版	2016.11
新日本言語地図：分布図で見渡す方言の世界	朝倉書店	2016.12
新しい地域文化研究の可能性を求めて	人間文化研究機構	2017.2
テキストにおける語彙的結束性の計量的研究	和泉書院	2017.2
山田孝雄著『日本文体の変遷』本文と解説	勉誠出版	2017.2
首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査 2010-2016 報告書	国立国語研究所	2017.3
消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：久米島方言調査報告書	〃	2017.3
一日の会話行動に関する調査報告	〃	2017.3
The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants	Oxford U.P.	2017.4
〈アクティブ・ラーニング対応〉日本語を分析するレッスン	大修館書店	2017.4
空間と時間の中の方言：ことばの変化は方言地図にどう現れるか	朝倉書店	2017.5
オノマトペの謎：ピカチュウからモフモフまで	岩波書店	2017.5
椎葉村方言語彙集中間報告書：梅尾・不土野編	国立国語研究所	2017.5
文章予測：読解力の鍛え方	KADOKAWA	2017.9
形容詞を使わない大人の文章表現力	日本実業出版社	2017.11
連濁の研究：国立国語研究所プロジェクト論文選集	開拓社	2017.11
大人のための言い換え力	NHK 出版新書	2017.12
通じない日本語：世代差・地域差からみる言葉の不思議	平凡社	2017.12
時間の流れと文章の組み立て林言語学の再解釈	ひつじ書房	2017.12
わかりやすく書ける作文シラバス	くろしお出版	2017.12
日本語語彙的複合動詞の意味と体系：コンストラクション形態論とフレーム意味論	ひつじ書房	2018.2

くいんだしあんびんだんぎ	沖縄時事出版	2018.2
北海道方言の地理的・年齢的勢力分布と動態：調査データグラフ集：若年層（高校生）と壮年層（30歳代～50歳代）での男女別使用	国立国語研究所	2018.3
北海道方言の地理的・年齢的勢力分布と動態（2）：若年層（高校生）と壮年層（30歳代～50歳代）での男女別使用：調査データグラフ集語彙・語法編	〃	2018.3
Tonal Change and Neutralization.	De Gruyter Mouton	2018.3
日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成：石川県白峰方言調査報告書	国立国語研究所	2018.3
日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成：島根県隠岐の島方言調査報告書	〃	2018.3
与那国の人とことば 2017	言語復興の港	2018.3
『日本語日常会話コーパス』の構築：個人密着法に基づく会話の収録	国立国語研究所	2018.3
形式語研究の現在	和泉書院	2018.5
どうすれば協働学習がうまくいくか：失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学	ココ出版	2018.6
豊かな語彙力を育てる：「言葉の感度を高める教育」へのヒント	〃	2018.6
シリーズ社会言語科学 2 社会言語科学の源流を追う	ひつじ書房	2018.9
英語学を英語授業に活かす：市河賞の精神（こころ）を受け継いで	開拓社	2018.9
小学生から身につけたい 一生役立つ語彙力の育て方	KADOKAWA	2018.10
鹿児島県甕島方言からみる文法の諸相	くろしお出版	2019.2
『日本語日常会話コーパス』モニター公開版 コーパスの設計と特徴	国立国語研究所	2019.3
消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：愛知県木曽川方言調査報告書	〃	2019.3

国立国語研究所プロジェクト選書

番号	題目	発行	刊行年月
1	新聞電子メディアの漢字：朝日新聞 CD-ROM による漢字頻度表	三省堂	1998.7
2	現代日本の異体字：漢字環境学序説	〃	2003.11

国語研プロジェクトレビュー

国語研プロジェクトレビュー第1巻～第6巻	国立国語研究所	2011.7-16.6
----------------------	---------	-------------

国立国語研究所研究報告集

研究報告集 1～16	秀英出版	1978.5-95.4
国立国語研究所研究報告集 17	〃	1996.4

国立国語研究所研究論集

国立国語研究所論集 1～16（継続中）	国立国語研究所	2011.5-18.10
---------------------	---------	--------------

日本語科学

日本語科学 1～25	国書刊行会	1997.4-09.4
------------	-------	-------------

日本語教育論集

日本語教育論集 1～25	国立国語研究所	1984.10-09.3
--------------	---------	--------------

国立国語研究所資料集

番号	題目	発行	刊行年月
1	国語関係刊行書目：昭和 17 年～昭和 24 年	秀英出版	1950.3
2	語彙調査：現代新聞用語の一例	〃	1952.3
3	送り仮名法資料集	〃	1952.3
4	明治以降国語学関係刊行書目	〃	1955.6
5	沖縄語辞典	大蔵省印刷局	1963.4
6	分類語彙表	秀英出版	1964.3
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1971.3
8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	〃	1971.3
9	牛店雑談安愚楽鍋用語索引	〃	1974.3
10-1 ～7	方言談話資料	〃	1978.3- 87.8
11	日本言語地図語形索引	大蔵省印刷局	1980.3
12	日本方言親族語彙資料集成	秀英出版	1989.3
13-1 ～20	全国方言談話データベース：日本のふるさとことば集成	国書刊行会	2002.2-08.7
14	分類語彙表増補改訂版	大日本図書	2004.1
15	太陽コーパス：雑誌『太陽』日本語データベース	博文館新社	2005.3

国立国語研究所言語処理データ集

番号	題目	発行	刊行年月
1	高校教科書 文脈付き用語索引	日本マイクロ	1985.3
2	話しことば 文脈付き用語索引 (1)：『言語生活』	〃	1987.3
3	現代雑誌九十種の用語用字／五十音順語彙表・採集カード	東京都板橋福祉工場	1987.10
4	話しことば 文脈付き用語索引 (2)	日本マイクロ	1990.3
5	『分類語彙表』〔フロッピー版〕	秀英出版	1993.10
6	『中学校・高校教科書の語彙調査』〔フロッピー版〕	〃	1994.3
7	『現代雑誌九十種の用語用字全語彙・表記』	〃	1997.9

8	テレビ放送の語彙調査 [語彙表] CD-ROM 版	国立国語研究所/ 大日本図書	2001
---	------------------------------	-------------------	------

講座日本語コーパス

番号	題目	発行	刊行年月
1	コーパス入門	朝倉書店	2013.7
2	書き言葉コーパス：設計と構築	〃	2014.12
3	話し言葉コーパス：設計と構築	〃	2015.2
4	コーパスと国語教育	〃	2015.12
5	コーパスと日本語教育	〃	2016.3
6	コーパスと日本語学	〃	2014.12
7	コーパスと辞書	〃	2019.3
8	コーパスと自然言語処理	〃	2017.2

Handbooks of Japanese Language and Linguistics

番号	題目	発行	刊行年月
2	Handbook of Japanese phonetics and phonology	De Gruyter Mouton	2015.2
3	Handbook of Japanese lexicon and word formation	〃	2016.1
4	Handbook of Japanese syntax	〃	2017.10
6	Handbook of Japanese contrastive linguistics	〃	2018.2
9	Handbook of Japanese psycholinguistics	〃	2015.6
10	Handbook of Japanese applied linguistics	〃	2016.1
11	Handbook of the Ryukyuan languages : history, structure, and use	〃	2015.1

国立国語研究所国語辞典編集資料

番号	題目	発行	刊行年月
1	国定読本用語総覧 1 第 1 期 [あ～ん]『尋常小学読本』明治 37 年度以降使用	三省堂	1985.11
2	国定読本用語総覧 2 第 2 期 [あ～て]『尋常小学読本』明治 43 年度以降使用	〃	1987.3
3	国定読本用語総覧 3 第 2 期 [と～ん]『尋常小学読本』明治 43 年度以降使用	〃	1988.3
4	国定読本用語総覧 4 第 3 期 [あ～て]『尋常小学国語読本』大正 7 年度以降使用	〃	1989.8
5	国定読本用語総覧 5 第 3 期 [と～ん]『尋常小学国語読本』大正 7 年度以降使用	〃	1990.6
6	国定読本用語総覧 6 第 4 期 [あ～つ]『小学国語読本』昭和 8 年度以降使用	〃	1991.8
7	国定読本用語総覧 7 第 4 期 [て～ん]『小学国語読本』昭和 8 年度以降使用	〃	1992.6
8	国定読本用語総覧 8 第 5 期 [あ～つ]『ヨミカタ』『よみかた』『初等科国語』昭和 16 年度以降使用	〃	1993.7

9	国定読本用語総覧 9 第 5 期 [て～ん]『ヨミカタ』 『よみかた』『初等科国語』昭和 16 年度以降使用	三省堂	1994.7
10	国定読本用語総覧 10 第 6 期 [あ～つ]『こくご』『国語』昭和 22 年度以降使用	〃	1995.6
11	国定読本用語総覧 11 第 6 期 [て～ん]『こくご』『国語』昭和 22 年度以降使用	〃	1996.6
12	国定読本用語総覧 12 総集編 国定読本用語総覧 CD-ROM 版	〃	1997.6 1997.12

幼児のことば資料

幼児のことば資料 (1) ～ (6)	秀英出版	1981.3-83.2
--------------------	------	-------------

ことばの研究

ことばの研究 第 1 集～第 6 集	秀英出版	1959.2-74.3
--------------------	------	-------------

日本語と外国語の対照研究シリーズ

番号	題目	発行	刊行年月
1	日本語とスペイン語 (1)	くろしお出版	1994.3
2	マイペンライ: タイ人の言語行動を特徴づける言葉とその文化的背景についての考察 その 1	〃	1995.3
3	日本語とポルトガル語 (1)	〃	1996.12
4	日本語と朝鮮語 (上) (下)	〃	1997.3
5	日本語とスペイン語 (2)	〃	1997.3
6	日本語とスペイン語 (3)	〃	2000.3
7	日本語とポルトガル語 (2): ブラジル人と日本人との接触場面	〃	2000.3
8	マイペンライ (2): タイ人の言語行動を特徴づける言葉とその文化的背景についての考察 その 2	〃	2000.11
9	日本語とフランス語: 音声と非言語行動	〃	2001.3
10	対照研究と日本語教育	〃	2002.3

日本語教育指導参考書

番号	題目	発行	刊行年月
	国語シリーズ別冊 3 日本語と日本語教育: 発音・表現編 (文化庁との共編)	大蔵省印刷局	1975.3
	国語シリーズ別冊 4 日本語と日本語教育: 文字・表現編 (文化庁との共編)	〃	1976.3
4	日本語の文法(上)	〃	1978.3
5	日本語の文法(下)	〃	1981.3
6	日本語教育の評価法	〃	1979.3
7	中・上級の教授法	〃	1980.3
8	日本語の指示詞	〃	1981.3
9	日本語教育基本語彙 七種比較対照表	〃	1982.3

10	日本語教育文献索引	大蔵省印刷局	1983.3
11	談話の研究と教育Ⅰ	〃	1983.3
12	語彙の研究と教育(上)	〃	1984.3
13	語彙の研究と教育(下)	〃	1985.3
14	文字・表記の教育	〃	1988.3
15	談話の研究と教育Ⅱ	〃	1989.3
16	外来語の形成とその教育	〃	1990.3
17	敬語教育の基本問題(上)	〃	1990.3
18	敬語教育の基本問題(下)	〃	1992.3
19	副詞の意味と用法	〃	1991.3
20	方言と日本語教育	〃	1993.3
21	視聴覚教育の基礎	〃	1995.8
22	日本語教育のための文法用語	財務省印刷局	2001.7

日本語教育ブックレット

番号	題目	発行	刊行年月
1	多言語環境にある子どもの言語能力の評価	国立国語研究所	2002.3
2	日本語教材と著作権 日本語教材と著作権 改訂第2版	〃	2002.3 2006.3
3	日本語教師のための対照研究入門	〃	2003.3
4	第二言語習得の心理学的研究方法	〃	2003.3
5	論理的文章作成能力の育成に向けて	〃	2004.3
6	地域における日本語学習支援	〃	2004.3
7	話しことば教育における学習項目	〃	2005.3
8	作文教育における日本語教師と大学専門教員との 協力のために	〃	2005.3
9	教室活動における「協働」を考える	〃	2007.3

国立国語研究所内部報告書

番号	題目	発行	刊行年月
LR-CCG-06-01	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』短単位 規程集	国立国語研究所	2007.3
LR-CCG-06-02	現代日本語書き言葉の文字数調査	〃	2007.3
SL-SCG-07-01	生活者にとって必要な「ことば」を考える： 平成19年度成果普及セミナー報告書	〃	2008.1
LR-CCG-07-01	コーパスの設計とサンプルの無作為抽出法	〃	2008.3
LR-CCG-07-02	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』にお ける書籍サンプルの多様性	〃	2008.3
LR-CCG-07-03	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』にお ける電子化フォーマット ver. 2.0	〃	2008.3
LR-CCG-07-04	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論 情報規程集	〃	2008.3

SL-SCG-08-01	日本語教育における学習項目一覧と段階的目標基準の開発：中間報告書	国立国語研究所	2009.3
LR-CCG-08-01	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における収録テキストの抽出手順と事例	〃	2009.3
LR-CCG-08-02	語彙密度を利用した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』テキスト分類の試み	〃	2009.3
LR-CCG-08-03	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集	〃	2009.3
LR-CCG-08-04	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報データベースの設計と実装	〃	2009.3
LR-CCG-09-01	JIS X 0213:2004 運用の検証	〃	2009.9
LR-CCG-09-02	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集	〃	2010.2
LR-CCG-10-01	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』におけるサンプリングの原理と運用	〃	2011.2
LR-CCG-10-02	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に含まれるサンプルおよび書誌情報の設計と実装	〃	2011.2
LR-CCG-10-03	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における電子化テキストの構築	〃	2011.2
LR-CCG-10-04	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における電子化フォーマット ver. 2.2	〃	2011.2
LR-CCG-10-05-01	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 上	〃	2011.2
LR-CCG-10-05-02	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 下	〃	2011.2
LR-CCG-10-06	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報データベースの設計と実装	〃	2011.2
LR-CCG-10-07	言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用	〃	2011.2

国立国語研究所国際シンポジウム報告書

題目	発行	刊行年月
世界の国語研究所：言語問題の多様性をめぐって（第1回全体会・専門部会 1994.1.20-21 開催）	凡人社	1996.3
新しい言語理論と日本語（第2回 1994.6.1 開催）	〃	1997.3
多言語・多文化コミュニティのための言語管理：差異を生きる個人とコミュニティ（第2～4回専門部会 1994-96 年度開催）	〃	1997.3
世界の言語教育・日本の国語教育（第3回 1995.6.14 開催）	〃	1997.12
国際社会の日本語（第4回 1996.9.21 開催）	〃	1996.9
東アジアにおける日本語観国際センサス（第4回全体会，第6回，第8回専門部会）	〃	2002.3
国際社会と日本語（第6回 1998.12.16-17 開催）	〃	1999.9
バイリンガリズム（第7回 1999.7.25 開催）	〃	2000.3
日系ブラジル人のバイリンガリズム（第7回第1専門部会 1999.7.24 開催）	〃	2000.3
談話のポライトネス（第7回第4専門部会 1999.12.4 開催）	〃	2001.3

認識のモダリティとその周辺：日本語・英語・中国語の場合 (第7回第6専門部会 2000.3.4 開催)	凡人社	2000.12
多言語・多文化共生社会における言語問題 (第9回第1部会 2001.10.22 開催)	〃	2001.11
Spontaneous speech : data and analysis (自発音声：データと分 析) (第10回第1部会 2002.8.29 開催)	国立国語研究所	2004.3
日本語コミュニケーションの言語問題 (第10回第2部会 2002.9.14 開催)	〃	2003.7
環太平洋地域における日本語の地位 (第10回第3部会 2003.2.1 開催)	〃	2006.3
世界の「外来語」の諸相：標準化・活性化を目指す言語政策 の多様性 (第11回 2004.3.21,23-24 開催)	凡人社	2005.12
世界の日本語研究の新たな発展を求めて(第12回 2004.5.22 開催)	国立国語研究所	2006.3
言語コーパスの構築と活用 (第13回 2006.3.6-7 開催)	〃	2006.3
世界の言語地理学 (第14回 2007.8.22-23 開催)	〃	2007.8

NINJAL フォーラムシリーズ

番号	題目	発行	刊行年月
1	日本の方言の多様性を守るために(国立国語研究所第3 回国際学術フォーラム)	国立国語研究所	2011.3
2	日本語文字・表記の難しさとおもしろさ(国立国語研究 所第4回 NINJAL フォーラム)	〃	2012.6
3	日本語新発見：世界から見た日本語(国立国語研究所第 5回 NINJAL フォーラム)	〃	2013.6
4	グローバル社会における日本語のコミュニケーション：日本語を学ぶことはなぜ必要か(国立国語研究所第 6回 NINJAL フォーラム)	〃	2013.6
5	近代の日本語はこうしてできた(国立国語研究所第7回 NINJAL フォーラム)	〃	2014.7
6	国立国語研究所の日本語研究：ここまで進んだ！ここ まで分かった！(国立国語研究所第9回 NINJAL フォ ーラム)	〃	2016.8
7	世界の漢字教育：日本語漢字をまなぶ(国立国語研究所 第8回 NINJAL フォーラム)	〃	2017.1

コーパス日本語学ワークショップ予稿集

コーパス日本語学ワークショップ予稿集 第1回～第8回	国立国語研究所	2012.3-15.9
----------------------------	---------	-------------

新「ことば」シリーズ

番号	題目	発行	刊行年月
11	豊かな言語生活のために	大蔵省印刷局	2000.7
12	言葉に関する問答集 言葉の使い分け	〃	2000.3
13	「ことば」を調べる考える	財務省印刷局	2001.6
14	言葉に関する問答集 よくある「ことば」の質問	〃	2001.6
15	日本語を外から眺める	〃	2002.5

16	ことばの地域差：方言は今	財務省印刷局	2003.3
17	言葉の「正しさ」とは何か	国立印刷局	2004.3
18	伝え合いの言葉	〃	2005.3
19	外来語と現代社会	〃	2006.3
20	文字と社会	ぎょうせい	2007.3
21	私たちと敬語	〃	2008.3
22	辞書を知る	〃	2009.3

(1999 年度から文化庁に変わり国立国語研究所が編集を担当)

新しい地域文化研究の可能性を求めて

番号	題目	発行	刊行年月
1	日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」5 ユニットの紹介 (特集)	人間文化研究機構	2017.2
3	ことばは文化の源	〃	2018.2
7	地域文化をはくぐむ	〃	2019.3
8	市民とともに地域を学ぶ：日本と台湾にみる地域文化の活用術	〃	2019.3

(人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」による)

広報誌

国語研の窓 第1号～第40号	1999.10-00.7
国語研ことばの波止場 1～5 (継続中)	2017.3-19.3

記念誌等

題目	発行	刊行年月
国立国語研究所三十年のあゆみ：研究業績の紹介	秀英出版	1978.11
国立国語研究所研究の成果 (英文)	〃	1988.12
An Introduction to National Language Research Institute 第1版～第5版	国立国語研究所	1966.4-2009.4
国立国語研究所創立 50 周年記念研究発表資料集	〃	1998.12
国立国語研究所創立 50 周年記念誌	〃	1999.3

書誌・索引等資料

題目	発行	刊行年月
日本語研究文献目録・雑誌編 [フロッピー版] (国語学会との共編)	秀英出版	1989.7
日本語研究文献索引・音韻編 (国語学会との共編)	〃	1994.2
日本語研究文献索引・国語史編 (国語学会との共編)	〃	1996.2
国語国文学資料索引総覧	笠間書院	1995.12

※映像教材及びその関連資料については割愛した。

データベース一覧 (50音順) 2019年8月現在

アイヌ語口承文芸コーパス－音声・グロス付き－
一貫処理プログラム，日本語情報処理プログラム集
Web 茶まめ (安定版)
Web データに基づく形容詞用例データベース (開発版)
Web データに基づくサ変動詞用例データベース (開発版)
Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版)
X 線映画 「日本語の発音」
岡崎敬語調査データベース
沖縄語辞典 データ集
オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス

海外における日本語研究文献目録
外来語定着度調査
外来語に関する意識調査 (全国調査)
外来語に関する意識調査Ⅱ (全国調査)
学術情報交換用変体仮名
「学校の中の敬語」アンケート調査データ
擬音語って？擬態語って？－日本語を楽しもう！
基礎日本語活用辞典 (インドネシア語版)
基本動詞ハンドブック
行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査 (自治体調査)
近代語のコーパス
言語地図データベース
現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)
語彙調査データ
コーパスアノテーションの基礎研究
コーパス検索アプリケーション『中納言』
国語学研究文献総索引データ
国語研日本語ウェブコーパス
「国語力観」に関する全国調査
国立国語研究所が行った世界の言語研究機関調査
国立国語研究所 学術情報リポジトリ
国立国語研究所 刊行物データベース
国立国語研究所 研究資料室収蔵資料
国立国語研究所 蔵書目録データベース
甕島方言アクセントデータベース
ことばに関する新聞記事見出しデータベース

作文支援システム TEachOtherS
雑誌『国語学』全文データベース
使役交替言語地図 (WATP)
社会言語学関係報告書総合索引
首都圏の言語の実態と動向に関する研究
全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成
全国方言分布調査 (FPJD)・新日本言語地図 (NLJ)
全文検索システム『ひまわり』

大英図書館蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像
多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)
「ChaKi.NET」用ライセンスフリーデータ
中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス (C-JAS)
鶴岡調査データベース
ディスカッション観察支援ツール FishWatchr
寺村誤用例集データベース
寺村秀夫連体修飾論文英訳集
統語・意味解析情報付き現代日本語コーパス (NPCMJ)
トピック別アイヌ語会話辞典

『日本言語地図』地図画像
『日本言語地図』データベース (LAJDB)
日本語学習者会話ストラテジーデータ
日本語学習者会話データベース
日本語学習者会話データベース 縦断調査編
日本語学習者による、日本語・母語対照データベース
日本語学習者の日本語使用の解明 (BTSJ)
日本語観国際センサス
『日本語教育のための基本語彙調査』データ
日本語研究・日本語教育文献データベース
日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵]
日本語史研究用テキストデータ集
日本語話し言葉コーパス
日本語非母語話者の読解コーパス
日本語ブックレット
日本語歴史コーパス (CHJ)
「日本の消滅危機言語・方言」データベース
NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)

発声発語訓練例文集

BCCWJ 全文検索サイト『少納言』

ビデオ刺激による言語行動意識調査

『ひまわり』用データ作成支援ツール えだまめ

「病院の言葉」にかかわる調査

複合動詞レキシコン

物類称呼データベース

分類語彙表－増補改訂版データベース

米国議会図書館蔵『源氏物語』画像 (桐壺・須磨・柏木)

米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文

方言研究の部屋 データとプログラム

『方言談話資料』データ

『方言文法全国地図』地図画像

方言ロールプレイ会話データベース

『方言録音資料シリーズ』データ

北米における日本関連在外資料目録

宮古島西原地区デジタル博物館

名大会話コーパス

UniDic

『幼児・児童の連想語彙表』データ

連濁データベース・上代語連濁データベース

フコト点図データベース

創立記念事業実施委員会刊行物部会

高田智和
松本 曜
山崎 誠

国立国語研究所の歩み

—創立 70 周年・人間文化研究機構移管 10 周年—

発行 令和元年 10 月 1 日

国立国語研究所創立記念事業実施委員会

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

URL : <https://www.ninjal.ac.jp/>



伝える・育てる 言葉の未来

国立国語研究所

創立70周年・人間文化研究機構移管10周年